

福岡市

ARI TA KO TA BE
有田・小田部

第36集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第684集

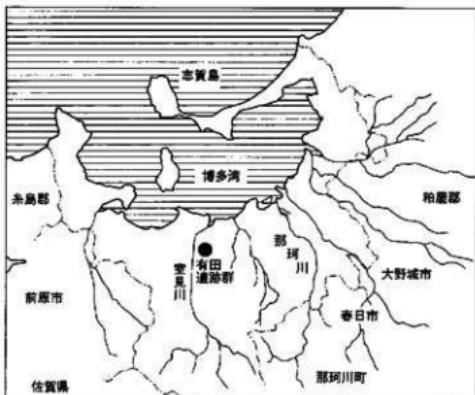
2001

福岡市教育委員会

福岡市
ARI TA KO TA BE
有田・小田部

第36集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第684集



調査番号 8655-9132-9527
遺跡略分 ART -115-168-180

2001

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を挟んで大陸とは一衣帶水の位置関係にあり、古代から大陸文化の受け入れ窓口として栄えて来たところです。

特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が数多く包蔵され、早良王墓で有名な吉武高木遺跡や弥生時代後期の環濠集落として国指定史跡となっている野方遺跡など重要な遺跡があります。

この平野の北部に位置する有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、昭和41～43年にかけての区画整理事業に伴う調査以来、現在まで200次を数える調査が行われ、弥生時代前期初めの環濠集落や古墳時代の集落、奈良時代の早良郡衙跡と思われる大型建物群、戦国時代の小田部城に関連する塗跡などの重要な遺構が発見され、学会の注目を集めています。

今回の調査は有田遺跡群で、昭和61・平成3・7年度に行われたもので、後期旧石器時代の遺物から弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡、古代から中世の製鉄遺構などが発見されました。

今回の調査に際しましては、地権者を始め、関係各位の皆様に多大なご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。併せて本書が、埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

- (1). 本書は早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和61・平成3・7年度に国庫補助を受けて実施した、第115次・168次・180次調査の報告書である。
- (2). 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。
- (3). 調査は以下のものが担当した。

昭和61年度 第115次調査・・・米倉秀紀・山崎龍雄
 平成3年度 第168次調査・・・山崎龍雄
 平成7年度 第180次調査・・・加藤良彦
- (4). 本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原ユリ子、金子由利子・宮原邦江が行い、写真撮影は各担当者が行った。遺物の実測は第115次が山崎と一部米倉・星野恵美・平川敬治が、第168次が山崎、第180次が山崎賀代子が行った。
 トレイスは第115次・168次が山崎と大賀順子、大神真理子が行い、第180次は山崎賀代子が行った。遺物の写真撮影は山崎と加藤が行った。
- (5). 遺構記号は、福岡市の遺構略号によっている。
 SA…櫛、SB…掘立柱建物、SC…豊穴住居跡、SD…溝状遺構、SE…井戸、SK…土坑、SR…土坑墓・木棺墓、ST…甕棺墓、SP…ピット、SX…その他の遺構
- (6). 本書に使用した方位は磁北と国土座標北がある。磁北は座標北より6度30分西偏する。
- (7). 第115次調査出土の鉄滓についてはたたら研究会九州委員の大澤正巳氏と埋蔵文化財課の長家伸氏に分類をお願いした。また旧石器については大規模調査担当の吉留秀敏氏に鑑定をお願いした。
- (8). 本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。
- (9). 本書の執筆は第115次・168次調査が山崎、第180次調査が加藤が行い、編集は山崎が行った。

有田遺跡群第115次・168次・180次調査概要

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地 地番	(m ²) 申請面積	(m ²) 調査面積	申請者	調査期間	事前審査番号
有田 第115次	8655	ART -115	早良区有田3丁目 8-53	832	487	松口秀正	890204～ 890519	61-2-14
有田 第168次	9132	ART -168	早良区小田部5丁目 154-1	496	455	江口香月	911022～ 911211	2-2-462
有田 第180次	9527	ART -180	早良区小田部3丁目 156-5、7、8	759	231	守田恒彦	950912～ 951009	7-2-252

本文目次

	本文頁
第1章 はじめに.....	1
1) 調査にいたる経過.....	1
2) 調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
1) 遺跡の立地.....	2
2) 歴史的環境.....	2
第3章 第115次調査の記録.....	5
1) 調査の概要.....	5
2) 造構と遺物.....	5
3) 小結.....	29
第4章 第168次調査の記録.....	31
1) 調査の概要.....	31
2) 造構と遺物.....	31
3) 小結.....	52
第5章 第180次調査の記録.....	53
1) 調査区の地形と概要.....	53
2) 造構と遺物.....	55
3) 小結.....	70

図版目次

- 図版扉…………有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）
- PL. 1 ……(1)第1区第1面全景(南西から) (2)第1区第2面全景(南西から)
(3)第1区第3面全景(南西から)
- PL. 2 ……(1)第2区遺構面全景(西から) (2)第2区遺構面南側(西から)
- PL. 3 ……(1)SD02方形周溝状遺構(南から) (2)第1区 SD02方形周溝状遺構検出状況(南から)
(3)土器群検出状況(東から) (4)土器群検出状況(北から) (5)SE01(南から)
(6)SE02(西から)
- PL. 4 ……(1)SE03(東から) (2)SK01(北から) (3)SK02(西から) (4)SK04(西から)
(5)SX03不定形土坑(南から) (6)滑石製錘出土状況 (7)SD03(北から)
- PL. 5 ……(1)SX01製鉄遺構(西から) (2)SX02製鉄遺構(南から)
(3)同炉底塊出土状況(南から) (4)第1面鉄滓出土状況(SX01上面)
(5)製鉄関連遺物1(縮尺不統一)
- PL. 6 ……(1)製鉄関連遺物2(縮尺不統一) (2)各遺構出土遺物1(縮尺不統一)
- PL. 7 ……各遺構出土遺物2(縮尺不統一)
- PL. 8 ……(1)調査区北側遺構全景(南から) (2)調査区南側遺構全景(西から)
- PL. 9 ……(1)SB23(北西から) (2)SC13(北から) (3)SC14(南東から) (4)SC15(西から)
(5)SC17・21(北から) (6)SC17貼床除去後(北から)
- PL. 10 ……(1)SC14内土坑SK22(南東から) (2)SC17内土坑 SK20(北から) (3)SK08(南から)
(4)SK10(南東から) (5)SK12(北から) (6)SK16(北東から) (7)SK18(北から)
(8)SK26(北東から)
- PL. 11 ……(1)SD01・04(西から) (2)SD02・04・11(南西から) (3)SD02(南西から)
(4)SD01土層ベルト(西から) (5)SD01西壁土層(東から)
(6)SD02・11土層ベルト(南から) (7)SD01検出砾群
- PL. 12 ……各遺構出土遺物(縮尺不統一)
- PL. 13 ……(1)調査区からの遠望(南から) (2)調査区全景(南から)
- PL. 14 ……(1)調査区北壁土層断面(南から) (2)SC11(北から) (3)SC09(北から)
(4)SC09遺物出土状況(南東から) (5)SC09甕出土状況(北東から)
- PL. 15 ……(1)SC09床面石層出土状況(西から) (2)SC07(南西から) (3)SC07甕部分(南西から)
(4)SC07甕上層断面(南から) (5)SC15(南西から) (6)SK01(南から)
- PL. 16 ……(1)SK02(南から) (2)SK03(南から) (3)SK06(北から) (4)SK08(南から)
(5)SK04土層断面(南西から) (6)SK05土層断面(西から)
- PL. 17 ……(1)SP01柱穴検出状況(南から) (2)SP01(東から) (3)SP02上層断面(西から)
(4)SP02(南から) (5)SK10柱穴検出状況(南東から) (6)SK10(北から)
- PL. 18 ……(1)SD13土層断面(北から) (2)SD13(南東から) (3)SC11出土遺物
- PL. 19 ……(1)SC09出土土器 (2)SC09出土石器
- PL. 20 ……(1)SC09床面出土滑石玉類 (2)SC09土壤出土滑石玉類
- PL. 21 ……(1)SC07出土土器 (2)土壤出土遺物 (3)包含層出土土器 (4)包含層出土石器
- PL. 22 ……(1)その他の出土土器 (2)その他の出土石器

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1 有凹遺跡群と周辺遺跡 (1/25,000)	3
Fig. 2 有凹遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)	4
Fig. 3 遺構全体図 (1/200)	6
Fig. 4 調査区北側第1面・第2面遺構全体図 (1/200)	7
Fig. 5 調査区各層上層図 (1/60)	8
Fig. 6 SD02方形周溝状遺構 (1/60)	9
Fig. 7 SD02上面土器群出土遺物1 (1/3)	10
Fig. 8 SD02上面土器群出土遺物2 (1/4)	11
Fig. 9 SK01~04・06 (1/40)	13
Fig. 10 SE01~03 (1/40)	14
Fig. 11 SX03不定形土坑 (1/60)	15
Fig. 12 SX01・02・07製鉄遺構 (1/30)	16
Fig. 13 調査区出土羽口 (1/3)	16
Fig. 14 調査区出土製鉄関連遺物1 (1/4)	17
Fig. 15 調査区出土製鉄関連遺物2 (1/4)	18
Fig. 16 溝出土遺物 (1/3)	19
Fig. 17 ピット・擾乱土坑出土遺物 (1/3)	20
Fig. 18 遺構面出土遺物 (1/3)	20
Fig. 19 包含層上層出土遺物1 (1/3)	21
Fig. 20 包含層上層出土遺物2 (1/3・1/4)	22
Fig. 21 包含層下層出土遺物 (1/3)	23
Fig. 22 各遺構出土石器・石製品 (1/3・2/3)	24
Fig. 23 各遺構出土砥石と鉄製品 (1/3・1/2)	25
Fig. 24 各遺構出土旧石器 (1/1)	26
Fig. 25 各遺構出土旧石器と縄文時代石器 (1/1・2/3)	27
Fig. 26 第168次調査遺構全体図 (1/200)	32
Fig. 27 SC13・14 (1/60)	34
Fig. 28 SC15・17・21 (1/60)	35
Fig. 29 各住居跡出土遺物 (1/3・1/1)	36
Fig. 30 SB23・SA05 (1/80)	37
Fig. 31 SK08・10・12・16・18・26 (1/40)	38
Fig. 32 各土坑出土遺物 (1/3)	40
Fig. 33 各溝土層図 (1/40)	41
Fig. 34 SD01出土遺物1 (1/3)	42
Fig. 35 SD01出土遺物2 (1/3)	43
Fig. 36 SD01出土遺物3 (1/3)	44
Fig. 37 SD01出土遺物4 (1/3・2/3)	45

Fig. 38	SD01出土遺物5 (1/3)	46
Fig. 39	SD01出土遺物6 (1/4)	47
Fig. 40	各溝出土遺物 (1/3・1/2・1/4)	49
Fig. 41	SP56・69 (1/30)	50
Fig. 42	ピット出土遺物 (1/3)	50
Fig. 43	各遺構出土石器 (1/3・1/1)	51
Fig. 44	第180次調査区地形図 (1/1000)	53
Fig. 45	遺構全図 (1/120)	54
Fig. 46	SC11実測図 (1/60)	55
Fig. 47	SC11出土遺物実測図 (1/3・3/4)	56
Fig. 48	SC09・屋内土壤実測図 (1/60・1/30)	57
Fig. 49	SC09出土遺物実測図1 (1/4・1/3)	58
Fig. 50	SC09出土遺物実測図2 (1/1・1/3)	59
Fig. 51	SC07実測図・竪上層断面実測図 (1/60・1/40)	60
Fig. 52	SC07出土遺物実測図 (1/4)	61
Fig. 53	SC15実測図 (1/60)	61
Fig. 54	中世土壙実測図 (1/40)	62
Fig. 55	土壙・流路出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)	63
Fig. 56	近世土壤実測図 (1/40)	63
Fig. 57	立柱実測図 (1/40)	64
Fig. 58	SD13上層断面実測図 (1/40)	65
Fig. 59	調査区北壁土層断面実測図 (1/100)	65
Fig. 60	包含層出土遺物実測図1 (1/3・1/4)	66
Fig. 61	包含層出土遺物実測図2 (1/2・1/3)	67
Fig. 62	その他の出土遺物実測図1 (1/3・1/4)	68
Fig. 63	その他の出土遺物実測図2 (3/4・2/3・1/3)	69

第1章 はじめに

1) 調査に至る経過

通称今治新道の国道202号線の開通と福岡市営地下鉄1号線の開通は、小田部大根の産地として有名であった、近郊農村地帯の有田・小田部・南庄地区を一変させた。沿線には店舗や共同住宅、民家などが立て込み市街化し、往時の面影を見ることは難しくなってしまった。

有田・小田部・南庄地区に所在する有田遺跡群は福岡市では重要遺跡として、昭和52年度から個人住宅のような小規模開発についても埋蔵文化財の審査を行い、個人住宅については国庫補助事業として発掘調査を行っていた。

今回報告する3カ所の調査は、いずれも個人住宅建設に伴うもので、その年度の国庫補助金を受けて実施したものである。調査に際しては、申請者を初めとして、多くの方々に協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2) 調査の組織

発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 第115次調査 埋蔵文化財課長 柳田純孝（現文化財部長）
第168次調査 埋蔵文化財課長 折尾 学（現埋蔵文化財センター所長）
第180次調査 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

事務担当 第115次調査 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄（庶務）岸田 隆
第168次調査 同 第1係長 飛高憲雄（庶務）中山昭則
第180次調査 同 第1係長 横山邦雄（庶務）内野保基
現在 同 調査第1係長 山口謙治（庶務）御手洗 清

調査担当 （第115次調査） 山崎龍雄・米倉秀紀（第168次調査） 山崎龍雄
（第180次調査） 加藤良彦

調査作業 （第115次調査） 有富滋子、板倉文子、井上紀世子、緒方マサヨ、金子由利子、神尾順次、
清原ユリ子、合屋龍介、後藤ミサヲ、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、高浜謙一、
土斐崎初栄、徳永ノブヨ、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾和雄、
松尾玲子、三浦義隆、宮原邦江、吉村哲美、吉岡田鶴子、萬スミヨ

（第168次調査） 有富滋子、井上紀世子、緒方マサヨ、清原由利子、佐藤テル子、柴田勝子、瀬戸啓治、
土斐崎初栄、西尾タツヨ、西畠盛行、平井和子、堀川ヒロ子、松井邦子、宮原邦江、吉岡田鶴子、
若狭睦代

（第180次調査） 上野道郎、大穂アサ子、大穂栄子、大穂ヤス子、坂本隆二、杉村文子、高木陽子、
東島直美、永井ユリ子、永末京子、林末孝、林千世子、平田信吉、平野義光、牧之口豊子、吉岡真代、
吉岡清巳

整理作業 （第115・168次調査） 平川啓治、蜂須賀博子、大賀順子、大神真理子、清水啓子

（第180次調査） 山崎賀代子、芦馬恵美子、木村厚子、国武真理子、窪田慧

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1) 遺跡の立地

有田遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野と呼ぶ小平野に所在する遺跡である。この平野は早良区と西区の東半分に広がり、博多湾沿岸部の海岸砂丘と室見川水系によって形成された沖積地から構成されている。平野の西側は飯盛山から長垂丘陵、東側は鴻巣山、油山山塊、南側は背振山系で限定されている。

有田遺跡群は平野の北側、室見川右岸にある最大標高15mを測る独立中位段丘上に立地している。この段丘は室見川や金屑川による浸食を受け、北に八手状に台地が広がる独特な形状を呈している。台地の規模は南北長約1.7km、東西最大幅約0.8kmを測る。台地中央部の有田1・2丁目を最高所として、北に緩やかに傾斜している。第115次は台地の南端、第168次は北西端、第180次は中央部西縁に位置している。

2) 歴史的環境 (Fig.1)

有田遺跡群が所在する早良平野は古くから開けた地域で、数は少ないが旧石器時代から遺跡が知られている。台地・丘陵上に遺跡は立地し、上な遺跡は吉武高木遺跡や本遺跡などである。

縄文時代早期から前期にかけての古い時期の遺跡は平野最奥部の内野地区や山沿いの台地部に分布する。時代が新しくなるにつれて、遺跡は海岸近くの低地部まで進出していくが、進出限界は有田から福重あたり迄である。主な遺跡として内陸部の四箇遺跡、田村遺跡、東入部遺跡、松木田遺跡などがある。

弥生時代になると遺跡は海岸砂丘部まで広がる。初期の遺跡は本遺跡や拾六町平田遺跡、石丸古川遺跡などが知られ、博多区の板付遺跡とは同時期の環濠集落が本遺跡で見つかっている。また吉武遺跡では弥生時代前中期から中期にかけての、多くの副葬品を持つ墓塚墓・木棺墓などが調査され、弥生時代のクニの王墓と考えられている。平野内には吉武遺跡や有田遺跡など地域の核となる拠点集落がいくつか存在している。後期後半頃には平野西側の野方遺跡では環濠に囲まれた大規模な集落が確認されている。

古墳時代の遺跡は前時代とほぼ同様の範囲に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡では方形周溝墓が調査され、主体部から三角縁神獣鏡が出土している。また今は消滅したが、海岸部の五島山では前期の古墳が調査されている。前方後円墳は少なく、拌塚古墳や横渡古墳、梅林古墳、羽根戸南古墳群などが知られているだけである。後期の群集墳は東西の山沿いに多数造られている。大規模な集落遺跡としては本遺跡以外では西新町遺跡、藤崎遺跡、原遺跡、野方遺跡などがある。

歴史時代になると、古代は早良郡となる。早良郡には7郷あり、本遺跡は田部郷にある。また有田地区ではこの時期の大型建物群が検出されており、早良郡衙の可能性が指摘されている。

戦国時代になると油山西側の荒平山山頂に安楽平城が築かれ、戦国大名の大友氏、大内氏の早良郡支配の拠点となつた。16世紀後半には大友氏の被官の小田部氏が安楽平城主となるが、江戸時代の『筑前国続風土記拾遺』には小田部氏の里城が有田村にあったと書かれており、有田の小田部城がそれではないかと考えられる。



Fig. 1 有田遺跡群と周辺遺跡 (1/25,000)

1. 有田遺跡群 2. 有田七田前遺跡 3. 原遺跡群 4. 原談儀遺跡 5. 原深町遺跡
 6. 飯倉原遺跡 7. 飯倉唐木遺跡 8. 飯倉遺跡群 9. 十眾古墳 10. 免遺跡群
 11. 野芥大藏遺跡 12. 次郎丸高石遺跡 13. 山村遺跡群 14. 橋本櫻田遺跡 15. 吉武遺跡群
 16. 四箇遺跡群 17. 拝塚古墳 18. 梅林古墳

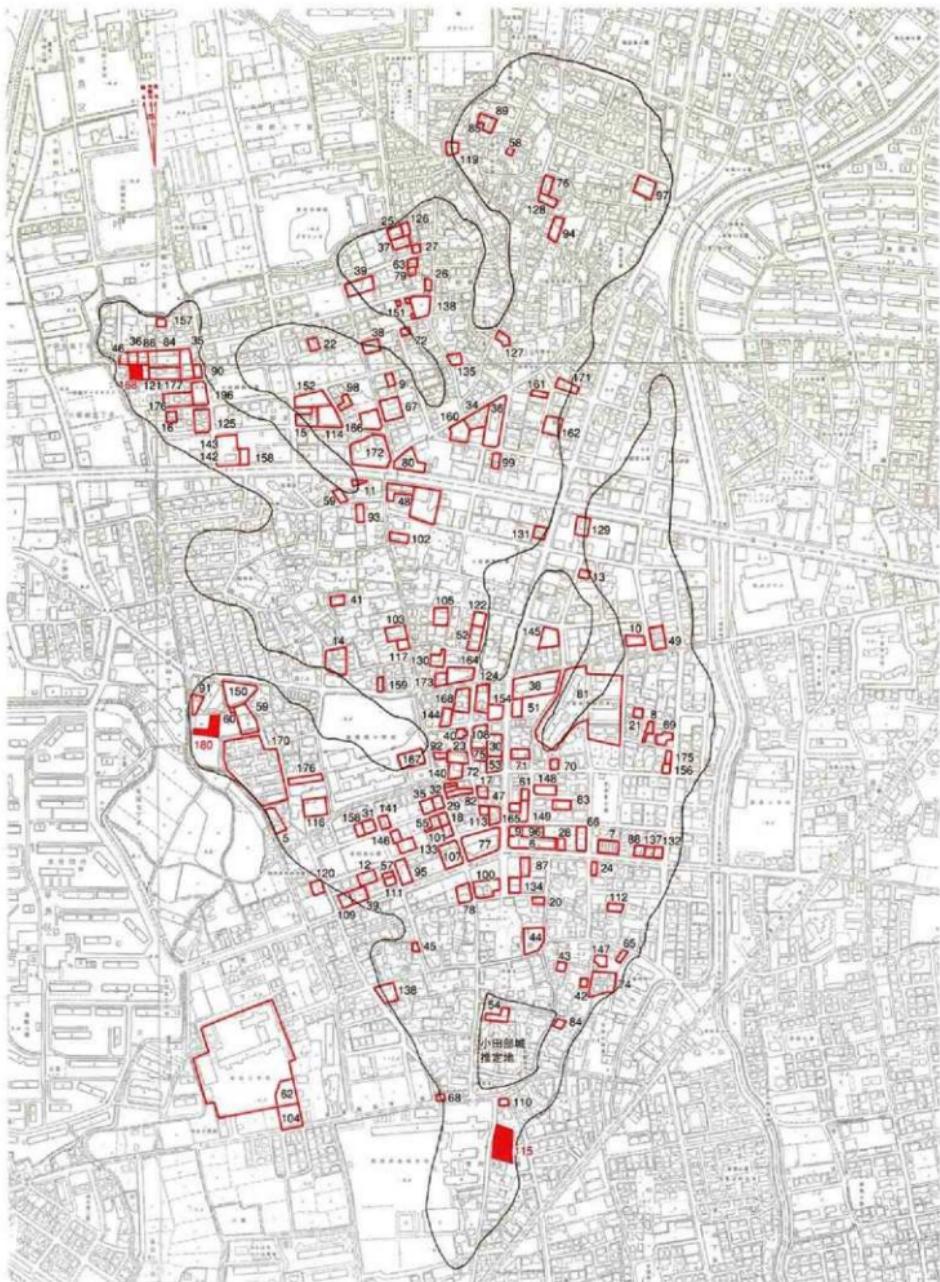


Fig. 2 有田遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)

第3章 第115次調査の記録（調査番号8655）

1) 調査の概要

本調査区は早良区有出3丁目8-53に所在する。北に向かって八手状に広がる台地の一一番南側の東斜面上に立地する。調査区周辺は余り調査が行われていないが、調査区北側には第110次調査、西側の西福岡高校では昭和21年の体育館建設工事に伴って、金海式豪棺墓が見つかり、その中から副葬品の細形鋼戈が出土している。また北側の宝満宮あたりは小田部城推定地とされており、西福岡高校周辺は築城（月城、城の出城の意味）と言っていた。

今回の調査は地権者から自宅建設の申請があった為、昭和62年2月4日～3月16日の北側第1区と、4月13日～5月19日の南側第2区の2期に分けて調査を行った。全体の調査面積は487m²である。遺構面は西側では表土直下で検出したが、東側に向かって深くなり、包含層が厚く堆積する。特に第1区の包含層が厚く、その間に2面の生活面を確認出来た。その面を上から第1面、第2面とする。第1面は黒褐色粘質土上面で、第2面は黒色土上面で確認した。主な遺構としては方形周溝状遺構1基、土坑5基、井戸3基、溝2条、製鉄遺構などである。調査区には最近まで病院が建っており、2区ではそれに伴う擾乱土坑があり、その中からは病院関係の遺物などが出土している。遺物は包含層から上に出土したが、後期旧石器時代からの遺物も出土している。

2) 遺構と遺物

1. 方形周溝状遺構

SD02 (Fig.6, PL.3-(1)) 調査区東側Ⅰ区とⅡ区の境で検出した方形に巡ると思われる溝。北側では途中で溝が途切れるが、遺構の残りが余り良くないため、ここで溝が終わるのかは不明。南側の溝の続きは東境界地にかかり不明。規模は南北6.6m、東西3.8m以上を測る。溝内径では5.45mを測る。溝の断面は逆台形を呈し、その幅は北側で35cm程、南側で80cm程で、深さも北側で4cm、南側で40cmで、南側程遺構の残りは良い。埋土は黒色粘質土で黄橙色地山ロームブロックを含む。南側溝上面では古墳時代初め頃の土器（土器群A・B）が潰れた状況で出土している。

出土遺物 (Fig.7-16-22, PL.6-(2)) 清内からは弥生土器片や土師器片が少々と須恵器片が2点、黒曜石の石鏃が1点出土しているが、遺構としては最下面で検出しているので、須恵器は混入品の可能性がある。2は土器群B出土。他は土器群A出土である。

1は壺1/3片。偏球状の肩部を持ち、口縁部が外へやや開く形態。復元口径13.1cm、器高16.3cm、最大胴径20.6cmを測る。器表面はやや磨滅するが、肩部外面は細かいハケ、内面は丁寧なナデで、口縁から肩部にかけてはハケ日々かすかに残る。色調は明赤褐色で、胸部中央に煤が付着する。胎土は精良。2は中型の壺底1/2片。最大胴径26.8cmを測る。外部外面は部分的にハケ目が残る。内面はハケ後ナデ。色調は淡黄橙色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。3～5は壺。3は小型壺1/4片で、口縁端部は内側に軽く段を有す。復元口径は16.6cm、最大胴径16.4cmを測る。内外面ハケで、口縁外面はハケ後ナデ。色調は暗褐色を呈す。4・5は中型の長胴の壺。いずれも口縁部が外反して開く。胸部外面は斜めの印きで、4の下半は板ナデ、胸部内面は斜めハケ。4は1/2片で復元口径19.5cm、器高25.0cm、最大胴径19.6cmを測る。5は底部を欠失する1/2片。復元口径26.8cm、最大胴径19.4cmを測る。色調は4が明褐色、5がにぶい橙色でいずれも黒斑を持つ。6は壺1/2片。復元口径は11.2cm、

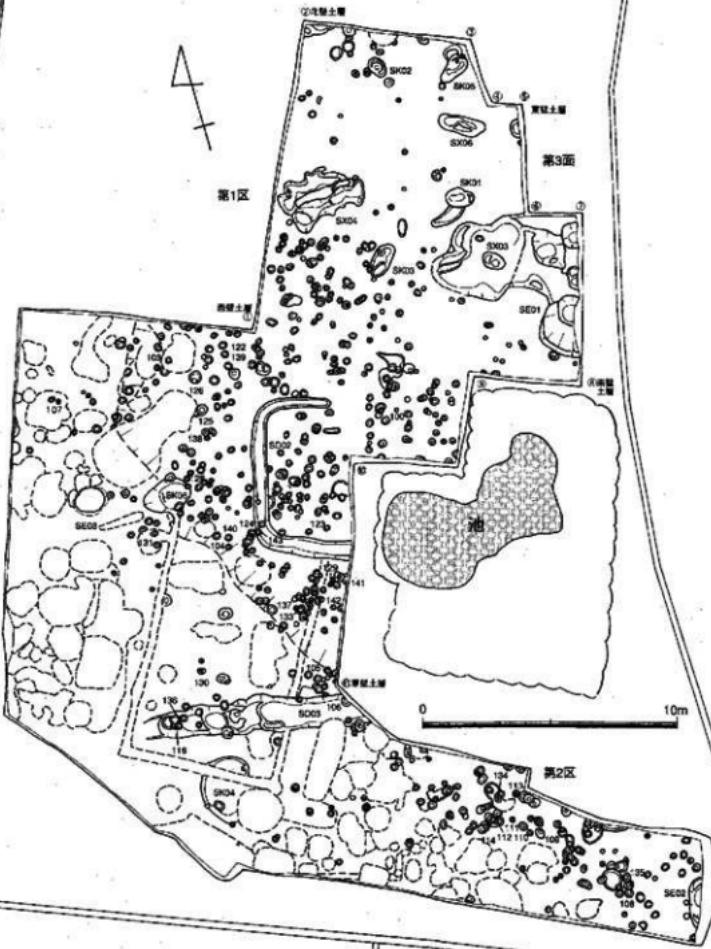


Fig. 3 遺構全体図 (1/200)

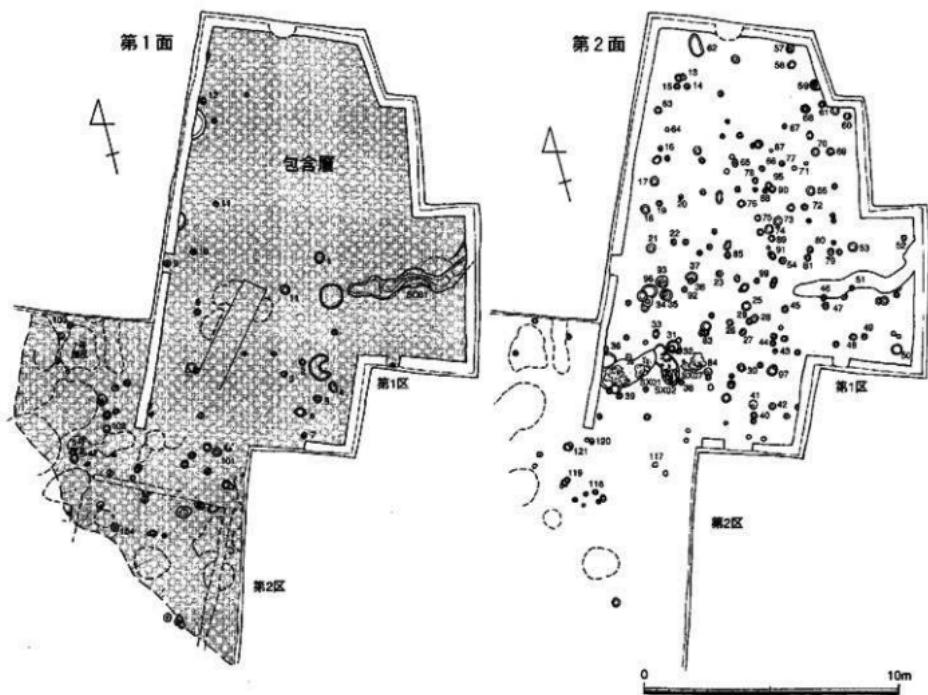


Fig. 4 調査区北側第1面・第2面遺構全体図 (1/200)

器高3.4cmを測る。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。7は高壊2/3片。口径25.7cm、器高14.5cm、脚端径14.3cmを測る。脚部に3カ所直径5mm程の透かし孔がある。壊部外面は斜めハケ後ナデ消し、内面は丁寧なナデ。脚部外面は細かいハケ、内面はヨコハケ、筒部はヘラナデ。色調はにぶい橙色、胎土は粗砂粒を多く含む。8は大型の壊胴部片。復元胴径は約43cmを測る。蛇行する幅広の突帯が1条付く。外面上半は粗いハケ、下半は平行叩き、内面はハケ。色調は黒褐色から黄褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含み、厚手で質感感がある。31は土師器の蓋と思われる小片。復元径は27.6cmを測る。調整はナデで内面にはハケ目が残る。色調はにぶい黄橙色で、胎土は精良、金雲母を含む。中世の土師質土器に近い。131は黒曜石の右鎌。先端を欠損する。残存長1.3cm、幅1.95cm、厚さ3.5cmを測る。

2. 土坑 (SK)

調査区で検出したのは5基である。いずれも地山面で検出している。

SK01 (Fig.9, PL4-(2)) 第1区の第3面で検出した平面形がダルマ状の土坑。規模は長軸長1.13m、短軸長0.77m、最大深さ50cmを測る。東側には半円形の張り出しが付く。埋土は黒色土で暗黄褐色土ブロックを含む。出土遺物はない。

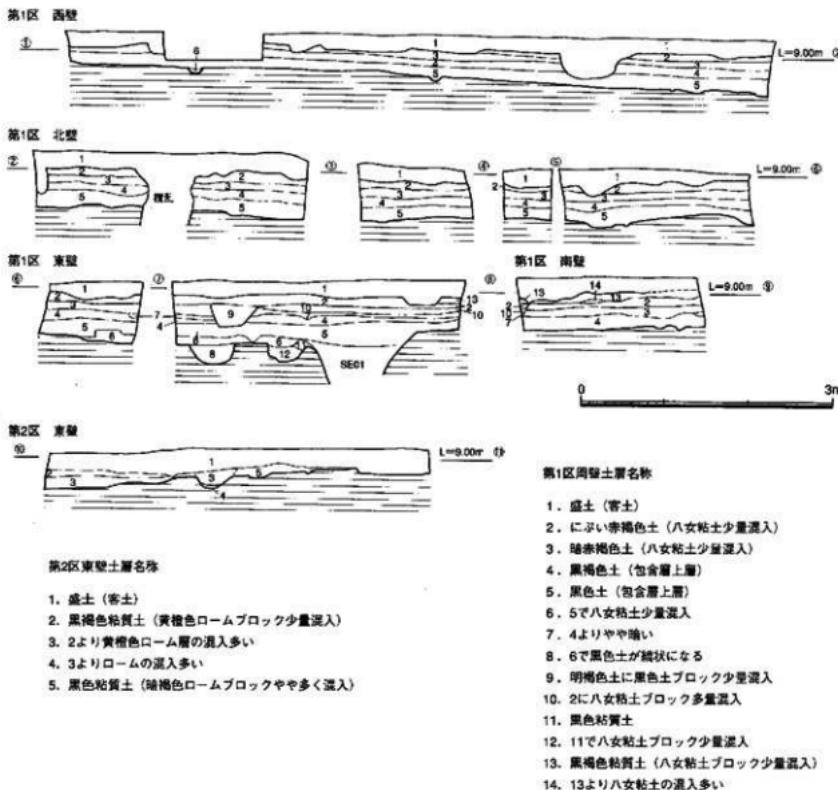


Fig. 5 調査区各壁土層図 (1/60)

SK02 (Fig.9, PL4-(3)) 第1区第3面北側で検出した平面が橢円形状の土坑。規模は長軸長1.5m、短軸長0.58mを測る。底面は一段深くなりその最大深さは77cmを測る。埋土は黒色土で暗褐色「ブロックを含むが下層程多くなる。出土遺物はない。

SK03 (Fig.9) 第1区第3面の中央で検出した平面形が不整橢円形状を呈す上坑。規模は長軸長1.4m、短軸長0.73m、深さは15cmを測る。両側に一段高いテラスを有す。埋土は黒色土で黄色土ブロックを含む。七遺物はない。

SK04 (Fig.9, PL. - (4)) 第2区南側で検出した平面が橢円形状を呈す浅い土坑。規模は長軸長2.45m、短軸長1.83m、深さは15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色地山ローム土を含む。出土遺物は中世前半の土器器の「」が少量である。

SK06 (Fig.9) 第2区で検出した平面形が不定形を呈す底面がだらだらと窪む土坑。規模は長軸長が1.85m、短軸長が1.35m、深さは10cmを測る土坑。埋土は暗褐色土に黒色土を含む。出土遺物は

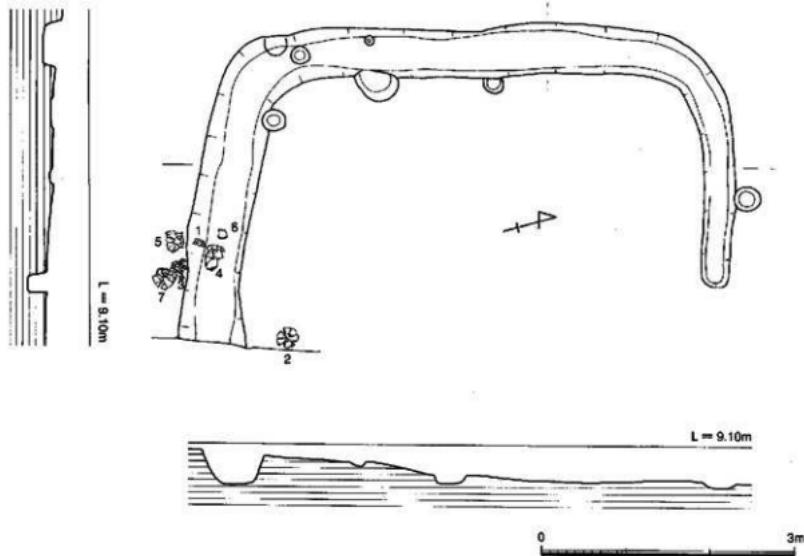


Fig. 6 SD02方形周溝状遺構 (1/60)

須恵器や中世土師器、近代にかかる陶磁器や瓦が少量出土している。

3. 井戸状遺構 (SE)

全体で3基確認した。出土遺物が少なく時期は特定しづらい。

SE01 (Fig.10, PL3-(5)) 第1区第3面東壁にかかる。平面が不整円形状を呈し、北側が一段円形状に深くなる。確認規模は上面で長軸長2.35m、短軸長1.6m以上を測る。深さは北側が南から1.5m程深くなる。埋土は黒色粘質土で八女粘土ブロックを少量含む。形態から井戸としたが、全容を把握していないので断定は出来ない。出土遺物は弥生時代中期後半以降の土器細片が少量と黒曜石剥片、石核が1点出土している。

SE02 (Fig.10, PL3-(6)) 第2区南東側で検出した東壁にかかる井戸。ごく一部で全体の規模は不明。地山ローム面で遺構は確認したが、土層からは包含層中からの切り込みが確認出来る。確認規模は地山面で2m以上、包含層確認面では2.2mを測り、深さは包含層面からは1.1mを測る。底面は北側に狭いテラスを持ち、南側壁面には水によって抉られたような痕跡が見られる。出土遺物は古代から中世にかかる黒色土器碗や土師器の細片が少量と、黒曜石剥片、旧石器の剥片が出土している。

SE03 (Fig.10, PL4-(1)) 第2区で検出した平面形は不整円形を呈する井戸。規模は長径12m、短径0.97mを測る。深さは1.25mを測る。壁面は50cmの深さから全体に抉れており、水による浸食と思われる。埋土は黒色粘質土が主体で地山ロームブロックを多く含む。出土遺物はない。

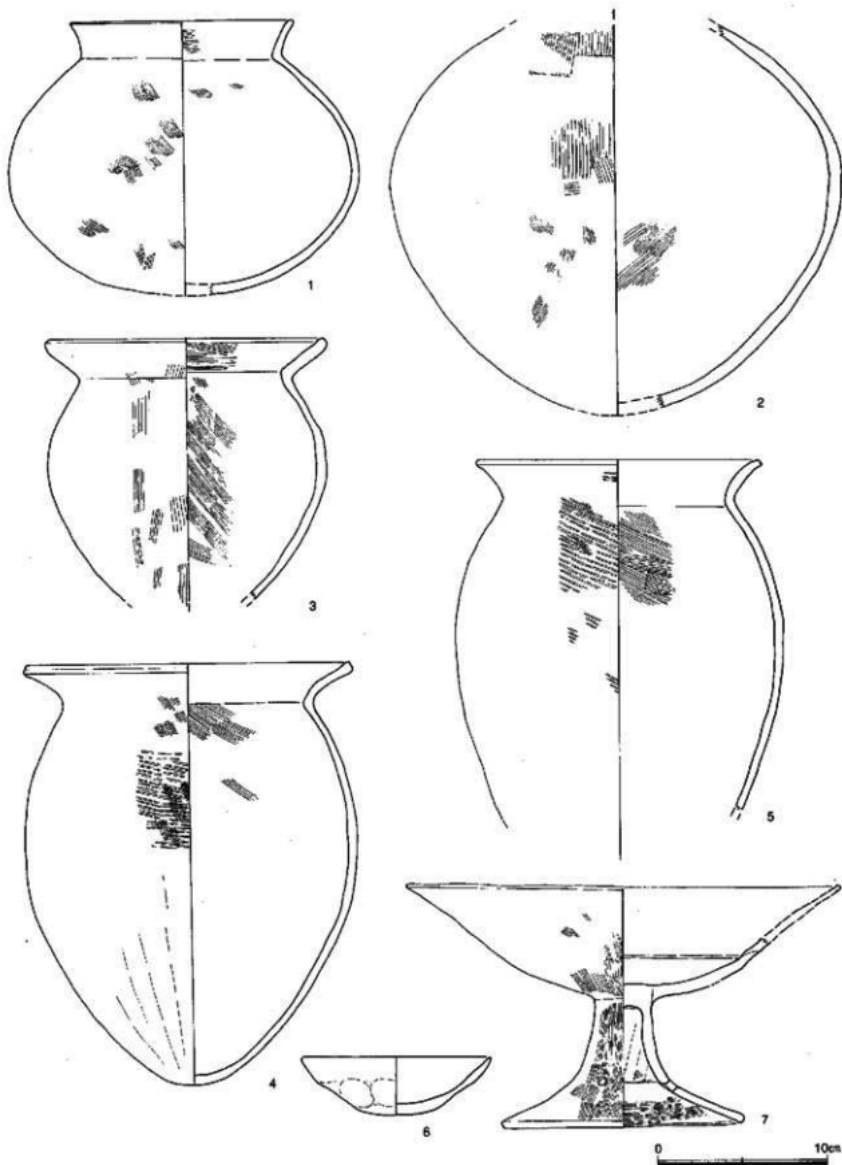


Fig. 7 SD02上面土器群出土遺物 1 (1/3)

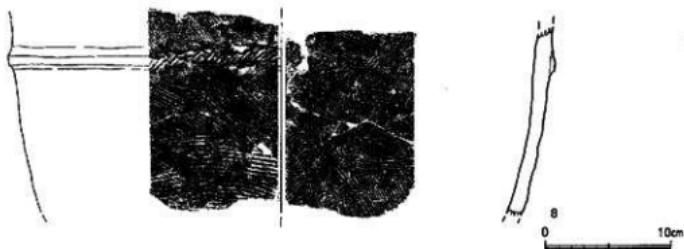


Fig. 8 SD02上面出土土器群出土遺物 2 (1/4)

4. 不定形土坑 (SX)

第1区第3面で検出した不定形状の土坑で4基確認しているが、主なものを報告する。

SX03 (Fig.11, PL4-(5)) 東壁にかかる不定形状の大型土坑確認規模は長軸長6m以上、短軸長3.3m、最大深さ90cmを測る。底面は凹凸があり、いくつかの造構が重なっている可能性がある。埋土は黒色土を主体とし黄色ロームブロックを含む。

出土遺物 (Fig.22) 磨製石斧片、作業台石、旧石器時代のものと思われる黒曜石剥片、円形の叩石や鉄滓が少量出土している。125は蛤刃の磨製石斧刃部片。残存長8cm、幅7.6cmを測る。表面には敲打調整痕が残る。石材は砂岩。130は作業台石か。最大幅18.8cm、最大長14.6cm、厚さ8.2cmを測る。上面は平坦でやや磨滅する。石材は花崗岩。

SX04は図示していないが第1区西側で検出した大型土坑。確認規模は長軸長3.1m、短軸長1.8m、深さ25cmを測る。埋土は黒色土で黄色地山ローム土を含むが、中央部に地山ロームが盛り上がり、底面が不安定であり、風倒木の痕跡と思われる。出土遺物は土器の細片が1点である。

5. 製鉄造構 (SX)

主に第2面で検出した造構である。

SX01 (Fig.12, PL5-(1)) 第1区南西側で検出した造構。細長い楕円形状を呈する平面形で、東側に SX02 が接する。規模は長軸長2.35m、短軸長1m、壁の深さは20cmを測る。精鍊炉の造構であり、床面には炉底塊や炉壁、鉄滓塊などが多く出土している。壁は直立し、埋土は黒褐色粘質土で炉壁、炭化物粒、鉄滓などを含む。炉底塊、炉壁などを除去すると底面は西側に円形状の浅いピットが3カ所認められる。炉壁・炉底塊の形態から箱形炉と思われ、形態から大小2種類があり、少なくともに2時期の操業を考えられる。出土遺物としては弥生土器と中世前半の土師器の細片が少量出土している。

SX02 (Fig.12) SX01の東側に直交して接する細長い十坑。規模は長軸長1.57m、短軸長0.7mを測る。底面は南側がピット状に浅く窪み、その最大深さは22cmを測る。底面には南側に鉄滓、炉壁片が散布していた。これも SX01 に関連する造構と考えられる。

SX07 (Fig.12, PL5-(4)) 第2面 SX02の東側で検出した。1m×60cmの範囲に炭化物と焼土塊、鉄滓が集中する。その厚さは2~7cm位である。

SX01・02及び包含層出土土器関連遺物 (Fig.14・15・16, PL5-(5)・6-(11)) 包含層、製鉄造構、ピット、土坑、溝など各造構からコンテナ8箱出土した。完全に分類した訳ではないが、種類と

しては炉壁48点、碗形銀冶滓10点、鉄滓多数、鉄塊系遺物19点、含鉄鉄滓20点、炉壁溶融物4点、炉内滓8点、再結合滓4点、マグネタイト系遺物2点などがある。

9~15は羽口片である。いずれも包含層から出土している。9は第2区包含層の下層出土。唯一全体が残るもの。残存長は9cm、表面はヘラ削り後ナデで、断面形は多角形状を呈す。直径は約7cmである。中心に直径3cmの通気孔がある。全体に焼けて淡黄橙色で、先端部は高温で黒く焦げ、ガラス質滓が付着する。胎土は粗砂を多く含み、硬く締まる。10は第1区包含層上層出土。先端部片が黒化していて、灰白色を呈する部分と淡黄橙色を呈する部分に分かれ。復元径は6.7cm、復元通気孔径は2.5cmを測る。胎土は粗砂を多く含む。11は第2区包含層上層出土。復元径が約8cm、復元孔径は3.6cmを測る。色調は明橙色で、先端に近い部分は青灰色である。胎土は粗砂を多く含む。12は第1区東壁トレンチ出土。羽口中程の小片。色調は淡黄橙色から部分的に灰白色を呈す。13は第1区上層下部出土。先端部片で色調は黒化し青灰色を呈し、ガラス質滓が付着する。壁厚は1.3cmと他のものより薄い。14は第2区包含層上層出土。先端部細片で表面は高熱で溶融し、ガラス質滓が付着する。15は第1区包含層上層出土。先端部細片で、表面にはガラス質滓が付着する。孔面は焼けている。羽口は器壁の厚さが2cm前後、1.5cm以下のものがあり、大小2種類のものがある。

16~23はSX01出土の箱形炉の炉壁・炉底塊。大小2種類がある。16~19は大型炉のもの。16は炉底塊片。側面が一部残る。現存最大幅36cm、現存最大長は30.1cm以上を測る。内面は凹凸が激しく、滑らかな部分や表面が荒れた部分があり、一部スサ痕が残ったり、滓や砂鉄が付着する所がある。外面は粗砂粒を含む粘土が付着する。色調は暗褐色から赤褐色を呈す。17は炉壁片。横長22.0cm、縦長21.9cmを測る。内面は滓が多量に付着し気泡や凹凸がひどい。砂鉄粒子や粗砂粒が付着する部分もある。外面は粗砂粒を多く含む粘土が付着しスサ痕や木炭粒がわずかに見られる。18は炉壁で炉底塊か。炉壁がめぐられた状況を呈す。縦長21.2cm、横15.8cmを測る。内面には木炭が残り、ガラス質化する部分もある。外面は粗砂粒を含む粘土が付着する。19は側面の炉壁。縦長31.5cm、横長36.6cmを測る。炉内面部分は溶化し凹凸が激しく、小木炭が残り、鉄分が多い所は銷びたり、部分的にガラス質滓が付着している。外面は炉壁粘土が残る部分がある。色調は淡黄色から赤褐色で黒灰色を呈す部分もある。20~22は小型の箱形炉片。20は炉底塊の流出孔部分。右隅に流出孔が残る。現存幅22.1cm、現存長18cmを測る。左隅もやや突出しており、流出孔の可能性がある。外底面には炉壁が付着するのか粗砂粒が多く付着している。色調は黒褐色から暗赤褐色を呈す。21も炉底塊の流出孔片。内面には黒褐色の滓が付着し凹凸がひどい。炉壁粘土が付着する部分にはスサ痕が残る。外底面には粗砂粒を含む炉壁粘土が付着する。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、外底面は明褐色を呈す。22も炉底塊の流出孔部分。残存幅は14.1cm、残存長は11.9cmを測る。表面にはガラス質が付着する。側面と流出口あたりには炉壁粘土が付着する。色調は暗褐色を呈す。23は流出滓。下端が流出口で、鉄分を多く含む流出物で表面は丸味を持つ。流出口あたりはガラス質化する。色調は暗褐色を呈す。24は包含層出土の炉側壁上部片。縦長6.7cm、横長13.3cmを測る。内面上面には半還元の砂鉄が付着し、木炭粒も残る。外面には黄色から灰色の粘土が付着する。25はSX01出土。鍛冶炉系の再結合滓である上面には鍛造剥片が付着し底面には酸化土砂が付着する。縦長12cm、横長8.6cm、厚さ6cmを測る。色調は暗褐色から明褐色を呈す。26は包含層から出土の鉄塊系遺物。縦長7.5cm、横長5cm、厚さ4.5cmを測る。表面に酸化土砂や小木炭が付着し、鉄分が多いのか銷びてヒビが入る。色調は暗褐色を呈す。27~29は椀形鉄滓。27は包含層上層出土。縦長4cm、横長7.1cm、厚さ2.1cmを測る。小木炭粒や鍛造剥片が付着する。色調は褐色を呈す。28~29は第1区包含層上層下部出土。28は縦長4.9cm、横長7.6cm、厚さ2.5cmを測る。表面は凹凸が激しく気泡が入る。色調は暗褐色を呈す。29は縦長6.4cm、横長8.8cm、厚さ3.7cmを測る。

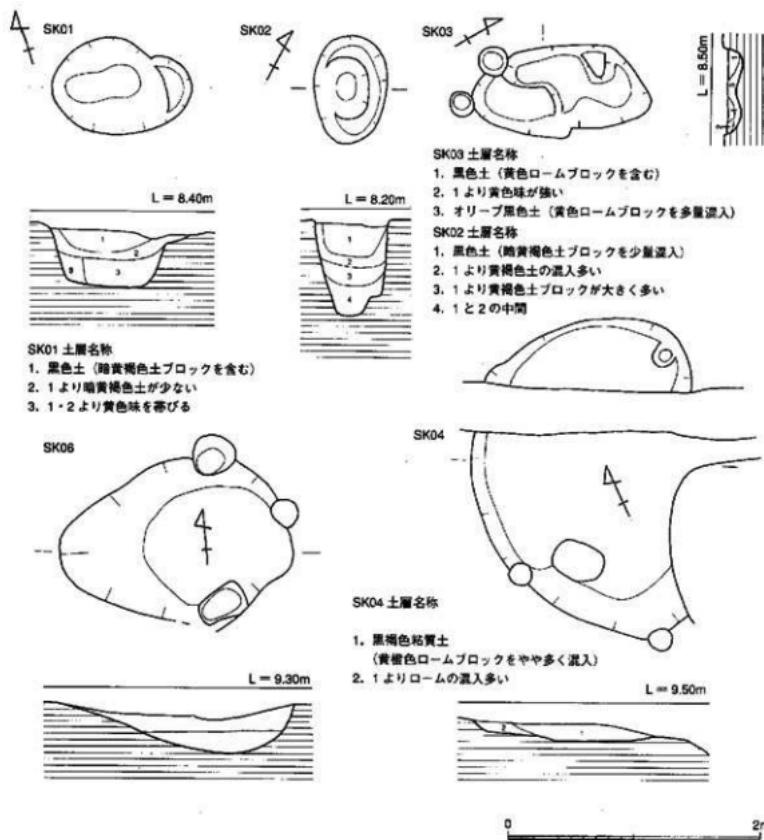


Fig. 9 SK01~04・06 (1/40)

cmを測る。表面に小木炭粒や鍛造剥片が付着し気泡が入る。色調は暗褐色を呈す。30はSK01出土の鉄塊系遺物。縦長4.5cm、横長5.6cm、厚さ3.5cmを測る。全体にこぶ状で、漬化して鏽ぶくれする。木炭痕も残る。色調は青灰色を呈す。

6. 溝状遺構 (SD)

3条検出したが内1条は方形周溝状遺構である。

SD01 第1区第1面で検出した斜面上を西から東に流れる、蛇行する小溝である。確認長5.2m、幅は50cm、深さは50cmを測る。埋土は明褐色土で黒褐色土ブロックを含む。埋土・遺物から近世の自然流路であろうか。出土遺物は弥生土器、古墳時代土師器・須恵器、白磁などの中国産輸入陶磁器、瓦質土器、近世の染付片、鉄滓が少量出土する。いずれも細片で図示出来ない。

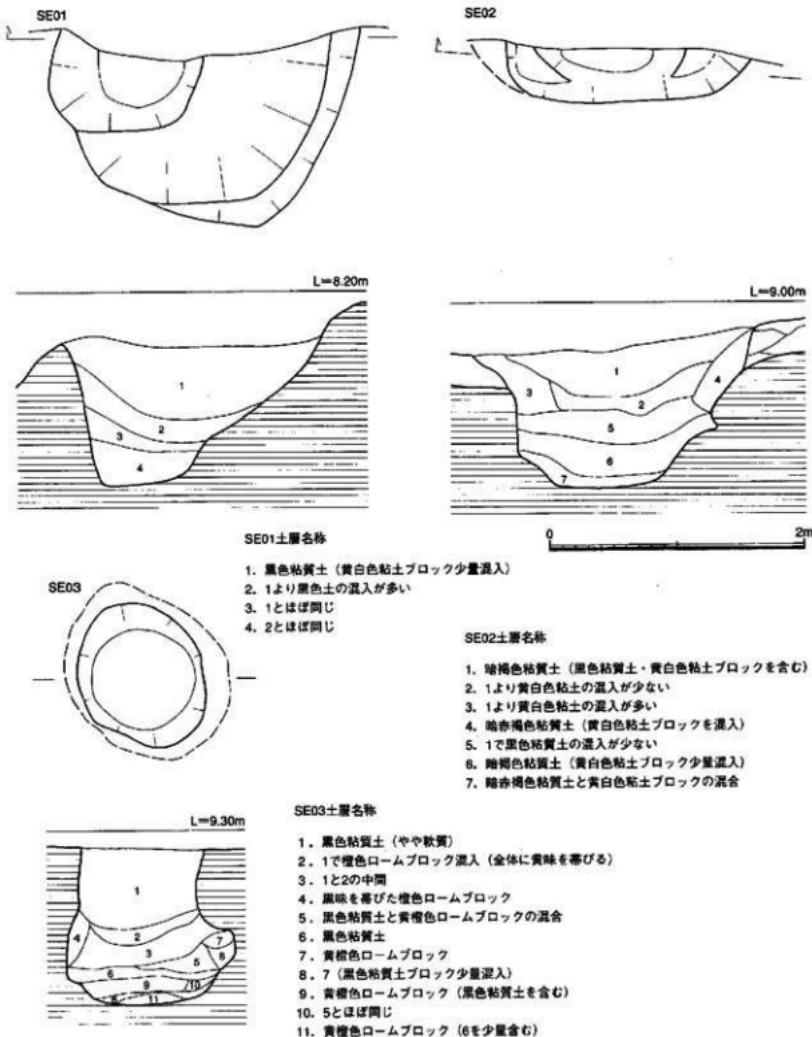


Fig.10 SE01~03 (1/40)

SD03 (PL4-(7)) 第2区で検出した東西方向に伸びる小溝。残りは不良で西側は消滅する。確認長は9mを測る。溝幅は最大で12m、深さは20~40cmを測る。溝断面は箱形で、埋土は黒褐色粘質

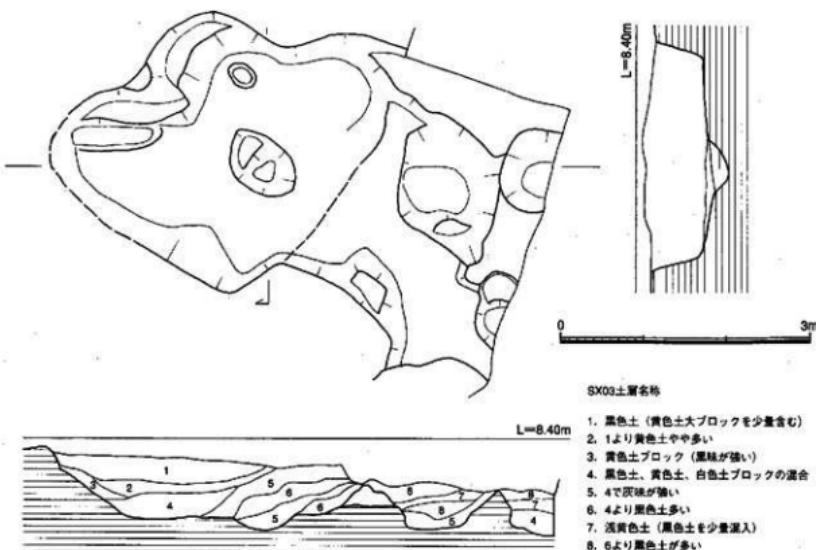


Fig.11 SX03不定形土坑 (1/60)

土で黄褐色ロームブロックを含む。

出土遺物 (Fig.16・23) 弥生土器、古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器が出土している。上層では中世の土師器、近世陶器、砥石、鉄滓などを含む。32・33は須恵器の高台の付く壺1/4片である。復元口径は18cmを測る。内外面はミズ引きナデ。33は小片である。色調は32・33いずれも灰色を呈し、胎土は精良。8世紀代のものである。34は土師器の竈ひれ部片。残存長16.5cmを測る。器表面はナデで指押さえ痕や粗いハケ目が残る。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には粗砂粒を含む。35・36は弥生土器の壺底部片。35は復元底径8.1cmを測る。胴部は底部から直立気味で伸びる。底部際には刻み目がある。36はSX02出土で底径7.0~8.0cmを測る。上げ底で胴部と底部との境には指押さえ痕が残る。内外底はナデ。色調は35・36ともににぶい橙色を呈し、胎土はいずれも粗砂粒を多く含む。139は小型の仕上げ砥石。全長6.4cm、幅3.4cm、厚さ3.5cmを測る。上面と左側面が使用面。その他の面は研磨仕上げ。石材は黄白色を呈す頁岩。

7. ピット・擾乱土坑・遺構面出土遺物

ピット出土遺物 (Fig.17) 37はSP01出土。瓦質土器足鍋の支脚片。表面はヘラ削り後ナデ。二次加熱でにぶい橙色を呈す。焼成は硬く良好。38・39はSP05出土。38は土師器碗1/6片。復元口径は13.6cm、器高は6.2cm、高台径は7.2cmを測る。調整はナデ。内面には煤か黒色顔料が付く。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は精良。39は黒色土器の碗底部片。高台径8.2cmを測る。内面はヘラ研磨。いずれも平安時代後期のもの。40・41はSP06出土。40は土師器の壺口縁部小片。内面ケズリ、外表面は

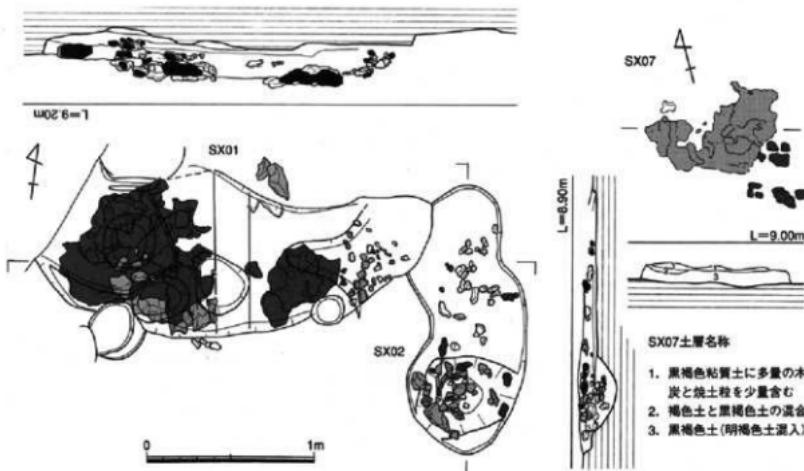


Fig.12 SX01・02・07製鐵遺構 (1/30)

ハケ。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は精良。41は壊1/3片。復元口径12.6cm、器高2.8cmを測る。磨滅はひどいが外底部は削りか。色調は浅黄色を呈し、胎土は精良。42はSP57出土。弥生土器の甕底部片。底径は7.4~7.9cmを測る。外底部はケズリで外は指押さえ痕が残る。色調はにぶい橙色を呈す。43はSP124出土。須恵器甕底部細片。外面は叩きを加え、内面は當て具痕が残る。色調は褐灰色を呈す。

擾乱出土遺物 (Fig.17) 44は2号擾乱出土の龍泉窯青磁底部片。高台径は5.2cmを測る。高台部は露胎でケズリ。明代のものか。45は7号擾乱出土の近世前期の肥前磁器の染付皿1/6片。復元口径14.2cm、器高3.5cm、高台径8.2cmを測る。高台部は露胎で、重ね焼きのせいか汚れている。

遺構面出土遺物 (Fig.18) 46~52は第1区第2面出土。46は内黒土器碗底部片。高台径は8.8cmを測る。外面はナデで内面はヘラ研磨。焼成は良い。47は須恵器壊底部1/3片。復元高台径は8.8cmを測

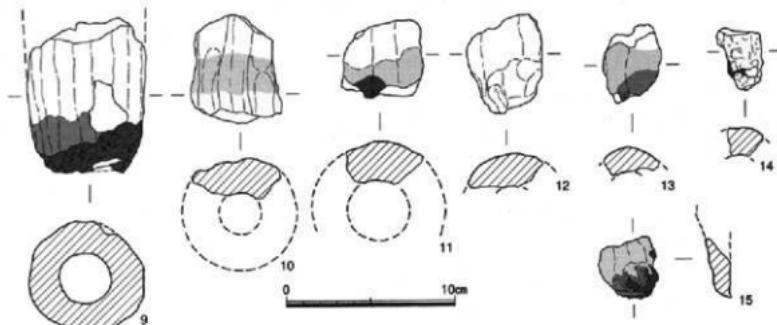


Fig.13 調査区出土羽口 (1/3)

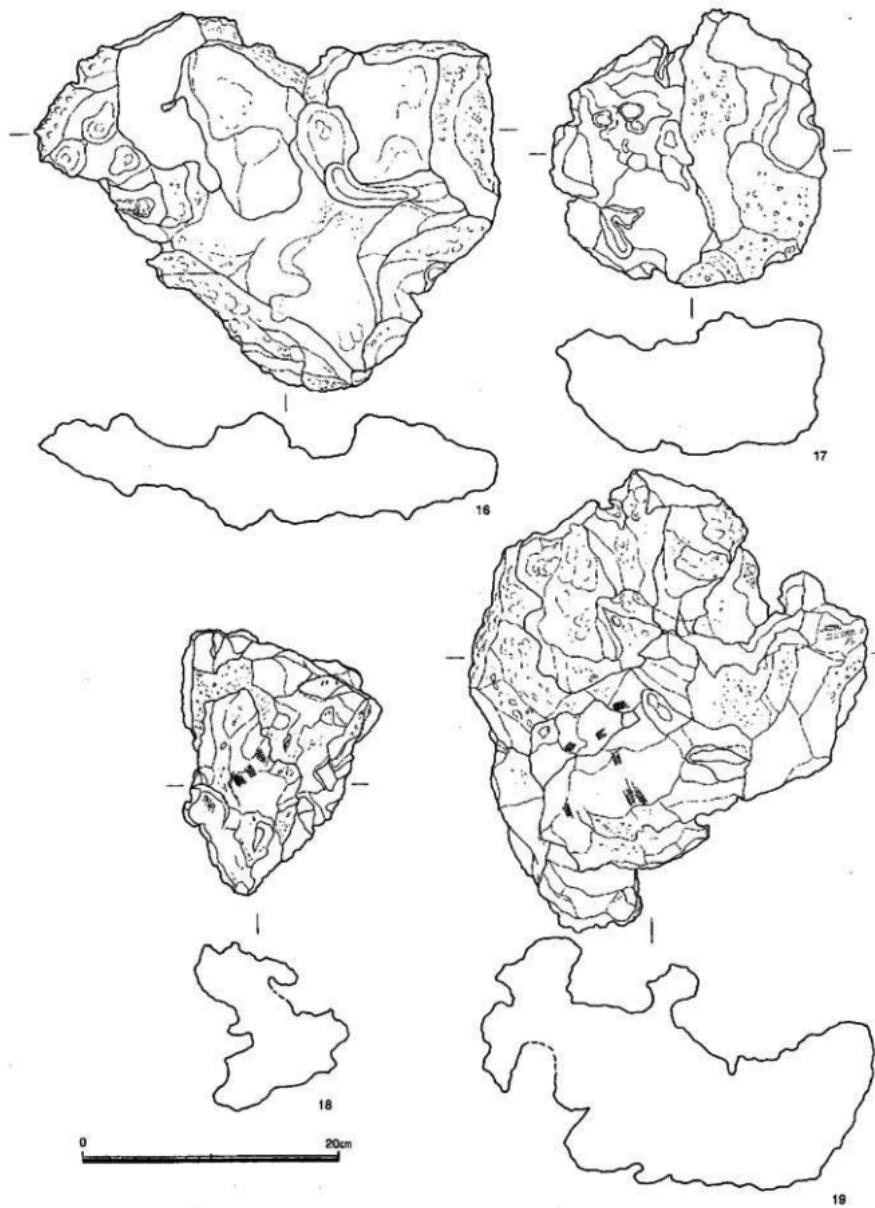


Fig.14 調査区出土製鉄関連遺物 1 (1/4)

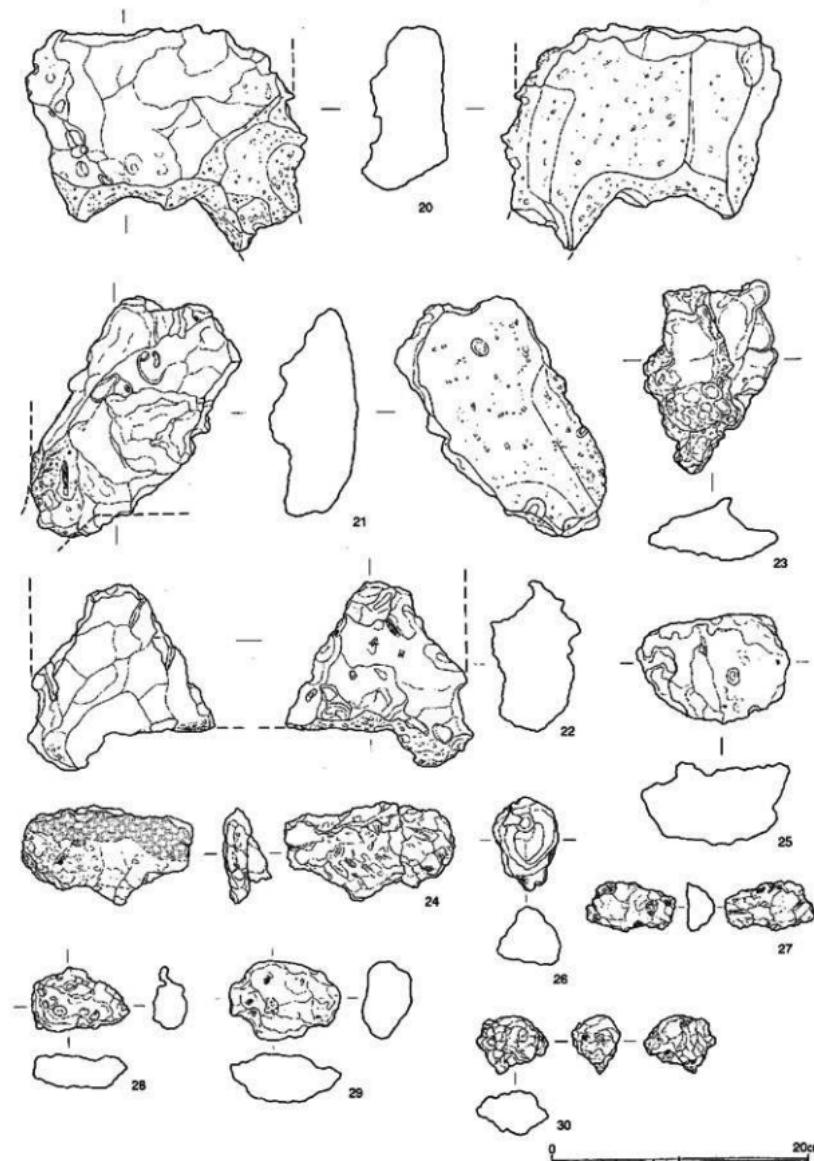


Fig.15 調査区出土製鉄関連遺物 2 (1/4)

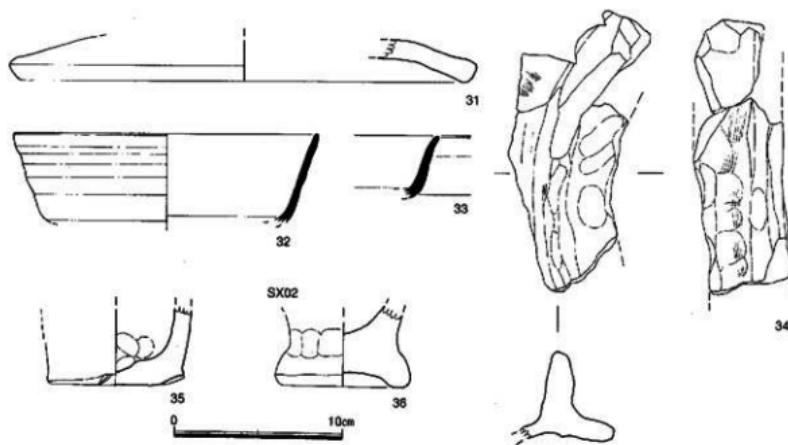


Fig.16 溝出土遺物 (1/3)

る。調整はナデ。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。48は土師器の楕高台部1/4片。復元高台径は8.8cmを測る。やや磨滅するが調整はナデ。色調は明赤褐色を呈し、胎土は精良。49は土師器の小型の壺部1/2片。復元胴径13.4cmを測る。胴部外面は細かいハケ、内面は底が指ナデ、上半が工具ナデである。色調は橙色、胎土は精良である。50は土師器の壺か鉢の口縁部1/3片。復元口径20cmを測る。外面ハケが残り、内面は指押さえ痕が残る。色調は赤橙色を呈し、胎土に粗砂が多く含む。51は白磁碗底部片。底径6.5cmを測る。高台部は露胎、52は土師器の高坏脚部1/6片。復元脚端径13.6cmを測る。磨滅し調整は不明。色調は橙色を呈し胎土は精良。

8. 包含層出土遺物 (Fig.19・20・21, PL.6・7)

53~86は包含層上層出土。53~59は土師器小皿。53は1/3片。復元口径は9.2cm、器高は1.7cmを測る。外底部は丸味を持つ。器表は磨滅し調整は不明。色調は淡黄色、胎土は精良。54は1/3片。復元口径9.8cm、器高1.35cmを測る。磨滅がひどいが外底部は糸切りか。色調は淡黄色、胎土は精良。55は1/2片。復元口径10.2cm、器高1.1cmを測る。磨滅がひどく調整は不明だが、外底部板圧痕が残る。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は精良。56は1/3片。復元口径は10.0cm、器高1.1cmを測る。磨滅がひどく、調整は不明。色調は灰白色を呈し、胎土は精良。57は1/2片。復元口径10.0cm、器高1.1cmを測る。磨滅がひどいが、外底部はヘラ切りか。色調は淡黄色を呈し、胎土は精良。58は1/4片。復元口径10.4cm、器高1.2cmを測る。口縁部周辺に一部煤が付着する。灯明皿か。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は精良。59は1/2片。復元口径は10.6cm、器高1.3cmを測る。磨滅がひどいが、外底部はヘラ切りか。色調は淡黄色を呈し、胎土は精良。60は瓦器皿1/3片。復元口径9.8cm、器高1.7cmを測る。外底部はヘラ切り。内面はナデ。色調は灰色、胎土は精良。

61~67土師器の坏・椭。61は土師器の坏2/3片。口径11.6cm、器高3.1cmを測る。調整はナデ。色調は

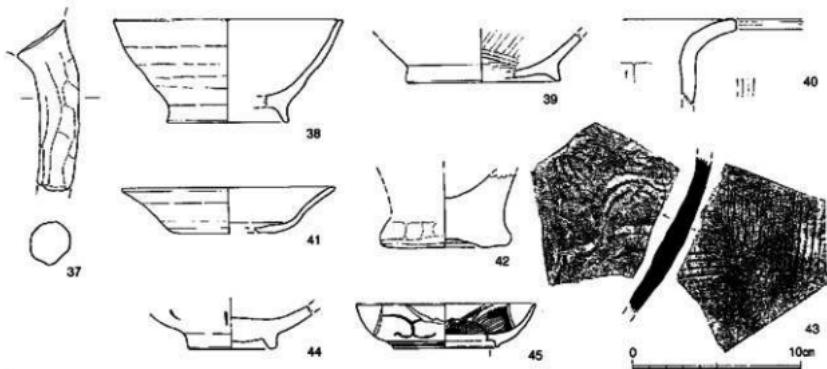


Fig.17 ピット・攢乱土坑出土遺物 (1/3)

橙色を呈し、胎土は金雲母を多量含む。62は椀と思われる口縁部1/3片。復元口径14.4cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。底部はヘラ切りか。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。63も62と同様の形態か。1/4片で復元口径15.4cm、器高4.7cmを測る。色調は浅黄橙色を呈す。64~67は椀の底部片。64は1/3片。復元高台径8.0cmを測る。内外面はナデ。色調は橙色を呈し、胎土は精良。65は1/4片。復元高台径7.0cmを測る。内面は丁寧な磨き。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は精良。66は1/2片。復元径7.2cmを測る。色調は橙色、胎土は精良。67は底部片で、高台径7.2cmを測る。高台部はケズリ。色調は橙色を呈し、胎土は細砂をわずかに含む。68~72は内黒土器の椀。68・69は口縁部片。68は1/4片で、復元口径13.0cmを測る。内面丁寧なヘラ研磨、外面は磨滅するがナデ。色調は内面黒色、外面はにぶい黄橙色を呈す。胎土は精良。69は1/3で、復元口径15.4cmを測る。内面ヘラ研磨、外面はナデ。色調は内面は黒色、外面はにぶい橙色を呈し、胎土は金雲母を含む。70~73は高台部片。70は1/4片。復元高台径は7.0cmを測る。内面は丁寧な磨きで黒灰色を呈する。胎土は精良。71は1/3片。復元径は7.0cmを測る。磨滅がひどいが内面はヘラ研磨か。色調は内面黒灰色、外面はにぶい

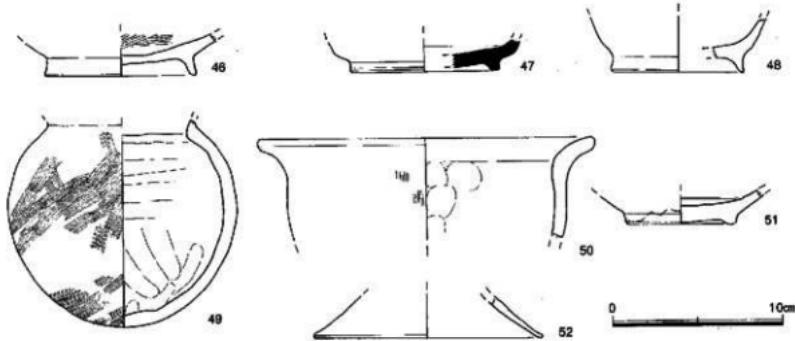


Fig.18 造構面出土遺物 (1/3)

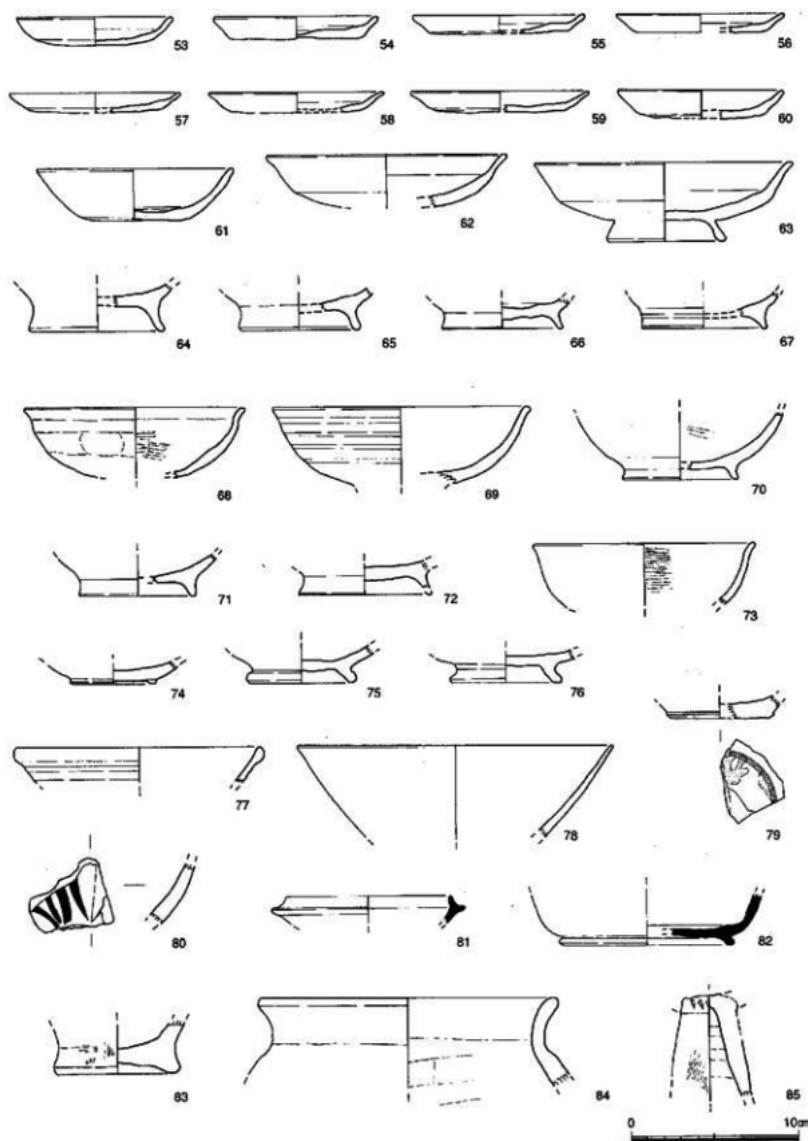


Fig.19 包含層上層出土遺物 1 (1/3)

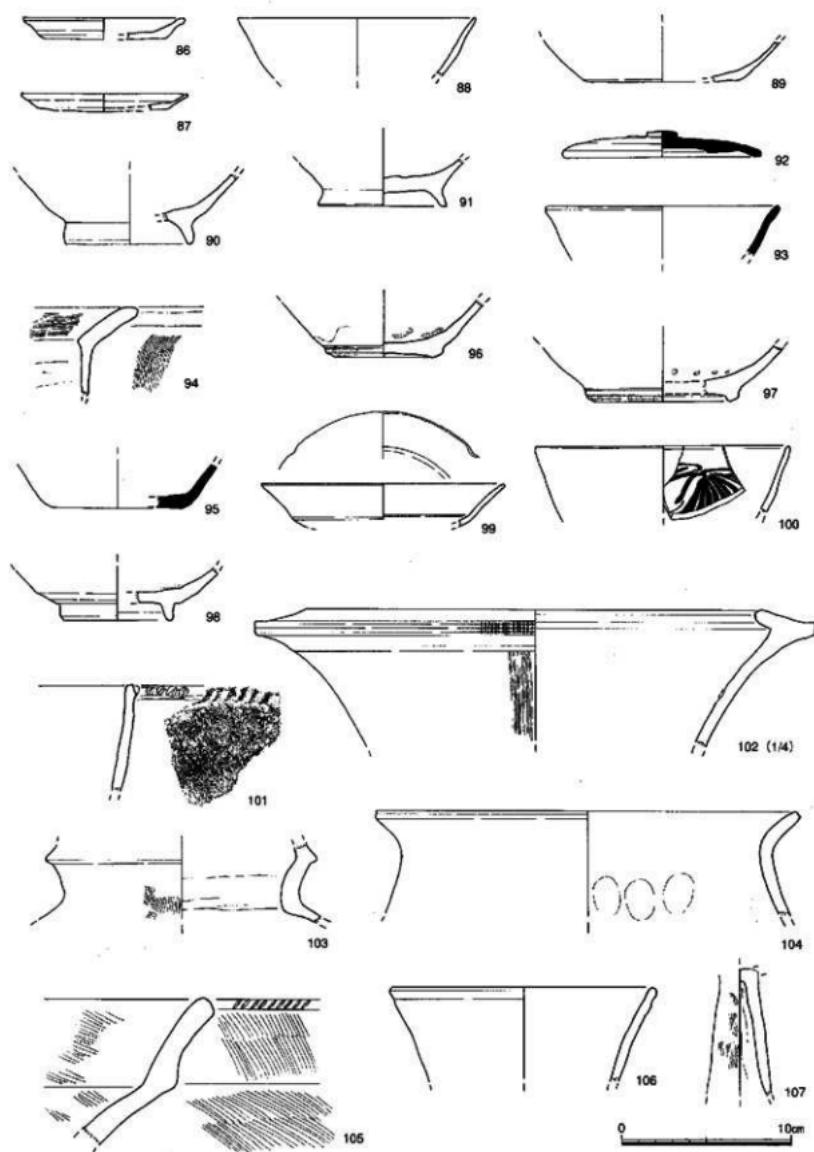


Fig.20 包含層上層出土遺物 2 (1/3・1/4)

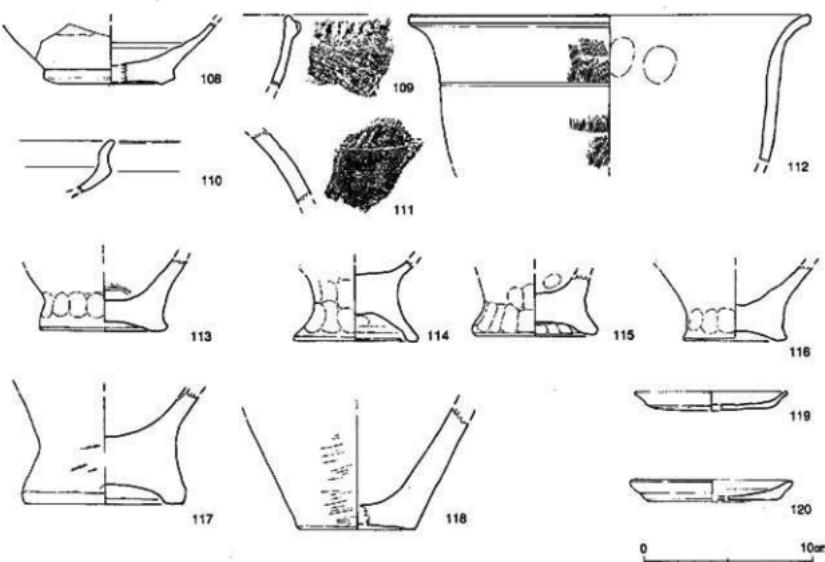


Fig.21 包含層下層出土遺物（1/3）

橙色を呈し、胎土は精良。72は1/2片で、復元径は7.8cmを測る。内面は黒灰色を呈す。73～76は黒色土器碗。73は黒色土器碗口縁部1/6片。復元口径13.2cmを測る。内外面黒色のヘラ研磨で、胎土は精良。74～76は底部片。74は1/2片。短い高台が付く。復元径5.1cmを測る。内外面ヘラ研磨。色調は黒灰色を呈し、胎土は精良。75は2/3片で、高台径6.6cmを測る。内面はヘラ研磨痕が残る。76は高台径6.7cmを測る。内面はヘラ研磨。75・76いずれも胎土は粗砂が多く含む。77～80は中国産輸入磁器。77は玉縁口縁の白磁碗1/8片。復元口径は14.3cmを測る。灰白色釉がかかる。78～80は青磁碗。78・79は越州窯系青磁。78は口縁部1/6片。復元口径16.8cmを測る。内外面くすんだ黄緑色釉がかかる。胎土はやや暗い灰色で精良。79は底部1/4片。外底部は露胎で平坦、目痕が2カ所残る。体部には内外緑灰色の釉が薄くかかり、外底部は浅黄橙色を呈す。胎土は灰白色で精良。80は龍泉窯系の鎬蓮弁碗体部細片。内外面に灰オリーブ釉がかかる。81・82は須恵器。81は壺身1/6片。復元口径9.6cm、復元受部径11.4cmを測る。小田富士雄氏の九州編年のIV B期のもの。82は高台付壺1/3片。復元高台径10.5cmを測る。内外面はナデ。色調は青灰色を呈し、胎土に金雲母片を含む。83は弥生土器壺底部片。底径7.5cmを測る。底部は上げ底。全体にやや磨滅する。色調は浅黄色。84・85は上師器。84は壺口縁部1/4片。復元口径17.8cmを測る。胴部内面はケズリ、外面は磨滅がひどい。器壁は全体に厚め。色調はくすんだ橙色を呈す。85は高脚筒部。85は壺部との接合面に刻みがある。磨滅するが外面にはハケ日が残る。色調は橙色を呈す。

86～107は包含層上層下部出土。86・87は土器小皿。86は1/4片で、復元口径9.4cm、器高1.3cmを測る。87は1/6片で、復元口径9.8cm、器高は1.1cmを測る。いずれも磨滅がひどく調整は不明。色調は86

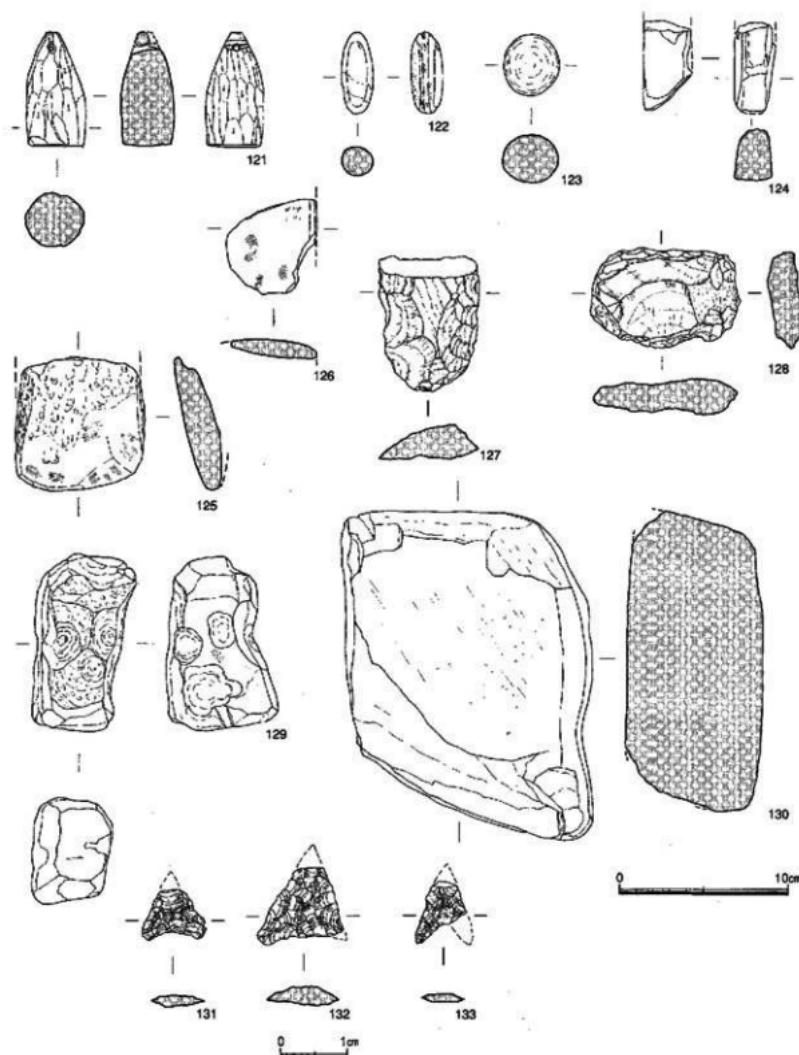


Fig.22 各遺構出土石器・石製品 (1/3・2/3)

は橙色、87はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良。88は上師器椀口縁部1/6片。復元口径14.0cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は精良。89は坏底部1/4片。復元底径は9.2cmを測る。器表は磨滅するが、外底はヘラ削りか。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良。90・91は土師器の高台椀。ほは同形態である。

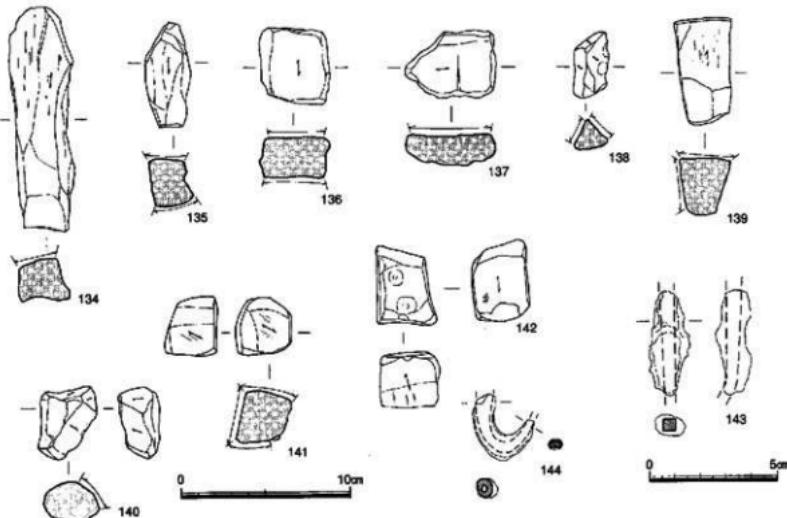


Fig.23 各遺構出土砥石と鉄製品 (1/3 · 1/2)

90は1/4片で復元底径7.6cm、91は復元底径7.6cmを測る。いずれも調整はナデ。色調はいずれも橙色を呈し、胎土は90が精良で、91は粗砂粒を多く含む。92は扁平な摘みの付く須恵器蓋片。復元径は11.8cmを測る。8世紀代のもの。調整はナデで、色調は褐灰色を呈す。93は須恵器坏口縁部1/8片。復元口径13.8cmを測る。8世紀代のもの。94は土師器鉢口縁部細片。く字状に外折する口縁部を持つ。別部内面ケズリ、外面は細かいハケ。色調はにぶい橙色を呈す。95は須恵器の坏底1/6片。復元底径は7.6cmを測る。外底部は雑なナデ、その他はナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良。7世紀後半のものか。96~100は中国產青磁。96・97は越州窯系青磁。96・97は碗底部片。96は1/5片で、復元底径は6.8cmを測る。平底で底部は上げ底。内外底部に目痕が残る。淡緑色の釉がかかるが、外底部は露胎。胎土は精良。97は高台を持つ1/3片で、復元高台径は9cmを測る。内面見込みに7カ所の目痕が残り、外底にも目痕が残る。高台疊付きは露胎。色調はくすんだ緑色を呈す。98は碗底部1/8片。復元高台径6.2cmを測る。全面に灰オリーブ釉が薄くかかる。99は口縁部が輪花の皿1/8片。復元口径14.4cmを測る。輪花は4弁である。内外面灰オリーブ釉がかかる。胎土は精良。100は龍泉窯系青磁碗口縁部小片。復元口径15cmを測る。内面にヘラ切りの文様があり、灰オリーブ釉がかかる。101~104は弥生土器。101は宍田文土器の壺口縁部細片。口縁端部に突帯が付き、刻目が入る。外面はナデ、色調は暗灰黄褐色を呈し、胎土に粗砂を多く含む。102は中期の鋸先状の口縁を持つ壺1/4片。復元口径は36cmを測る。口端部にはヘラによる刻目がある。頸部には暗文が入る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。103は複合口縁の壺1/4片。外面は細かいハケ目が残り、内面はナデか。色調は橙色を呈し、胎土は精良。104は壺口縁部1/8片。復元口径25cmを測る。外面磨滅するがナデ、内面には指押さえ痕が残る。色調は淡赤橙色を呈し、胎土は精良。105~107は古墳時代の土師器。105は古墳時代前期の複合口縁壺の口縁部小片。口端部に斜めの刻み、外面に斜めの粗いハケ目。内面は斜

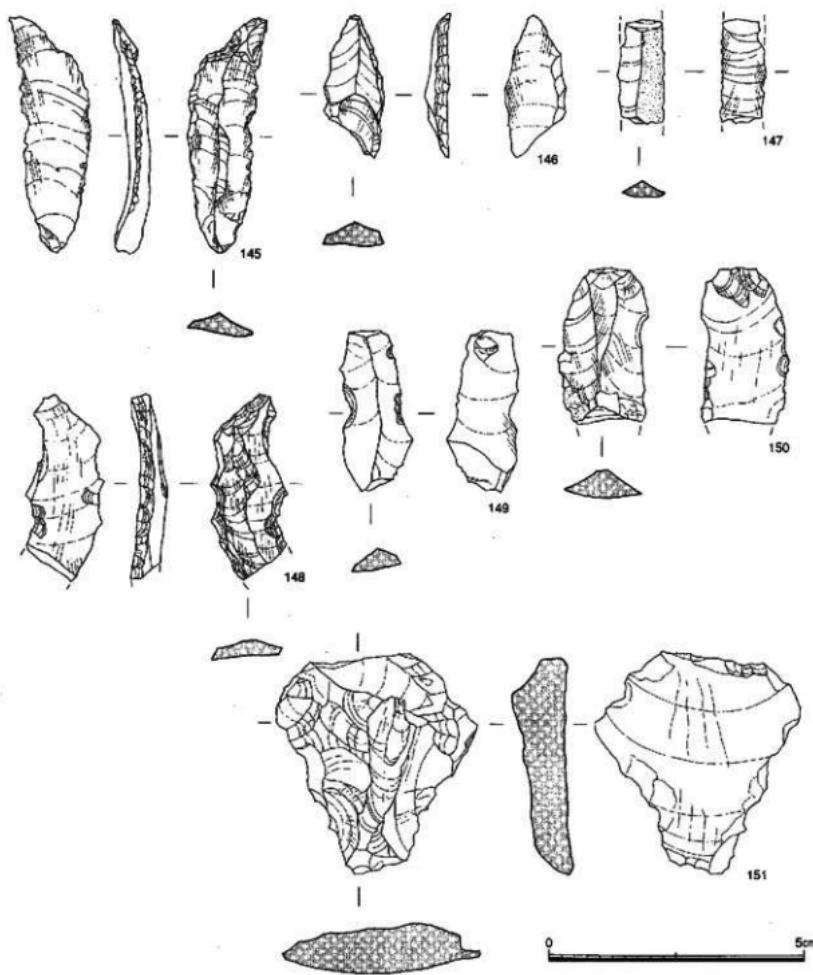


Fig.24 各遺構出土旧石器 (1/1)

めの粗いハケ後ナデ。色調は橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。106は脛口縁部1/6片。口縁は歪み、復元口径は15.0~15.8cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。107は高環脚筒部片。細身で前期のもの。外面細かいタテのハケ目が残る。内面横ヘラ

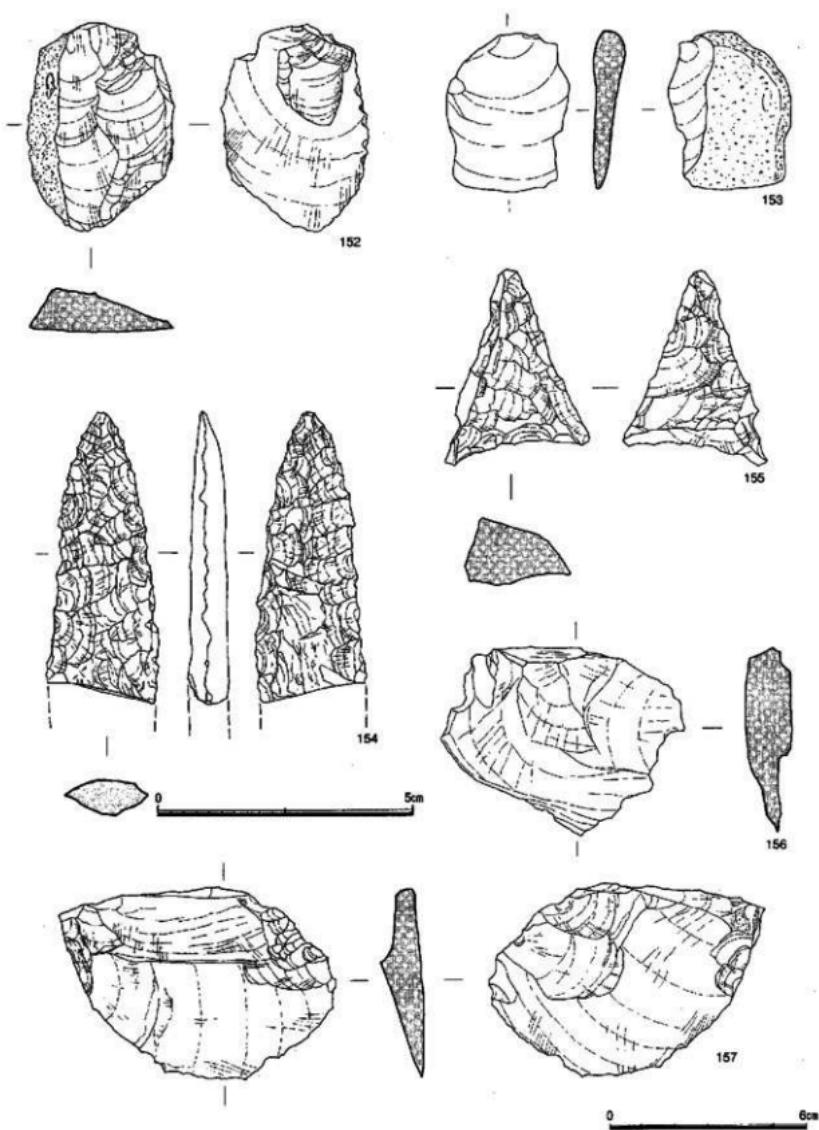


Fig.25 各造構出土旧石器・縄文時代石器 (1/1・2/3)

削り。色調は赤色を呈し、胎土は精良。

108~117は包含層下層出土。108は白磁碗底部1/3片。復元底径7.5cmを測る。玉縁口縁を持つ。復元高台径は7.7cmを測る。高台を浅く削り出す。体部下半から外底部は露胎である。見込みで底部と体部の境に段を有す。109~118までは繩文土器から弥生土器。109は刻目突帯文土器臺の口縁部細片。突帯が口端部より下に付き、工具による刻みが付く。外面は貝殻復縁によるナデ、内面はナデ。110はく字状に外反する浅鉢の口縁部細片。内外面調整はナデ。色調は暗い灰褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。111は壺の肩部細片。鋸歯状の文様が入る。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。112は如意状の甕口縁部1/6片。復元口径23.8cmを測る。胴部外面上半に1条の沈線が巡る。口端部に刻目、外面は細いハケ、内面はナデで指押さえ痕が残る。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。113~118は甕の底部で、いずれも上げ底である。113は底径7.5cm。外面は雜なナデで工具痕が残る。内面は粗いハケ目が残る。色調はにぶい橙色。114は上げ底の程度が激しい。外面は指押さえ痕が残り、内面はヒビ割れし、炭化物が付着する。色調はにぶい黄橙色を呈す。115は1/2片で、復元底径7.3cmを測る。内外面ナデで指押さえ痕が残る。色調はにぶい褐色を呈す。116は底径6.2cmを測る。調整はナデで、外底部は雜なナデ。色調はにぶい黄橙色を呈す。117は厚底の底部片で、底径9.2cmを測る。器表は磨滅するがナデで、胴部外面にはその工具痕が残る。色調は明褐色を呈す。118はわずかに上げ底で1/2片。復元底径は7.2cmを測る。胴部外面は横のミガキ。その他はナデ。色調はにぶい橙色を呈す。119・120は第1区北塗トレンチ出土の土師器小皿。119は1/5片で復元口径は9cm、器高1.1cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。120は1/4片で復元口径9.6cm、器高は1.3cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は119がにぶい橙色、120が淡橙色を呈す。

9. 各遺構出土石器・石製品・鉄製品

第1区包含層出土石器・石製品・鉄製品 (Fig.22~23, PL.7) 121は上層出土。釣り鐘形の重り。一部欠損するがほぼ完形。全長6.8cm、直径は3.2~3.4cm、重さは110gを測る。底面は円形で、上面に斜めの孔がある。淡い銀灰赤色の滑石製で、表面は丁寧なケズリ仕上げ。122は下層出土。楕円形状の石錘。全長4.7cm、幅1.9cm、厚さ1.8cm、重さ24gを測る。表面は磨滅し、上端に刻目がある。123は上層出土。球形の石弾か。3.8×3.3cm、厚さ2.9cmを測る。表面は磨かれている。124は上層出土。方柱状片刃石斧の刃部片。現存長5.3cm、幅2.3cm、厚さ2.9cmを測る。126は下層出土。磨製石斧の細片で、表面は丁寧な研磨仕上げ。色調は灰色を呈す。127は第1区北トレンチ出土。打製石斧の破片か。石材は安山岩か。残存長8.6cm、最大幅6cm、厚さ2.1cmを測る。128は下層出土。打製のスクレーバーか剥片か。最大幅8.9cm、最大長5.8cm、厚さ2.2cmを測る。石材は安山岩か。129は下層出土。砥石を転用した凹石である。全長10cm、幅5.9cm、最大厚6.4cmを測る。石材は砂岩で焼けている。132~133は下層出土の黒曜石の石鎌。132は先端を欠損し、残存鎌長は2.3cm、幅2.6cm、厚さ0.55cmを測る。133は基部の抉りが深い。先端と基部が欠損する。残存鎌長1.9cm、残存幅1.6cm、厚さ0.25cmを測る。

134~142は砥石片。134は上層出土。残存長13.4cm、幅3.8cm、最大厚さ2.9cmを測る。上面と左側面が使用面。石材は黒灰色の粘板岩である。135は上層出土。小片で残存長6.2cm、幅2.6cmを測る。上下両面が使用面。石材は黄灰色の砂岩。136は上層出土。仕上げ砥石の小片で、残存長4.4cm、残存幅4cm、厚さ2.4cmを測る。上下両面が使用面。石材は浅黄色を呈す砂岩。137は上層出土。荒砥石の細片。残存長5.2cm、残存幅4cm、厚さ1.8cmを測る。上面が使用面である。石材は暗灰黄色を呈す砂岩。138は上層出土。仕上げ砥石の細片。残存長4cm、幅2.1cm、厚さ1.8cmを測る。断面は三角形を呈す。左右側面が使用面。石材は灰白色の頁岩である。140は上層出土。仕上げ砥石の細片で、残存長4.4cm、

残存幅は3.4cm、厚さ2.4cmを測る。3側面が使用面。石材は灰黄色を呈す頁岩。141は上層出土、長さ3.5cm、幅3.3cm、厚さ3cmを測る小形の砥石。各面使用している。にぶい黄色を呈す砂岩である。142は上層出土。長方形状の小砥石。全長4.9cm、幅3.5cm、厚さ3.2cmを測る。4側面が使用面。石材はにぶい黄色を呈す砂岩。

143・144は上層出土。143は鉄釘か。残存長4cm、断面形は長方形では 0.5×0.6 cmを測る。鋸がひどい。144は釣り針状の鉄製品。断面は方円形から長方形を呈す。長さ2.3cm、断面径は0.6cm、先端では0.4cmを測る。

各遺構出土旧石器・縄文時代石器 (Fig.24・25、PL.7) 145は第1区第3面SX06出土。ナイフ形石器。器長4.6cm、器幅1.3cm、厚さ0.5cmを測る。左側縁と右側縁下辺に二次調整が加えられる。石材は黒曜石で、表面は風化する。146は包含層上層出土。ナイフ形石器。器長2.8cm、器幅1.25cm、厚さ0.45cmを測る。剥片を利用したもので右側縁と下端に二次調整を加える。石材は黒曜石である。147は上層出土。細石刃の破片。残存長2.05cm、幅0.9cm、厚さ0.25cmを測る。断面は三角形を呈す。石材は黒曜石である。148は第2区4号擾乱出土のナイフ形石器又は彫器。黒曜石の剥片を利用したもの。残存器長3.7cm、器幅1.45cm、厚さ0.35cmを測る。両側縁に二次調整を加える。149・150は剥片。いずれも包含層上層出土。149は珪岩質の石材で、器長3.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。150は黒曜石の石材で、残存長3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmを測る。151はSE02出土。平面形が三角形を呈す珪岩質の剥片。全長は4.4cm、最大幅4cm、厚さ1.1cmを測る。表面は風化がひどく荒れ、後世の傷も多く付く。152は7号擾乱出土。黒曜石の剥片。全長は4.1cm、幅2.9cm、厚さ0.8cmを測る。左側面に自然面が残る。153は第1区第2面のSP36出土の珪岩質の剥片。全長3.2cm、幅2.45cm、厚さ0.6cmを測る。片面は自然面が残る。154は第2区SP144出土。縄文時代早期の尖頭器片。残存器長5.8cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。全面細かい二次調整を加える。石材はサヌカイトである。155は包含層出土。幾何形石器又は未製品。器長は3.8cm、最大幅2.8cm、厚さ1.35cmを測る。平面三角形を呈す。上下両面に二次調整を加える。石材はサヌカイトである。縄文時代早期以降のもの。156は包含層下層出土。ホルンフェルス質砂岩剥片。全長7.2cm、幅5.7cm、厚さ1.35cmを測る。後期旧石器時代から縄文時代早期のもの。157は包含層下層出土のサヌカイトの剥片。全長8.2cm、幅5.7cm、厚さ1.5cmを測る。後期旧石器時代のもの。

3) 小 結

以上、調査の概要について述べたが、ここでは当地点での各時代の概要、及び主な遺構についての簡単な総括を行い、まとめとしたい。

当調査区での遺構の時期は後期旧石器時代から縄文時代早期、弥生時代、古墳時代、古代、中世の各時代に亘り、長期間に亘って人が住み着きやすい場所であったのであろう。

旧石器時代については、有田遺跡群ではいくつかの地点で遺物が確認されている。地域的には有田1丁目から2丁目の台地中央部と、その北側の小田部2丁目地区、台地北西端の小田部5丁目地区、台地中央西側の小田部3丁目地区と台地南端の有田3丁目地区である。いずれも立地的には丘陵の先端または内部の谷を臨む場所である。出土地点が台地の南北各地点で確認されていることから、有田遺跡群全域に旧石器時代の集落が点在していたことが予想出来る。当地点では出土状況が後世の包含層または遺構からの出土で、また調査終了後、遺物の確認をしたので、旧石器時代の包含層の確認は調査時には行っていない。

弥生時代については縄文時代晩期末、弥生時代初めの突帯文系土器から出土する。包含層出土で、

遺構は確認出来なかった。SE01井戸は包含層下層で検出し、弥生時代中期の遺物がわずかに出土しており、弥生時代の可能性がある。SD02方形周溝状遺構については、溝の残りが悪く、また溝内より時期を示す明確な遺物はないが、その上面で検出された土器群が古墳時代前期初頭頃であり、そのことからそれ以前の時期と思われる。方形周溝状遺構については小郡市教育委員会の片岡宏二氏の研究^{#1}によれば、福岡平野南部を中心にかなりの数が確認されているが、福岡市周辺では数が少ない。市内では比恵遺跡や雀居遺跡、蒲田遺跡などでわずかに遺構が検出されているのみである。遺構の性格は墓や住居施設、祭祀遺構といった説が出されている。第115次地点では一部を検出したのみで、主体部などは確認できていない。また墓に伴う副葬遺物は出土していない。今回の調査で方形周溝状遺構の出土例が増加したことに意義があろう。

古墳時代は明確な遺構がない。ただ遺物は出土しているので、本米遺構が存在した可能性がある。

古代は、遺物は奈良時代から平安時代の時期のものが出土している。第1面のピット(SP) 5・6では平安時代の遺物が出土し、またSD03溝では奈良時代の遺物が出土しており、この時期の溝の可能性がある。

次に製鉄遺構についてであるが、有田地区では確認された製鉄遺構としては、台地北側の小田部1丁目の第33次調査^{#2}、中央部の有田1丁目の第81次調査^{#3}などがある。有田遺跡では鉄滓や轆羽口などの製鉄関連遺物は各地点で出土するが、意外に遺構は確認されていない。第33次調査では台地斜面の落ち際の3基の土坑から轆羽口、炉壁などが出土し、出土遺物から越州窯系青磁片が出土しており、古代の時期が考えられる。第81次調査では台地中央部の北から深い谷が入り込む斜面上に、不定形土坑や溝、砂鉄溜遺構など総数74基の関連遺構を検出し、多量の鉄滓が出土している。時期的には奈良時代末から平安時代(11世紀)までと考えられている。ここでは精錬炉が1基確認されている。今回の調査では精錬炉と考えられる箱形炉が大小2基と、鍛冶炉の存在が確認されており、有田台地で製鉄生産の在り方を知る上で貴重な資料となろう。時代はいずれも古代から中世初めの時期であり、いずれもほぼ同時代のものである。奈良時代、有田台地には早良郡役所の郡衙が設置され、早良平野の中心地をなすが、それに付属する工人の了孫が平安時代にかけて当地で製鉄生産を行ったのであろうか。

註

註1. 片岡宏二 「「周溝状遺構」の検討(その1~4)」『福岡考古14~17』福岡考古談話会 1989 ~1996

註2. 福岡市教育委員会 『有田・小田部第2集』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第81集 1982

註3. 福岡市教育委員会 『有田遺跡群—第81次調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第129集 1986

第4章 第168次調査の記録（調査番号9132）

1) 調査の概要 (Fig.26、PL.8・9)

本調査区は早良区小田部5丁目154-1に所在する。北に向かって八つ手状に広がる台地の北西側の台地部分に立地する。調査区の西側は旧室見川に浸食され断崖を呈している。調査区北側、東側はすでに調査が行われ、調査の結果から弥生時代の窓檻墓地、弥生時代から古墳時代にかけての集落、古代の橋で囲まれた大型建物群、中世の方形居館跡など各時代の遺構が検出されている。特に東側の第177次調査区では壺棺墓から中国製の青銅鏡が副葬品で出土している。

今回の調査は地権者より個人住宅建設の申請があった為、平成3年10月22日から12月11日まで実施したものである。調査面積は455m²である。調査前は畑であった。遺構面は橙色の鳥柄ローム土で、畑の耕作土である表土を除くと、遺構面までの深さは0.2m程度である。主な検出遺構は竪穴式住居4棟、掘立柱建物1棟、橋1条、貯蔵穴・土坑15基、溝状遺構4条などである。北西側には近代の遺物を含む小さな池のような擾乱土坑がある。遺構の残りとしては区画整理で削平を受けたのか、あまり良くない。時期的には弥生時代から中世後期にかけての時期であり、出土遺物もその時期のものが大半である。

2) 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡 (SC)

4棟確認したが、遺存状況は余り良くない。いずれも形態から古墳時代前期の範囲で取まるものである。

SC13 (Fig.27、PL.9-(2)) 査区南側で検出した主軸を南北方向に取り、平面形が長方形を呈すと思われる住居跡である。南半分は道路にかかり消滅している。規模は東西長4.7m、南北長2.65mを測る。北側に逆L形の地山粘土を貼り付けたベッド状遺構がある。南側にも本来対峙する逆L形のベッド状遺構が付くであろう。壁の残りは悪く、深さ15cm程度である。ベッド状遺構は幅が0.9m、その高さは10cm程度である。ベッド状遺構の周囲には崖溝が巡るが、板を打ち込んだ様な痕跡も認められた。住居の埋土は黒褐色粘質土で、地山ローム土を含む。床面には焼土、炭化物が多量に残り、火災に会っている状況を示す。主柱穴は2本で、平面形は円形を呈し、直径は約40cm、深さは50cmを測る。床面は貼床されたのか汚れた地山粘土である。

出土遺物 (Fig.29、PL.12) 古墳時代前期の土師器片や弥生土器片が出土するが、大半が細片で、図示できるものは少ない。

1は土師器の鉢1/2片で、床面出土。復元口径は13.6cm、器高8.1cmを測る。丸底の深めの底部で、口縁部が小さく外反する小さな口縁が付く。胴部外面は刷毛で、黒斑がある。色調はにぶい黄褐色を呈す。2~4は混入と思われる弥生土器の窓底部片。2は底径5.7cmを測る。底部はやや上げ底で、外面はやや磨滅するがナデ、内面は磨滅し調整不明。3は前期のもので、厚みが3cm以上あり、外底部には木の葉痕が残る。表面には指押さえ痕が残る。4は底径5.7cmで薄手である。表面は磨滅するがナデ、外底には黒斑がある。色調は2~4がにぶい橙色、3は淡黄色で、胎土はいずれも粗砂を多く含む。3は焼成が不良。

SC14 (Fig.27、PL.9-(3)・10-(1)) SC13の北で、西側境界地にかかる主軸を南西から北東に取

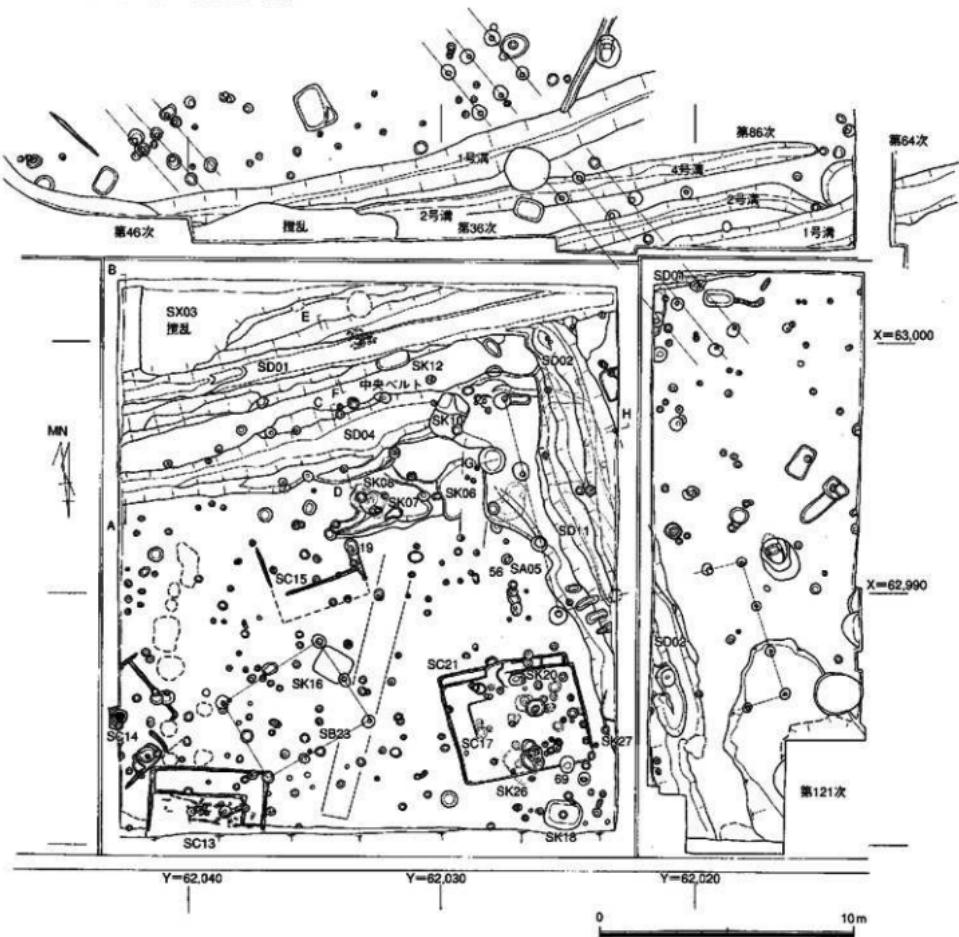


Fig.26 第168次調査遺構全体図 (1/200)

る、SC13と同じように逆L形のベッド状遺構が付く。確認規模は北東側の短軸長で3.75m、長軸長で4.7m以上を測り、平面形が長方形を呈す住居跡である。残りは悪く、床面と周溝、炉の焼上面から住居跡と確認した。以上を測る。南側には出入り口と思われる長方形を呈する土坑SK22がある。SK22は2段掘りで、上面で、長軸長0.96m、短軸長0.7mを測る。上面から一段5cm下がったところで直径0.65mの円形に近い形を呈す。深さは25cm程度で、底面にはピット状の落ち込みがある。埋土は黒褐色粘質土で上層に炭化物や焼土ブロックを含む。住居の主柱は2本柱と思われ、ベッド状遺構の周溝にかかる。長径は0.45m、深さは45cmを測り、柱径は痕跡から約15cmである。炉跡は西境界地で検出した。主柱穴軸線より北にずれるが、径0.6×0.5mの不定形状に浅く窪むピットの中に炭化物、焼

七が充満し、その下に長径0.5m程の赤く焼けた焼土面がある。

出土遺物は土師器の細片が床面からごく少量出土するが、図示出来ない。SK22からは少量の土師器片や12.5×10cm、厚み3.5cmの板状の石材が1点出土している。また主柱穴P1から須恵器の細片が1点出土しているが、混入であろう。

SC15 (Fig.28, PL.9-(4)) 中央で検出した住居。残りは悪く、かろうじて残る周壁溝と屋内土坑から堅穴住居跡と判断した。主軸を南北方向に取り、平面形が長方形を呈し、両側にベッド状遺構を持つ住居と考えられる。推定規模は東西方向の短軸で3.7m、南北方向の長軸で4.5m以上を測る。床面東側壁沿いに0.65×0.5m、深さ約20cmを測る隅丸長方形状の小土坑がある。土坑の底面西側沿いに小ピットがあり、梯子を掛ける所と思われる。出入り口は東側に付くのであろう。主柱は2本柱と考える。炉跡は確認出来ていない。床面は地山ローム土が汚れ硬く縮まっていた。

出土遺物は床面から土器細片が1点、主柱と思われる柱穴から土師器の細片が数点出土している。屋内土坑からは黒曜石の剥片が2点出土している。

SC17・21 (Fig.28, PL.9-(5)・(6)) 調査区南東隅で検出した、主軸を東西方向に取る平面長方形の住居である。二軒が重なり、建て替えられた状況を呈している。新規住居をSC17、古期の住居をSC21とする。規模は新規SC17で、長軸長5.37m、短軸長4.1mを測り、古期SC21は長軸長5.25mを測り、わずかに小さい。SC17住居には屋内土坑SK19があり、ベッド状遺構はその土坑を挟んで全周すると思われるが、北側にも炭化物を含む土坑がある。SC17はベッド状遺構を持つ有田の古墳時代前期の住居では一番新しい時期の可能性がある。周壁溝は西側と北側から東側に部分的に巡る。床面中央やや東寄りに炭化物と焼土が分布する所があるが、炉跡としては弱い。新しい住居は古い住居をローム上で埋めており、床土を除くと、中央やや北東寄りの床面で炉跡と思われる焼土面を確認した。その範囲は0.65×0.6mで、その下からは直径40cm、深さ10cmの円形のピットがあった。主柱穴はSC17床面では確認出来なかったが、SC21床面で2本柱の主柱穴を確認した。南東側は一段不定形状の浅い落ち込みがある。

出土遺物 (Fig.29, PL.12) 古墳時代前期の土師器が床面や埋上から出土するが、量はそれ程多くない。滑石製白玉やガラス玉が新規SC17の貼床下から出土している。

5～7は土師器である。5・6は布留式の壺である。5は口縁から肩にかけての破片で、復元口径は11.4cmを測る。口縁部内外は磨滅するが、肩部外面には1条の深い沈線が巡り、その上はタテハケ、その下はヨコハケである。内面には指押さえ痕が残る。6は口縁部小片である。磨滅がひどく調整は不明。7は高坏环部小片で全容は不明だが、底部から口縁部の境に段を有している。磨滅がひどく調整は不明。色調は5が浅黄褐色、6が浅黄色、7が明赤褐色を呈す。胎土は7が精良である。5・7は新規住居床面、6は貼床中出土である。

8～15は玉類である。8～13は貼床下から出土。14・15は床土の洗浄で出土した。8～10はガラス小玉。直径は8が5mm、9が4mm、10が4mmで、1～2mmほどの孔が開いている。色調はコバルトブルーを呈す。11～15は滑石製白玉、直径は11が5.5mm、12が5.5mm、13が6mm、14が5.5mm、15が5.5mm、厚さは3mm、孔径は11～13が3mm、14・15が2mmである。いずれも算盤形の側面を呈す。

2. 捩立柱建物 (SB)

SB23 (Fig.30, PL.9-(1)) 調査区南側で検出した、主軸方向をN-66°-Eに取る、2×2間の建物である。桁行き全長は4.50mと4.60m、梁行き全長は3.50mと3.75mを測り、平面形態はややいびつである。床面積は16.5m²を測る。柱穴は円形又は楕円形で、直径は40～60cmで、深さは10～40cmを

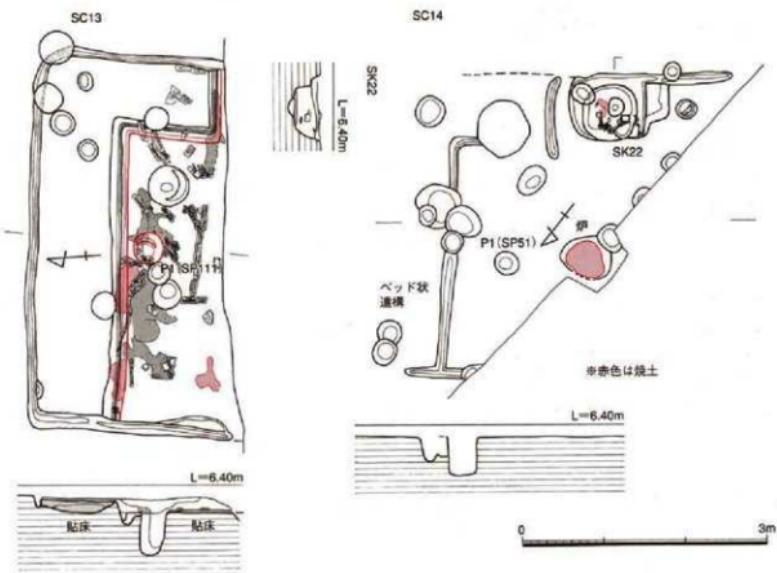


Fig.27 SC13・14 (1/60)

測り、柱径は痕跡から15~20cm位と推定出来る。柱穴埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物は各柱穴から弥生土器や、土師器の細片と黒曜石の剥片が少量ずつ出土するが、図示できるものはない。

3. 棚 (SA)

SA05 (Fig.30) 調査区北東側 SD04を切る主軸をN-5°Wに取る棚である。柱穴を4個分確認しただけである。東壁断面に直径55cm、深さ50cmのピットがあり、位置的に対応するので、建物の可能性もあるが、他に対応する柱穴がないので一応棚列とする。柱間は3.10m、2.85m、2.90m、全長は8.85mを測る。柱穴平面形は円形又は梢円形で、大きさは直径は60~75cm、深さは50~90cmを測り、大きくしっかりしている。柱径は痕跡から推定して20cm以上である。柱穴埋土は柱痕跡が黒褐色粘質土、掘方が暗褐色粘質土でよく締まる。SD04は中世の溝であり、時期は中世以降である。

出土遺物 (Fig.43) 各柱穴から須恵器や中世の土師器細片、白磁の細片、黒曜石の剥片が少量出土する。他に柱痕跡から木炭片が出土している。128はP4柱痕跡から出土した石包丁と思われる破片。残存長54cm、残存幅2.7cm、厚み0.5cmを測る。両面丁寧な研磨仕上げである。石材は頁岩。

4. 土坑・貯蔵穴 (SK)

住居跡に伴うものなどを含めて、15基について番号を付けたが、主なものについて報告する。

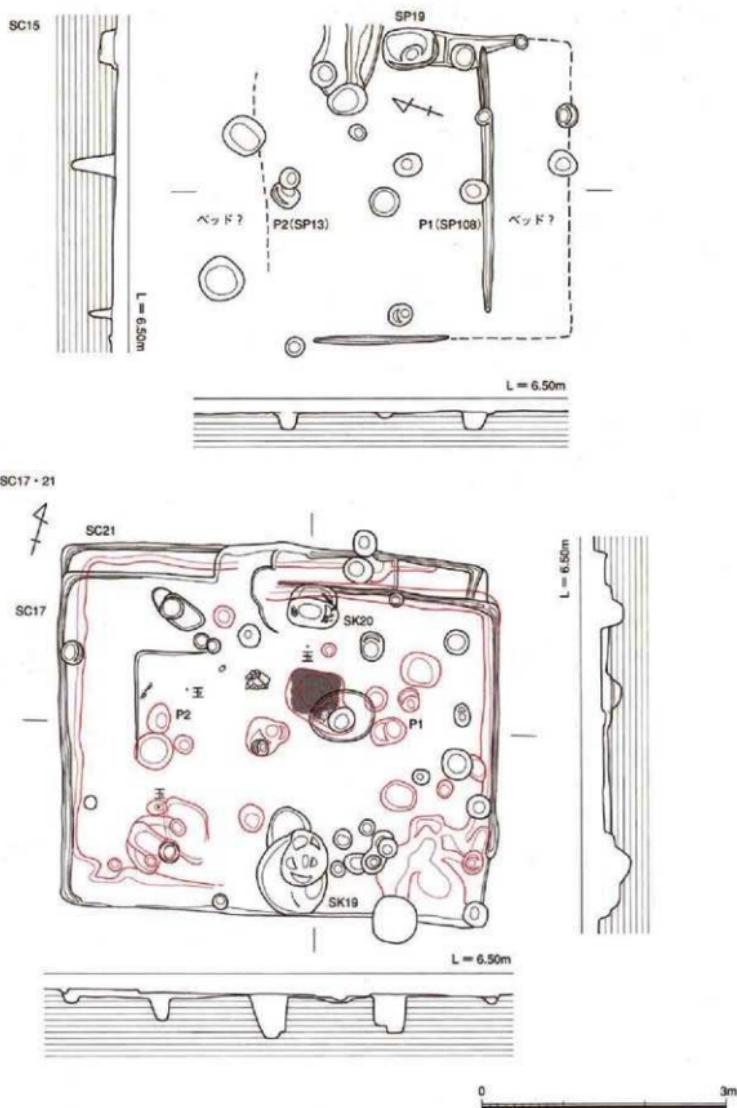


Fig.28 SC15・17・21 (1/60)

SK08 (Fig.31、PL.10-(3)) SD04の南側で検出した土坑である。平面形状はいびつな長方形を呈する。規模は長軸長1.35m、短軸長1.03mを測る。底面は西側が10cm程浅く窪み、その面での最大深さは53cmを測る。底面中央には直径25cm、深さ35cmのピットがあり、直径10cm程の柱痕跡状の落ち込みがある。埋土は黒褐色粘質土で橙色地山ロームブロックを含む。

出土遺物 (Fig.32、PL.12) 16は古瀬戸の壺胴部片。復元胴径は18.6cmを測る。外面上部に3条の沈線が巡り、胴部下半に1条の沈線が巡る。外面にはオリーブ黄色の灰釉がむらにかかり、表面は気泡で膨れています。内面は釉がかかっていないなく、ハケナデ、下部に指押さえ痕が明瞭に残る。胎土は灰色で精良。焼成は良好。

SK10 (Fig.31、PL.10-(4)) SD04の下から検出した主軸を北東から南西に取る土坑。平面形が長方形を呈する。規模は長軸長が1.52m、短軸長が1.30mを測る。底面は南東側が一段20cm程低くなる。深さは北東側で40cm、南西側で60cmを測る。南西小口壁面中央には幅12cm、厚み5cm以上の板または柱を打ち込んだ様な痕跡が残る。壁面は全体に直に近いが、北東壁ではオーバーハングしている。底面北東側には直径20cm、深さ45cmの円形ピットがある。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土で橙色地山ロームブロックを全体に含む。

出土遺物 (Fig.32) 弥生土器の細片が少量と黒曜石の剥片が2点出土している。17は弥生土器壺底部1/3片である。底径は8.6cmを測る。表面の磨滅はひどいが、内面には指押さえ痕が残る。色調はくろい橙色、胎土は比較的精良である。

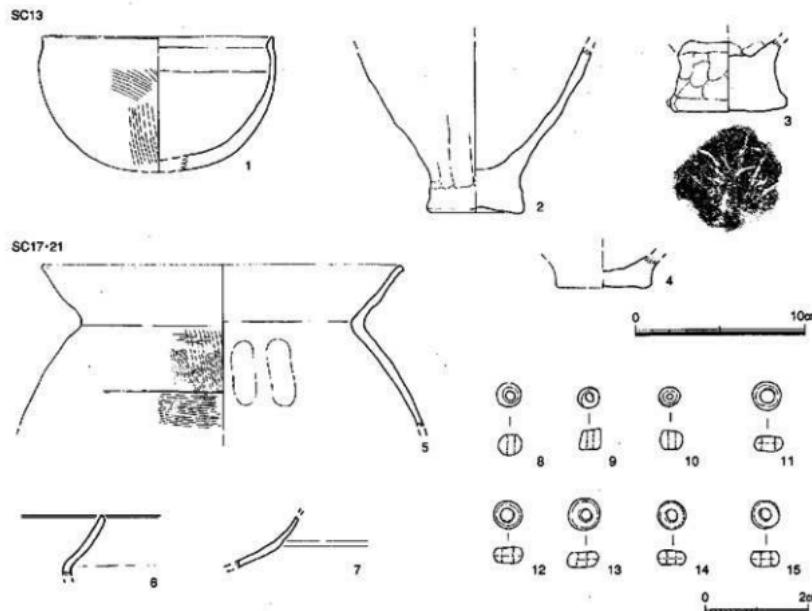


Fig.29 各住居跡出土遺物 (1/3・1/1)

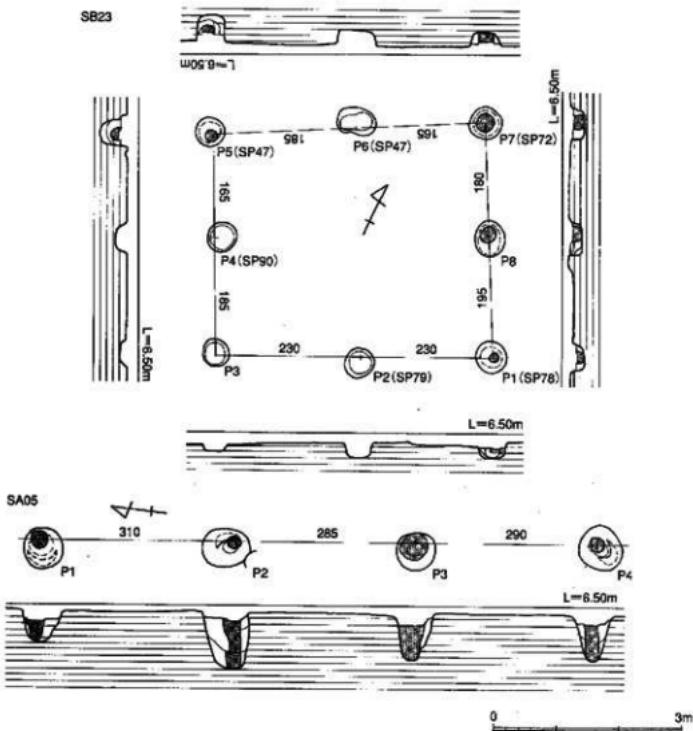


Fig.30 SB23・SA05 (1/80)

SK12 (Fig.31, PL.10-(5)) SD01南壁で検出した土坑。溝に切られ一部しか残っていないが、平面形は方形または長方形を呈する。残存規模は長軸長1.33m、短軸長0.65m以上を測る。底面は北に向かってやや下傾し、深さは最大で34cmを測る。壁面は一部オーバーハングしている。出土遺物はない。

SK16 (Fig.31, PL.10-(6)) 調査区南側で検出したSB23柱穴に切られる土坑。主軸を北西から南東に取り、平面形状がやや丸みを持つ長方形を呈す。規模は上面で長軸長1.42m、短軸長1.09mを測る。底面は平坦だが、壁面が袋状を呈し、底面の規模は長軸長1.49m、短軸長1.16mを測る。深さは最大で66cmを測る。埋土は橙色地山ロームブロックが主体で、黒色粘質土ブロックを含むが、全体に粘性が強く硬く締まる。層が乱れており、人為的に埋められた状況を示す。形態から貯蔵穴であろうか。

出土遺物 (Fig.32) 刻目突帯文土器片を含む弥生土器片と黒曜石剥片、砂岩製の砥石片が1点出土している。18は弥生土器の壺底部片。底径は7.7cmを測る。外面は磨滅するがハケ目がかすかに残る。内面は指押さえ痕が残り、煤が付着する。煤が外底部にも付着している。色調は橙色を呈し、胎

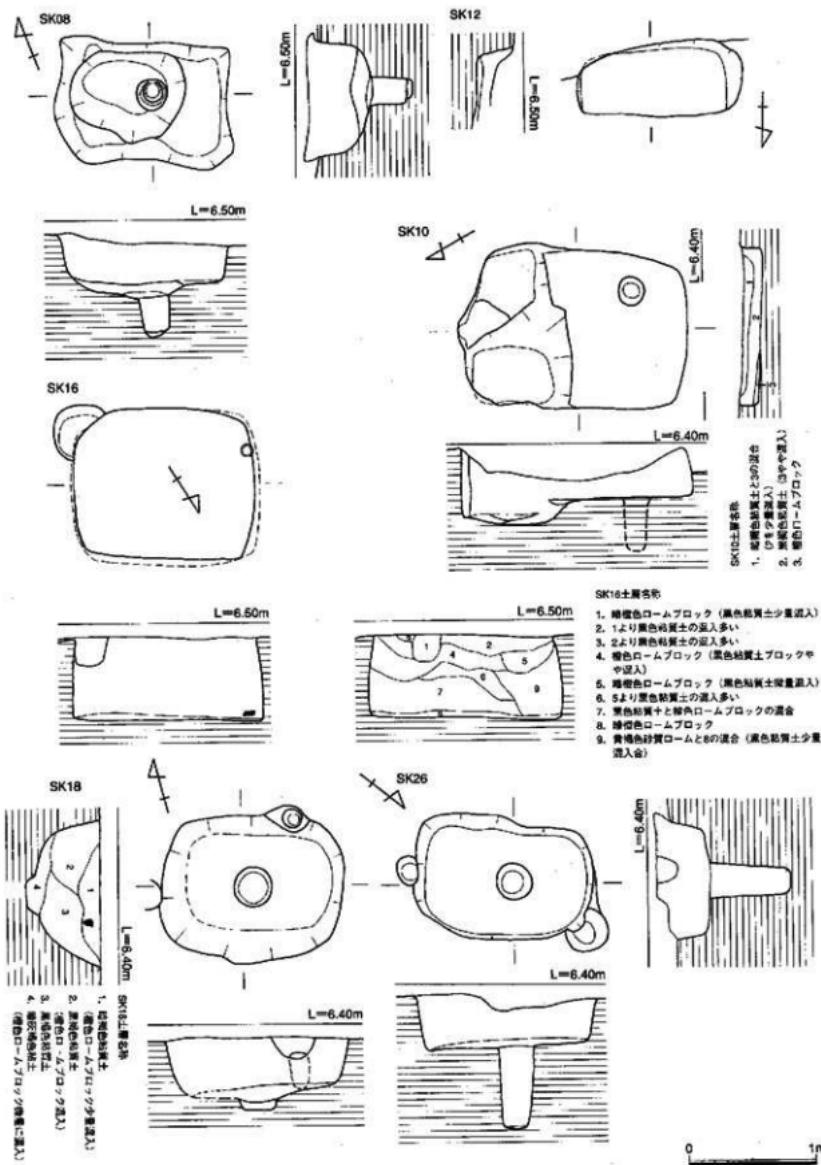


Fig.31 SK08・10・12・16・18・26 (1/40)

土に粗砂を多く含む。

SK18 (Fig.31, PL.10-(7)) 調査区南東隅で検出した主軸をほぼ東西方向に取る土坑。平面形がやや丸みを持つ長方形状を呈す。規模は上面で長軸長1.45m、短軸長1.19mを測る。底面は中央に向かって深くなり深さは50cmを測る。底面中央には直径30cm、深さ9cmの円形ピットがある。埋土は上層で暗褐色粘質土、下層で黒褐色粘質土で橙色ロームブロックが混ざり、底面では暗灰褐色粘土となる。貯蔵穴であろうか。

出土遺物 (Fig.32) 中世土師器片、瓦質土器、瓦器、青磁、白磁などの細片、黒曜石の剥片が少量出土している。19は白磁碗底部1/3片。高台部はケズリ。内面には灰白色の釉が薄くかかる。胎土は白色で精良。20は瓦質土器の鍋と思われる口縁部片。口縁部は肥厚し、口端部には軽く段が付く。内面に細かいヨコハケ、外側は斜めのハケで指押さえ痕が残る。色調は外側は煤が上部に付着し、やや暗い灰色を呈し、胎土は灰白色で精良。焼成は良好。21は土師器坏体底部1/5片。復元口径約12cm、復元底径8.8cm、器高2.4cmを測る。表面は磨滅し調整不明。色調は明橙色で、胎土に赤色粒子を含み精良。

SK26 (Fig.31, PL.10-(8)) SC17南側底面下から検出した主軸を北西から南東に取り、平面形状がやや丸味を持つ長方形の土坑。規模は長軸長1.45m、短軸長0.98m、深さ45cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央には直径28cm、深さ66cmを測る。埋土は黒色土を主体とする。貯蔵穴であろう。出土遺物は図示出来るものはないが、弥生土器の細片が少量出土している。

5. 溝状遺構 (SD)

4条検出した。時期はいずれも中世である。

SD01 (Fig.33, PL.11-(1)-(4)-(5)) 調査区北側で検出した主軸をN-77°-Wに取る溝。東側の第121次調査区、北側の第36次・第64次・第86次調査で検出した溝に繋がるものである。この溝は第64次調査区で北に曲がって第157次調査区に繋がると予想され、方形の屋敷区割をなすものと考えられる。溝幅は2.2~2.8m、深さは0.8~1.15mを測る。溝断面は逆台形で、西側境界あたりでは薬研堀に近くなる。東側でSD02が合流しており、土層断面から見るとSD02が上層に重なっている可能性を示す。埋土は上層で暗褐色土が主体、下層では黒褐色粘質土や暗灰褐色粘土が主体となり、地山ロームブロックを含む。

出土遺物 (Fig.34~39, PL.12) 中世の土師器、中国産貿易陶磁器、瓦と弥生土器、古墳時代土師器・須恵器の他、石器や滑石製品や板碑、図示していないが古代瓦片が出土している。上層遺物は主に土層2での第1~3層まで、下層は第5~9層までの遺物である。

22~44は上層出土。22~27は土師器。22・23は小皿。いずれも底部片で、底径5.2cm・5.0cmを測る。口縁が大きく開く形態で、口径は22が約9cm、23が約8cmである。いずれも表面の磨滅がひどく調整は不明。色調はにぶい黄橙色で、胎土は精良。24は香炉と思われる1/4片で、復元口径は8.8cm、器高は4.5cm、底径は7.5cmを測る。口縁部は軽く外反し、外底部は高台状に上げ底になる。口縁部外側から内面は煤けて黒くなり、胴部外面は磨滅するがナデ、下部には梅のスタンプがある。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。25は盤小片。胴部から口縁部はやや開き気味に直立する。全体に磨滅がひどいが、胴部と底部の境はケズリである。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を少量含む。26は口縁部を欠く高台碗1/3片である。復元底径は6.6cmを測る。底部には小さな低い高台が付く。27は底部片。復元口径7.6cmを測る。低い高台が付く。色調は26がにぶい橙色、27がにぶい黄橙色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、焼成は26がやや悪い。28は土師質土器の鍋口縁部片。復元口径は40.8cmを測る。口

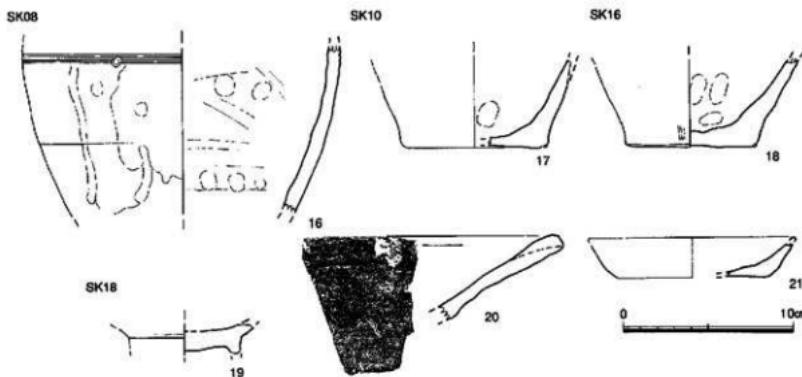


Fig.32 各土坑出土遺物 (1/3)

縁部は肥厚し、胸部の境に段を有す。外面はナデで指押さえ痕が残り、煤が付着する。内面はヨコハケで口縁部はハケ日が粗い。色調は明褐色を呈す。29も土師質土器の火鉢口縁部小片。口縁部は内折し復元口径は28cmを測る。口縁部外面には2条の沈線がありその間に連続のスタンプが入る。色調は外面は煤が塗られ黒褐色、内面はにぶい橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含み、焼成は良好。30~35は中国産白磁。30~33は碗の口縁部1/3片。30・31は口端部を少し外につまみ出す形態である。30は1/3片で復元口径は16.2cmを測る。内面には沈線が2条巡る。31は細片である。いずれも内外面施釉で、色調は30は灰白色、31は淡い緑灰色を呈す。胎土は30は灰白色で精良、31は明灰色で精良である。32は底部片である。底径6.8cmを測る。見込みは蛇の目状に釉を搔き取る。高台部はケズリ。33は底部1/3片。復元底径は6.4cmを測る。内面には圈線が巡る。高台部はケズリ。32の内面には灰味がかった黄白色の釉が、33の内面には淡い緑灰色の釉がかかる。胎土は32が黄白色、33が明灰色で精良である。34は皿の1/2弱片。復元口径は9.7cm、器高は2.5cmを測る。見込みは蛇の目状の釉の搔き取り。高台部は露胎でケズリ。疊付きは擦っている。色調は乳白色釉がかかり、胎土は灰白色で精良である。35~41は青磁。35~38は龍泉窯系統である。35・36はいずれも見込みに草花文をヘラで片彫りする。35は口縁部1/8片で復元口径14.8cmを測る。36は底部1/3片。復元底径6.3cmを測る。高台はケズリ、疊付きは擦り。いずれも灰オリーブ釉がかかる。37は見込みに花文をスタンプしたもの。底部片で底径5.5cmを測る。灰オリーブ釉がかかり、高台は雑なケズリで、疊付きは擦り。38は鍋蓮弁の碗底部1/3片。復元底径は5.6cmを測る。高台はケズリ後施釉。灰オリーブ釉がかかる。39は同安窯系の碗底部片。底径5.2cmを測る。外面は露胎でケズリ、梅目が入る。見込みは灰オリーブ釉がかかる。40は小碗の底部1/2片。底径は3.8cmを測る。高台はケズリで露胎。灰オリーブ釉がかかる。41は皿と思われる高麗青磁底部1/6片。復元底径4.8cmを測る。灰味の強い灰オリーブ釉がかかり、高台には目状粘土が付着する。42は備前と思われる陶器の擂鉢底部細片。内面の鉗目はかなり磨り減っている。外面は粗いナデ。色調は暗灰色。胎土に粗砂粒を含む。43は古代の丸瓦筒部小片。復元幅は12.8cmを測る。内面に細かい布目が残る。外面は磨滅がひどいがナデか。色調は黄味がかった灰白色で、胎土は精良。焼成はやや甘い。同時代の瓦は平瓦片が1点出土している。

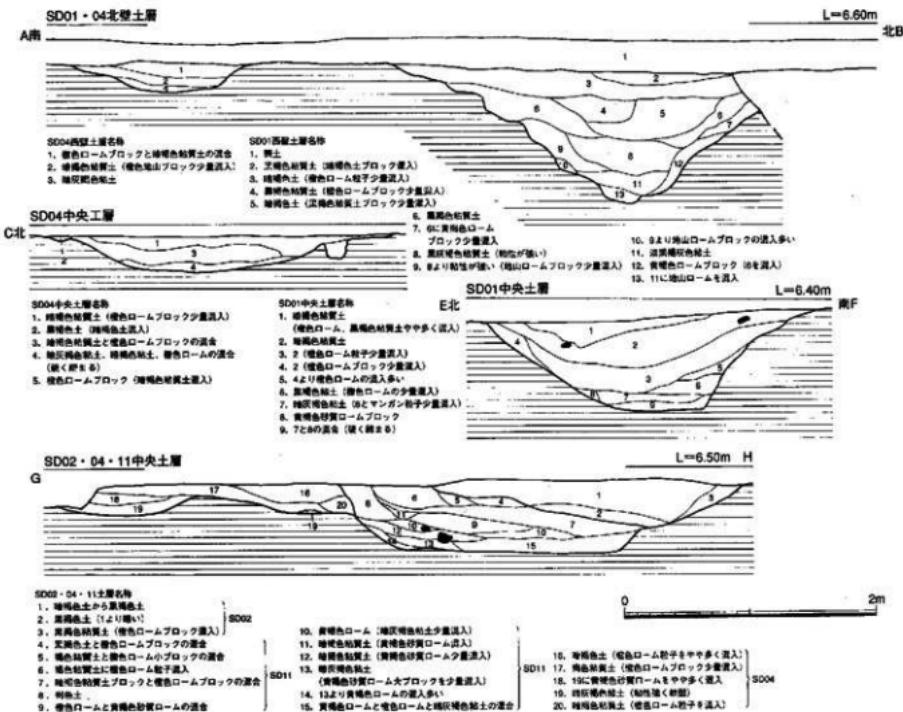


Fig.33 各溝土層図 (1/40)

44~62は下層出土。44~46は土師器。44は小皿ではほぼ完形。口径8.5cm、器高1.1cm、底径6.6cmを測る。外底部は回転糸切りで板目圧痕が残る。45は坏底部片。底径は11.1cmを測る。外底部は回転糸切りで板目が残る。46は碗高台部片。復元高台径7.6cmを測る。外に聞く低い高台が付く。色調は44が浅黄褐色、45がにぶい橙色、46がにぶい黄色を呈す。胎土はいずれも精良。47は瓦器碗の口縁から体部1/6片。復元口径16.8cmを測る。表面の磨滅がひどく調整は不明。色調は灰白色で、胎土は精良。焼成は甘い。48・49は土師質土器の鍋の口縁から胴部片。三角尖帯状に外折する口縁部を持ち、底部は丸く深めである。48は復元口径39cm、49は復元口径24.2cmを測る。内外面ナデで、外面には煤が付着している。49の外面は表面が熱で剥落している。50~54は白磁碗。50は1/3片、51は1/6片、52は1/4片で、復元口径は18.8cm、17.0cm、16.4cmを測る。50は二次的加熱を受けたのか釉の色が悪く、表面にピンホールが多く入る。53は玉縁の口縁部細片。54は底部1/2片。復元高台径は6.1cmを測る。高台はケズリで体部から内面には黄白色の釉が薄くかかる。焼成はやや不良。55~61は青磁。55は碗口縁部1/8片。復元口径は15.4cmを測る。14世紀頃のもの。内面に1状の旋線が巡る。下地の化粧土の上に所オリーブ釉がかかる。56は底部1/2片。復元高台径4.4cmを測る。高台部は厚手でケズリ出す。疊

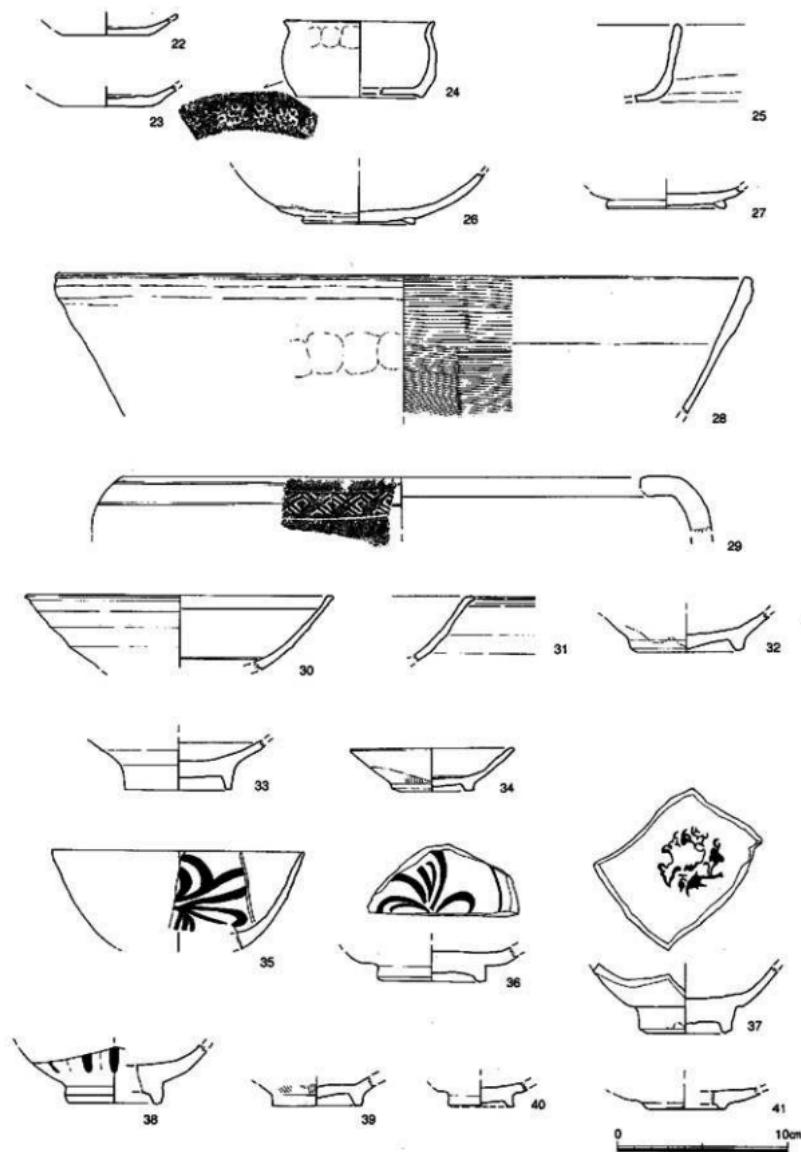


Fig.34 SD01出土遺物 1 (1/3)

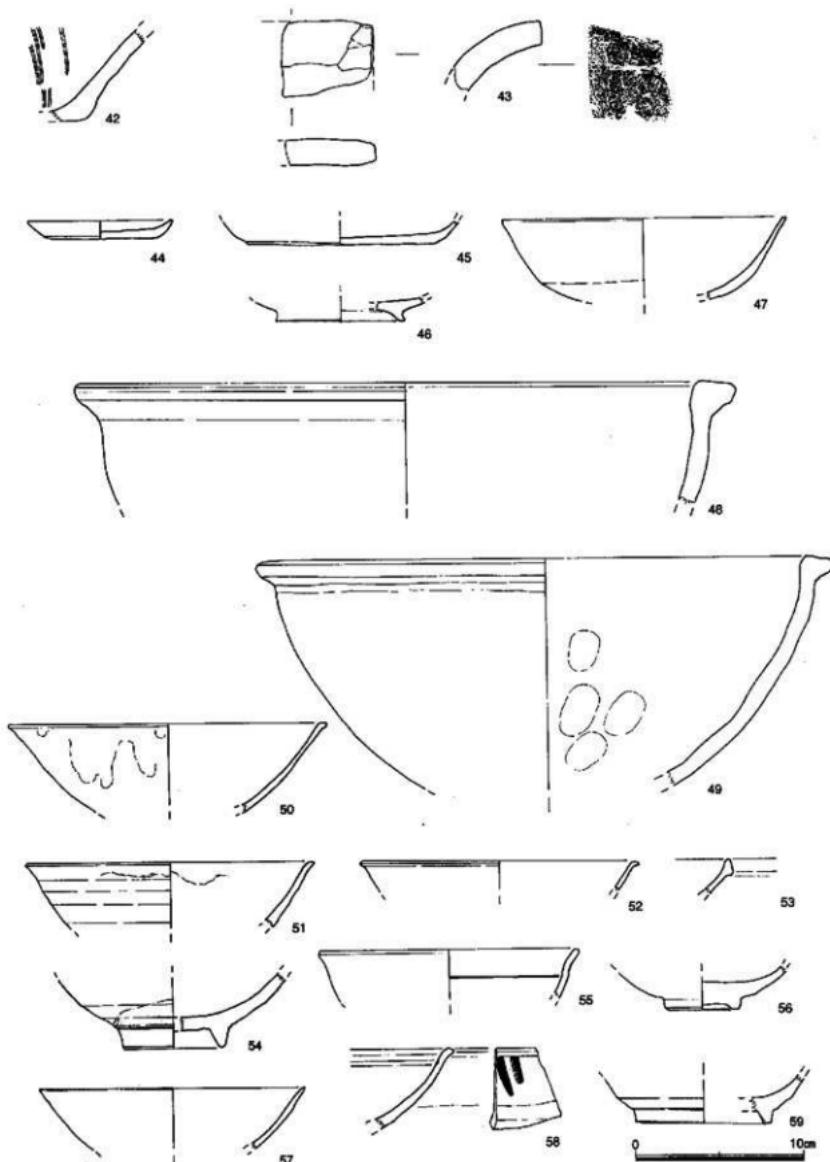


Fig.35 SD01出土遺物 2 (1/3)

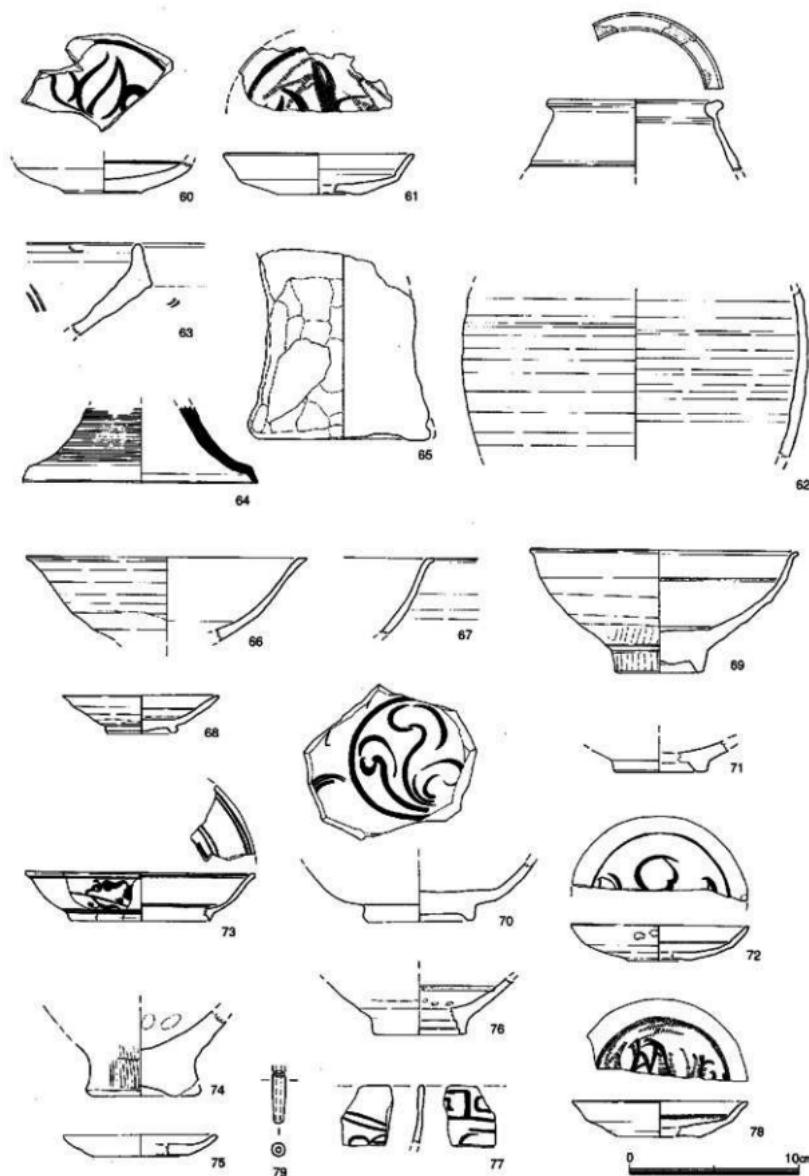


Fig.36 SD01出土遺物3 (1/3)

付きは磨り。黄緑色の釉が厚めにかかり表面には細かい貫入が入る。焼成はやや不良。明代のものか。57は甌口縁部1/6片で、復元口径は15.6cmを測る。白色の化粧土の上に灰オリーブ釉がかかる。58は甌の口縁部細片。内面にヘラ片彫りがある。灰オリーブ釉がかかり、細かい貫入が入る。59は越州窯系碗底部1/6片。復元高台径8.0cmを測る。内底見込みに目痕が残り、発色は良くないがぶい黄橙色釉が内外面にかかる。60は龍泉窯の皿1/3片。復元底径は4.4cmを測る。見込みヘラによる花文が入る。淡い緑灰色釉がかかり、細かい貫入が入る。底部は露胎。61は同安窯系の皿1/3片。復元口径11.2cm、器高2.4cm、復元底径5cmを測る。やや暗い灰オリーブ釉がかかる。見込みに柳目とヘラによる花文が入る。底部は露胎。62は陶器の壺口縁から胴部片。復元口径は10.4cm、復元胴部最大径は20.4cmを測

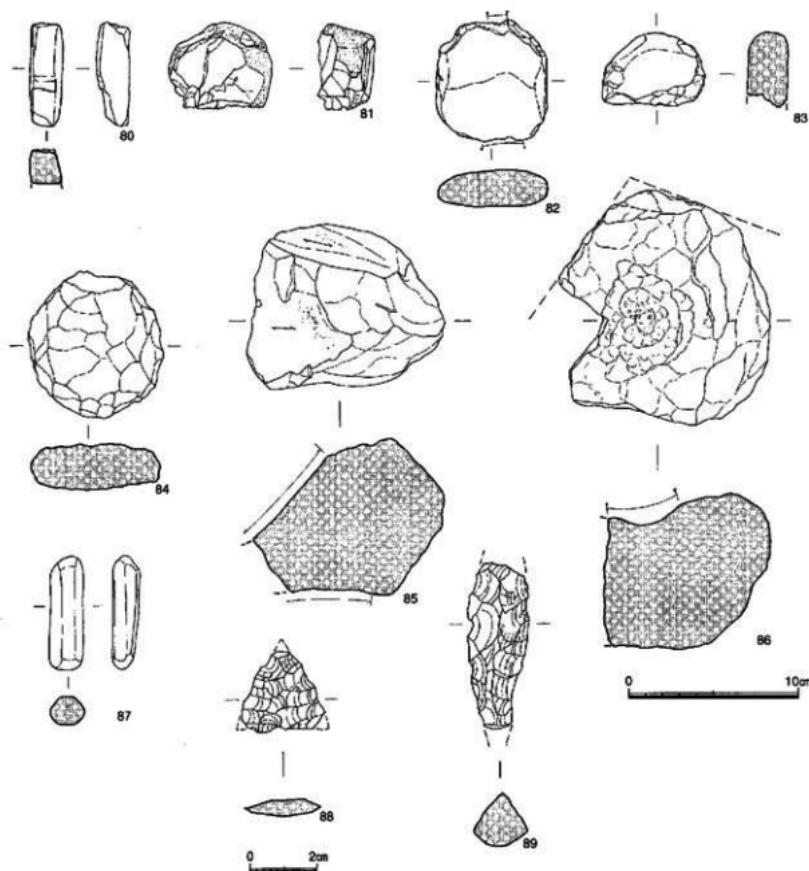


Fig.37 SD01出土遺物 4 (1/3・2/3)

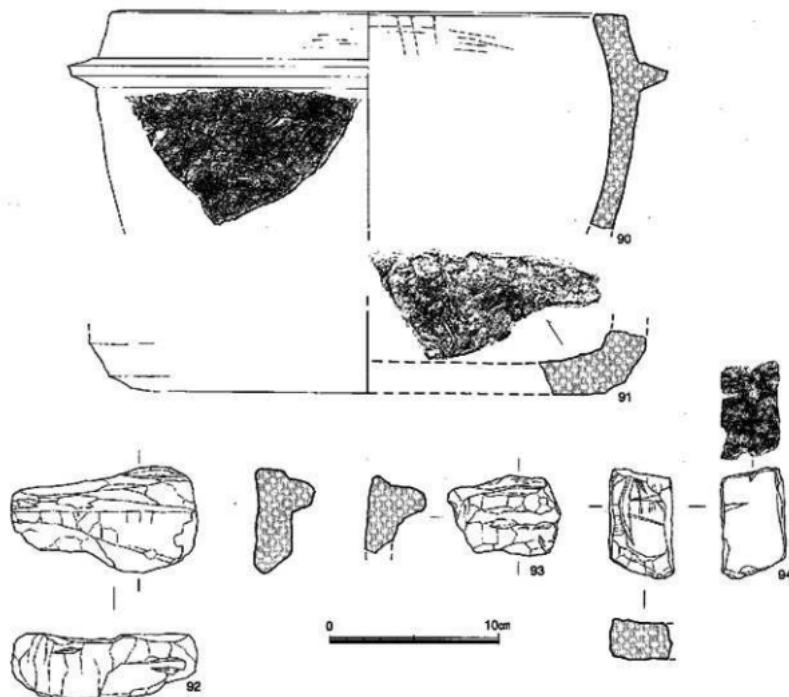


Fig.38 SD01出土遺物 5 (1/3)

る。口縁部には目痕らしき粘土痕跡が3カ所残る。胴部は水引痕が明瞭に残る。暗灰黄色の釉がかかるがかなり剥げている。胎土に黒色粒子を多く含む。63は備前の陶器すり鉢口縁部片。色調は暗灰色を呈し、胎土に細砂を含む。64は須恵器の高坏脚部1/6片。復元脚端径13.8cmを測る。外面カキ目がある。色調は黄灰色を呈し、胎土は精良。65は窓口を呈すと思われる支脚。天井部は欠けるが、中実で重い。表面はナデで指押さえ痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色で、胎土は粗砂粒を多く含む。

66・69は下層埋群、67・68・70~74は底面出土。66~68は白磁。66は碗口縁部1/3片。復元口径16.4cmを測る。体部はケズリで淡い緑灰色釉がかかる。67は口縁部細片。淡い緑灰色釉が薄くかかる。68は皿1/3片。復元口径8.8cm、器高2.3cm、高台径4.2cmを測る。内底見込みは蛇の目状の釉の搔き取り。乳白色の釉が厚めにかかる。外面にはピンホールが入る。69~72は青磁。69~71は碗。69は碗2/3片。口径16.3cm、器高6.3cm、高台径5.3cmを測る。底部は厚く高台をケズリ出す。豊付きは擦り。外底部は露胎。オリーブ灰色釉がかかる。胎土は明赤褐色を呈す。70は龍泉窯系碗底部片。高台径6.6cmを測る。高台部は露胎でケズリ後丁寧なナデ。豊付きは擦る。内面は擗目と見込みにキノコ状の文様がヘラ彫りされている。灰オリーブ釉がかかる。71は底部片。復元底径5.6cmを測る。高台部はケズリで、豊付きは擦る。見込みには線かかった灰白色釉がかかる。72は龍泉窯系皿1/2片。復元口径10.4

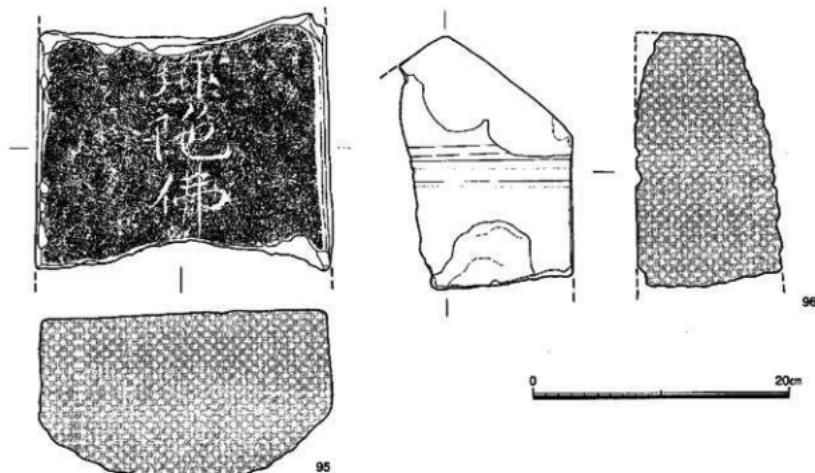


Fig.39 SD01出土遺物 6 (1/4)

cm、器高2.2cm、底径3.6cmを測る。ヘラ片彫りの花文を施す。底部は露胎で、内外面淡い緑灰色釉がかかる。73は明の青化磁器皿1/6片。復元口径は13.6cm、器高2.9cm、高台径は8.0cmを測る。体部外面と内底見込みに文様が入る。15世紀から16世紀前半にかけてのもの。74は弥生時代前期末の壺底部片。底径6.6cmを測る。底部は厚く上げ底である。外面はタテハケ、内面には指押さえ痕が残る。色調は暗い褐色、胎上は粗砂粒を多く含む。75は土師器小皿1/4片。復元口径9cm、器高1.3cmを測る。表面の磨滅がひどく調整は不明。76は白磁碗底部1/4片。復元高台径5.5cmを測る。見込みに1条の沈線が巡る。外底高台はケズリ。淡い緑灰色釉がかかる。77は明代15世紀の青磁碗口縁部細片。口縁外面に雷文が入る。緑味の強いオーリーブ灰色釉がかかる。78は同安窯系皿1/2片。復元口径10.4cm、器高2.15cm、底径5.0cmを測る。外底は露胎でケズリ。灰オーリーブ釉が厚めにかかる。外面貫入が入る。79は細長い管状土錐で、一部欠損する。残存長3cm、直径0.8cm、孔径3mmを測る。

80~89は溝から出土した、石器・石製品である。80は小型の方柱状片刃石斧片。残存長6.1cm、幅1.9cm、厚さ2cmを測る。両側面は研磨、上底両面は欠損する。頁岩製である。81はサヌカイトの石核である。縦長5.2cm、横長6.4cm、厚さ2.9cmを測る。一部自然面が残る。82は石錐である。長さ6.3cm、幅6.5cm、厚み2.1cmを測る。上・下端中央に組掛け用の打ち欠きがある。表面鉄分が付着し赤みを帯びる。玄武岩製。83は砥石片か。残存長4.3cm、幅6.2cm、厚み2.4cmを測る。目の細かい砂岩を用いる。上面と底面は磨り。84は凹盤形石製品。長径8.5cm、短径7.7cm、厚さ2.6cmを測る。側縁は粗削調整である。灰白色の砾岩である。85は砂岩製の粗砥石片。残存長11.4cm、厚さ7cmを測る。上面・底面、両側面が砥面である。86は山形板碑を転用した叩き石。最大長14.0cm、最大厚9.2cmを測る。上面に使用痕の窪みがある。砂岩製で、二次的に焼けて赤変している。87は水晶の結晶である。全長6.7cmで、直径1.60×1.85cmの断面6角形を呈す。加工痕はないが、風化がひどい。下層出土。88は三角形を呈する黒曜石の石錐。先端は欠損する。残存総長1.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。89は黒曜石の石錐である。

残存長3.3cm、最大幅12cmを測る。断面は三角形を呈す。

90~94は滑石製石鍋。90は口縁から鈎片。復元口径30.4cm、復元鈎部径35.6cmを測る。外面工具によるケズリ、内面ケズリ後丁寧な研磨。横方向の擦痕あり。口端部はケズリ後研磨。外面下半は黒く煤けている。91は底部片。復元底径は約33cmを測る。内外面工具によるケズリ痕が残る。92は鈎片の転用品。全長10.9cm、幅6.3cmを測る。破損面は削って再加工している。93も鈎部片。残存長6.1cm、幅4.6cmである。94は体部小片を利用したもの。長方形状を呈し、残存長6.2cm、最大幅3.8cm、厚さ2.2cmを測る。上面に橢円形状に浅く1mm程窪んでいる。

95~96は砂岩製の板碑片である。95は残存長20.5cm、幅23cm、厚さ12.8cmを測る。背面には雑な工具痕が残り、側面はノミ状工具による丁寧なケズリ後研磨。赤褐色を呈し焼けている。表面には「□弥陀佛□」が篆研彫りされている。96は山形板碑の頂部片。残存長20.2cm、厚さ11.5cmを測る。額部に二条の凹線が彫られている。背面に粗いノミ状工具痕が残る。焼けている。

SD02 (Fig.33, PL.11-(2)-(3)-(6)) 調査区東側で検出した北寄りに主軸を取る浅い溝である。この溝は東側の第121次調査区のSD02溝から続くもので、このSD02は第121次調査区内で立ち上がりしており、約18m程の全長で、北側のSD01溝に合流する。溝幅は2.4m、深さは40cm程である。埋土は暗褐色粘質土が主体となる。

出土遺物 (Fig.40・43, PL.12) 中世の土師器、土師質土器、瓦質土器、青磁・白磁片と古墳時代土師器・須恵器、弥生土器、壺棺片、黒曜石剥片などが出土している。

97・98は土師器小皿。97は1/3片で、復元口径9.6cmを測る。全体に崖滅がひどく調整は不明。98は1/2片で、復元口径9.6cm、器高1.6cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は97がにぶい黄褐色、98がにぶい橙色で、いずれも胎土は精良。99は唐津焼き碗底部1/5片。復元高台径5.6cmを測る。高台疊付きは露胎で擦っている。熱を受けたのか外面が荒れ、にぶい黄褐色釉を呈す。内面は暗オリーブ釉で細かい貫入が入る。101は備前焼スリ鉢口縁部小片。色調は暗灰色で、胎土に細砂が多く含む。100は白磁碗底部1/3片。復元高台径は約5cmか。体部内外に横目を施す。外底部は露胎でケズリ。102は土師器のタコ壺1/4片。復元口径6cmを測る。体部中央に紐掛け円孔が1カ所ある。孔径は7mm以上か。色調は淡黄色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。103は土師質土器の火鉢又は火舎口縁部小片。外面口縁直下に連続するスタンプ文が施される。SD01上層出土の29と同一個体の可能性がある。117は鉄釘と思われるが、途中で折れて曲がっている。残存長6.7cm、断面は方形で一辺7mmを測る。129は黒曜石の石歯。鐵長2.4cm、幅1.6cm、厚み5mmを測る。

99・117は下層出土、その他のは上層出土である。

SD04 (Fig.33, PL.11-(1)) SD01の南側に並行して東西に伸びる浅い溝。調査区東側で直角に折れて南に伸びると思われる。東側では上層観察でSD02・11に切られる状態を示す。SD01との間隔は1~1.5m程である。溝の幅は1.2m~2m、深さは25cm位である。埋土は橙色地山ロームブロックと暗褐色粘質土で、底は暗灰褐色粘土となる。溝底からSK10を検出している。

出土遺物 (Fig.40・43) 中世の土師器、上師質土器や中国産貿易陶磁器、弥生土器、壺棺片、砥石片、黒曜石剥片などが出土している。104は土師質土器の火鉢口縁部小片。口縁部は輪花状を呈し、外面には菊花のスタンプが3個ずつ各花弁に入っている。色調は外面は灰色、内面は淡黄色を呈す。胎土は精良。いわゆる奈良火鉢といわれるもの。106は土師質土器の鍋口縁部小片。内面にヨコハケ、外面は粗いナデで、煤が付着する。色調は黒褐色で、胎土に細砂粒を多く含む。105は瓦質土器スリ鉢底部1/6片。復元底径11.1cmを測る。体内部には粗いヨコハケ後、6本単位の御目がある。使用により、磨り減っている。体外面に1条の沈線が巡る。色調は暗灰色を呈し、胎土は精良。118は鉄釘

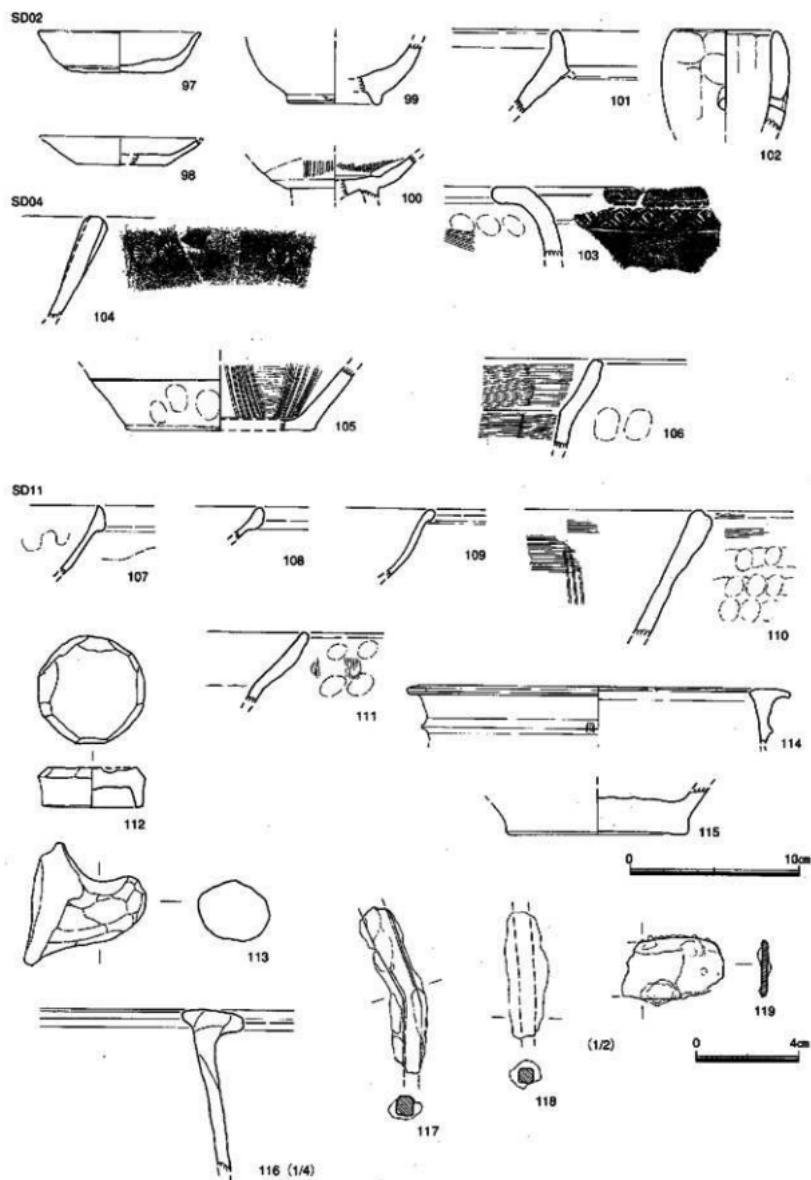


Fig.40 各溝出土遺物 (1/3・1/2・1/4)

か。残存長5cm、断面方形で一辺5mmを測る。全体に鋸がひどい。125は磨石または叩石である。全面が磨かれており、下面には使用による窪みがある。長さ9.4cm、幅7.6cm、厚さ2.8cmを測る、砂岩の扁平な石である。

SD11 (Fig.33, PL.11-(2)-(6)) 調査区東側で検出したSD02に切られ、SD04を切る溝。第121次調査区から続く溝。規模は2.3m以上、深さは約80cmを測る。埋土は上層が暗褐色粘質土を主体とし、下層は黒褐色粘質土と橙色ローム粘土主体となる。上層と下層の境には礫石が流れ込んでいる。

出土遺物 (Fig.40・43, PL.12) 中世土師器や中国産貿易陶磁器と弥生時代甕棺片や古墳時代土師器、須恵器、黒曜石刷片などが出土している。

107-108は玉縁の白磁口縁部小片。いずれも乳白色釉がかかる。109は青磁碗口縁部小片。口縁端部が丸く肥厚する。龍泉窯系青磁で14世紀のもの。110は土師質土器のスリ鉢口縁部小片。口縁部は肥厚し端部に浅い段が付く。外面はナデで指押さえ、内面は3条の御目とヨコハケで、使用により磨滅がひどい。色調は淡黄色、胎土は精良。111は土師質土器の鍋口縁部小片。口縁外面はナデでハケ目が残る。色調は褐色で煤が付着する。胎土に砂粒を少量含む。112は白磁高台部転用品。縁辺を円板状に打ち欠き、高台も部分的に打ち欠いている。直径は6cmを測る。色調は白色からぶい黄色で、胎土は精良。113は土師器の把手。断面は丸味を持ち、指押さえ痕が残る。断面径は4×3.5cmを測る。114~116は弥生時代中期の甕棺の破片。114は口縁部1/6片で、復元口径30.6cmを測る。逆L字形の口縁部で、直下に1条の三角突帯が付く。接合面にタテハケが残る。115は大型甕底部片。復元底径14.9cmを測る。外底はわずかに上げ底。内面には指押さえ痕が残る。116はT字形の口縁部を持つ大型棺の口縁部細片。復元口径は約58cmを測る。胎土に粗砂を多く含む。119は扁平な不明鉄器片。残

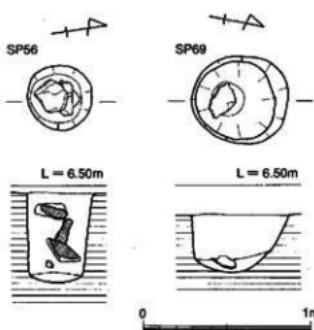


Fig.41 SP56・69 (1/30)

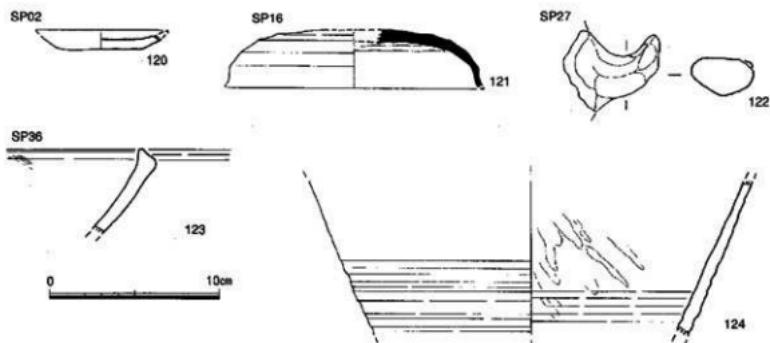


Fig.42 ピット出土遺物 (1/3)

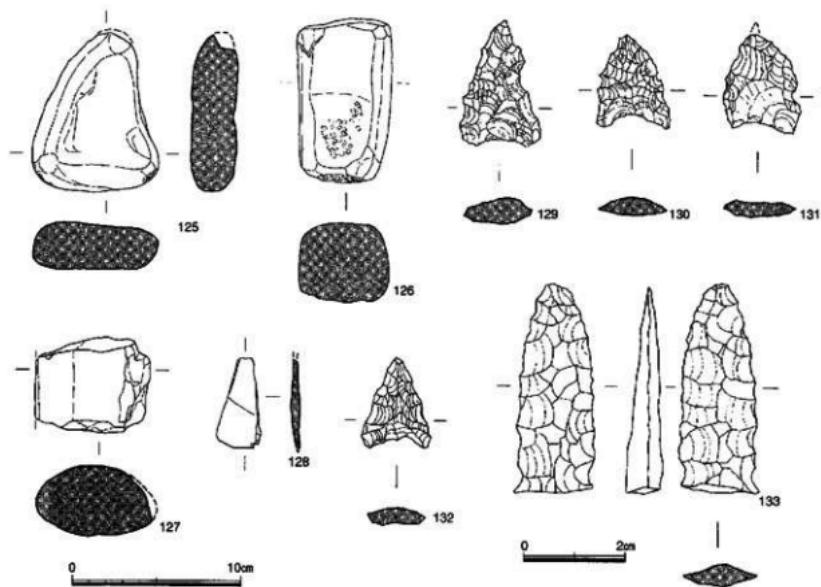


Fig.43 各造構出土石器 (1/3 · 1/1)

存長4cm、幅2.3cm、厚み2mmを測る。鍔ガンナであろうか。126は方柱状の砂岩の叩き石である。残存長9.8cm、幅5.5cm、厚み4.7cmを測る。上面と両側面が磨かれている。下端が使用による敲打痕が残る。133は尖頭器の破片と思われる。表面は風化が進む。残存長4.1cm、幅1.5cm、厚み0.65cmを測る。石材はサヌカイトである。

107が下層出土で、他は上層出土である。

6. ピット及びその他の出土遺物 (Fig.41・42・43)

遺物の取り上げを行ったピットは129を数える。埋土で大きく暗褐色、黒褐色、黒色の3種類に分類出来る。これは時期差を表すものであろう。

SP56 (Fig.41) は直径38cm、深さ53cmの円形のピットで、中に長さ20cm程の扁平な玄武岩と砂岩の焼けた割石が3個入っていた。埋土は黒褐色粘質土である。土器細片が5点出土している。

SP69 (Fig.41) は直径が57×52cm、深さ33cmを測る円形のピット。埋土は暗褐色粘質土である。SC 21床面で検出しているので、これに伴う可能性がある。土器の細片が2点出土している。

120はSP02出土の土師器小皿底部片。復元口径約8cmを測る。色調はにぶい黄褐色で、胎土は精良、焼成は不良。121はSP16出土のは須恵器の坏蓋1/3片。小田氏の九州編年のⅢ A期のもの。色調は暗灰色で、胎土は精良。122はSP27出土。土師器の牛角状の把手である。長径3.8cmを測る。胎土に粗砂粒を多く含む。123はSP36出土のスリ鉢口縁部小片である。124は表土出土の褐釉陶器壺腹部小片。

ミズビキ痕が明瞭に残り、外面に淡褐色釉、内面にその釉のしぶきがかかる。130はSP22出土。黒曜石の石鎚で、鍔長1.8cm、幅1.4cm、厚み3mmを測る。131は試掘トレンチ出土。黒曜石の石鎚である。鍔長2cm、幅1.6cm、厚さ2.5mmを測る。剥片利用のもの。132は表土出土。黒曜石の石鎚で鍔長1.8cm、幅1.4cm、厚み2.5mmを測る。

3) 小 結

以上調査の概要について述べたが、ここでは遺構の年代ごとに若干の整理を行い、まとめとしたい。主な遺構・建物の時期は縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、中世の3時期に区分出来る。

縄文時代は遺物のみで、遺物133の石器で縄文時代早期と思われるが、周辺では旧石器時代から縄文時代の遺物が少數ではあるが出土しており、集落があったと思われる。

弥生時代の遺構としては、貯蔵穴がある。SK10・12・16・26などである。時期的には明確な遺物がないので、時期は確定できないが、SK12で出土した弥生土器の甕底部片や、周辺の調査例から見て、前期の段階に収まるものと考えられる。甕棺の破片が出土しているが、甕棺は検出出来なかつたので、当地点は墓域からははずれている。

古墳時代は竪穴住居跡である。SC13は焼失家屋である。いずれも出土遺物は少なかったが、時期としてはSC13～15が古く、SC17・21が新しい。いずれの住居跡も前期の範囲で、SC17がやや中期にかかるかも知れない。SC17・21は建て換えである。中世の溝の中から古墳時代前期の遺物が出土しており、竪穴住居の遺物が流入しているのかも知れない。

中世の時期は各溝と土坑である。検出した溝は館もしくは屋敷の区画をなすものである。当地周辺は16世紀の大内氏支配時代、早良郡代の大村興景が知行屋敷を与えられたところで、その屋敷名が地名として残っている。今回の溝はその屋敷地の区画をなす溝の可能性がある。周辺の調査から屋敷区画の溝は北側と南側に2か所確認されている。今回の溝は北側の屋敷区画につながるものである。遺物は中世前期の13世紀からのものを含み、屋敷としては中世前期から存在したのかも知れない。場所的に丘陵の先端部にあり、屋敷地を築くには最適の地点であったろう。

第5章 第180次調査の記録（調査番号9527）

1) 調査区の地形と概要

申請地は洪積ロームからなる中位段丘の有田・小田部台地の中程、八手状に開析する支丘群の西端に位置し、先端近くの西側緩斜面に立地する。

著しい削平を受けており、表上下20cm程で鳥栖ローム下部の基盤層に達する。標高は約8mで、西側沖積地との比高差は2mである。

周辺では第59・60・91・170・173次調査が実施されている（Fig.44）。第59・60次調査では弥生前期から中世の土壙41基、前期壺棺1基、中期円形住居2軒、内法30m程で矩形に開む15世紀代の溝・溝内側の掘立柱建物10棟、同期の段落ちと溝内から縄文晩期土器片と弥生前期末から中期前半の多量の壺棺片が検出されている。北側の第150次調査では弥生時代の竪穴住居1軒、貯蔵穴7基、古墳時代の竪穴住居5軒、掘立柱建物4棟、溝2条、59次の段落ちから遡く15世紀代の溝1条を検出している。南側の170次調査では第5・116次調査の縄文中期阿高式期の貯蔵穴群に連なる貯蔵穴3基、落し穴状土壙1基、弥生中期中葉の円形住居1軒、土壙2基、古墳時代前期の竪穴住居1軒からは銀治津や鉄器が検出されている。他に弥生中期から古墳時代の掘立柱建物3棟、第59・60次調査の中世方形区画溝に連なる区画溝、区画内の柱穴からは永楽通寶が検出された。また15・16世紀代の火葬土壙1基を検出している。173次調査では9世紀代の井戸1基が検出された。

本調査区では著しい削平のため、ほとんどの遺構は北西部の縄文晩期から古墳時代の包含層が残存する緩斜面部で検出された。

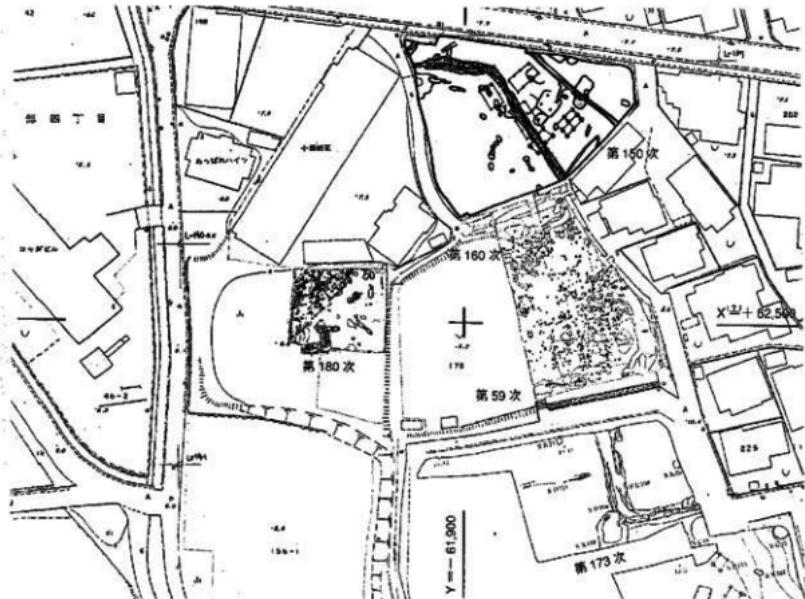


Fig.44 第180次調査区地形図 (1/1000)

主な遺構は縄文時代晩期夜臼式期の円形整穴住居1軒、古墳時代前期の滑石製玉工房である方形整穴住居1軒、後期の整穴住居2軒、溝1条、立柱と考えられる柱穴3基、中世の土塹5基、近世の土塹2基、第60次調査区から西に延びる溝を利用したと考えられる段落ち1ヶ所である(Fig.45)。

遺物は包含層から多量の弥生時代中期の土器と、少量の縄文時代晩期夜臼式土器、古墳時代の土師器、須恵器等を、古墳時代前期の住居からはまとまった土師器と多数の滑石小剥片と白玉未製品を、古墳時代後期の廳付住居からは少量の土師器・須恵器を検出している。総量はコンテナ5箱分である。

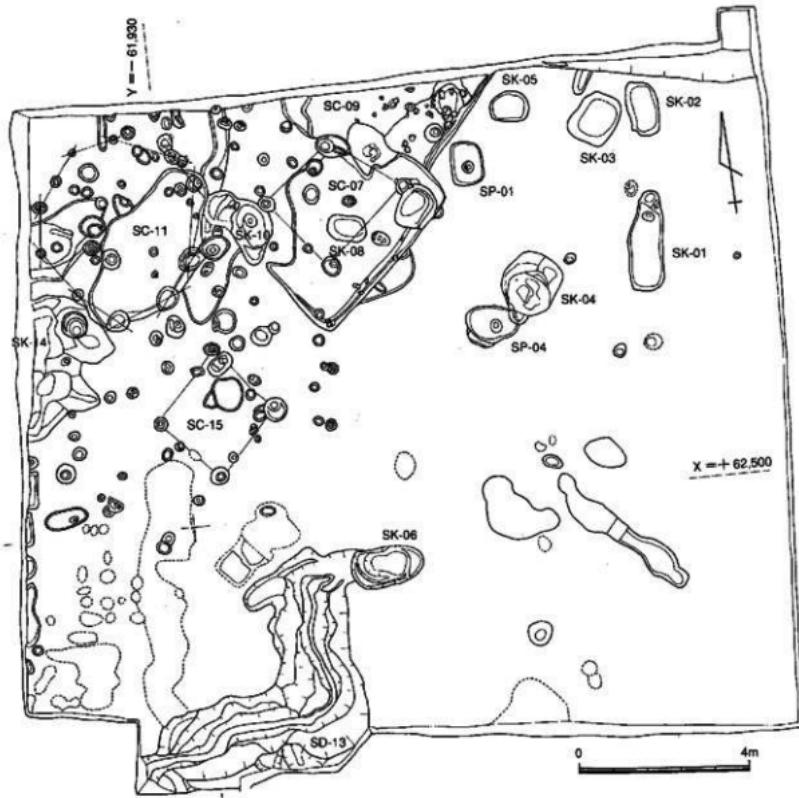


Fig.45 遺構全体図 (1/120)

2) 遺構と遺物

1. 積穴住居

積穴住居は調査区北西隅で縄文晩期夜臼式期のSC11と、北西緩斜面に沿って古墳時代前期のSC09、これを切る施付住居SC07、同方向で四柱穴のみ残存するSC15の3軒を検出した。

SC11 (Fig.46 PL.14)

調査区の北西隅の緩斜面上で検出した。調査中は長さ4.3mの楕円形の土壙と考えていたが、整理途上で、上壙東側の壁に沿った柱穴に上面からの切り合いがない事、土壙外の西側に東側円弧の延長上に同間隔で円形に柱穴が存在する事から円形積穴住居と判断した。西側半分が流失しているが、径4.5m程度0.8~1.5mの間隔で10個の柱穴が壁に沿って配置され、中央に1.45m間隔で一对の棟持柱がある。柱痕跡は径20cm程度、住居内部に炉は検出されなかった。床面から8~15cm程は地山土の小塊を半量含む黒褐色土の客土がなされ、その上に遺物を含む黒褐色土が堆積する。

出土遺物 (Fig.47 PL.18) 出土遺物は板付式の共伴は確認できなかったが、夜臼II b式の深鉢と丹塗壺、石皿1点と黒曜石削片50片をはじめとする剥片61片を検出した。

1は口径17.7cmのやや大型の丹塗磨研壺の口縁で、口唇外面下端に棱をつくる。内外面に丹塗がなされヨコケンマを施す。2~7は深鉢である。2・3は口唇外面端部に突帯を貼付するもの、4・5は端部のやや下に貼付するものである。2は口径20cm程度肩の張らない体部で内外面にヨコナデを施す。突帯には器面調整板の木口で刻目を施す。3は比較的大きな矩形の突帯を貼付し口径20.5cmを測る。摩滅のため調整は不明。口縁の刻目はφ2.5mm程度の円形の工具で押圧する。4は肩の張る体部で内外面にヨコナデを施し、口唇内面が若干窪む。突帯は小さな断面三角形で、調整板木口で刻目を施す。5は同様に肩の張る体部で器壁が薄い。調整は不明。突帯はさらに小さく、板木口で刻目を施す。6は4・5タイプの肩部で、ゆるく屈曲した外面に断面三角の刻目突帯を貼付する。内面はヨコナデ

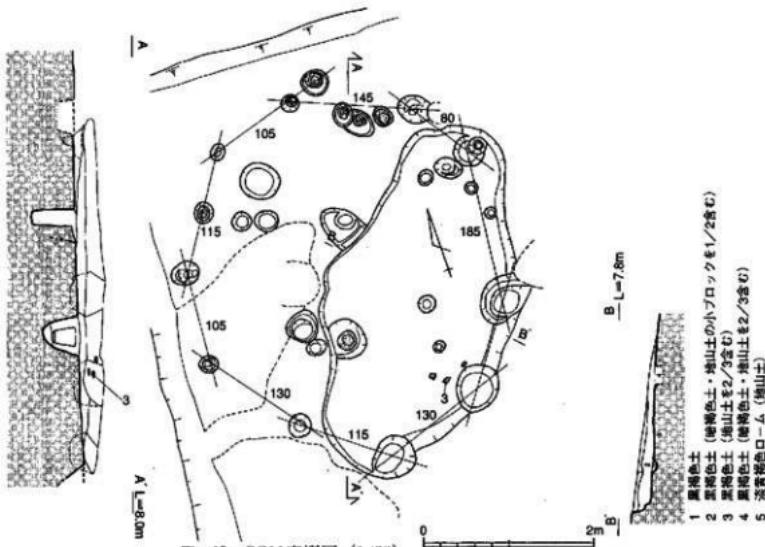


Fig.46 SC11実測図 (1/60)

後ケンマ、外面上半はヨコナデを施し突堤下にはヨコ条痕を残し煤が付着する。刻目は断面円形の工具で施す。7は円盤貼付の底部で径8.4cmを測る。胎土は2mm以下の石英粒を多量に含む。8は土製紡錘車の半成品で径5.3・厚13mmで、焼成前穿孔の軸孔は8mmを測る。9は黒耀石製の石錐とこれを再利用した使用剥片で先端部の調整剥離、使用痕は風化が進んでおり、晩期以前の所産で、晚期に再度裏剥離右側の御縁を使用している。10は黒耀石製の削器で、裏剥離面右側に二次調整を施す。11は細粒砂岩製の石皿で柱の根固めに転用されたもの。現存で17.3×10.1×1.7cmを測る。表裏両面が著しく使用され薄くなっている。他に黒耀石剥片が50片出土しており石器製作場の可能性がある。

SC09 (Fig.48 PL.14・15)

調査区北端の中央部に位置し、主軸を斜面と同一方向のN-39°-Eにとる。遺構の半分が調査区

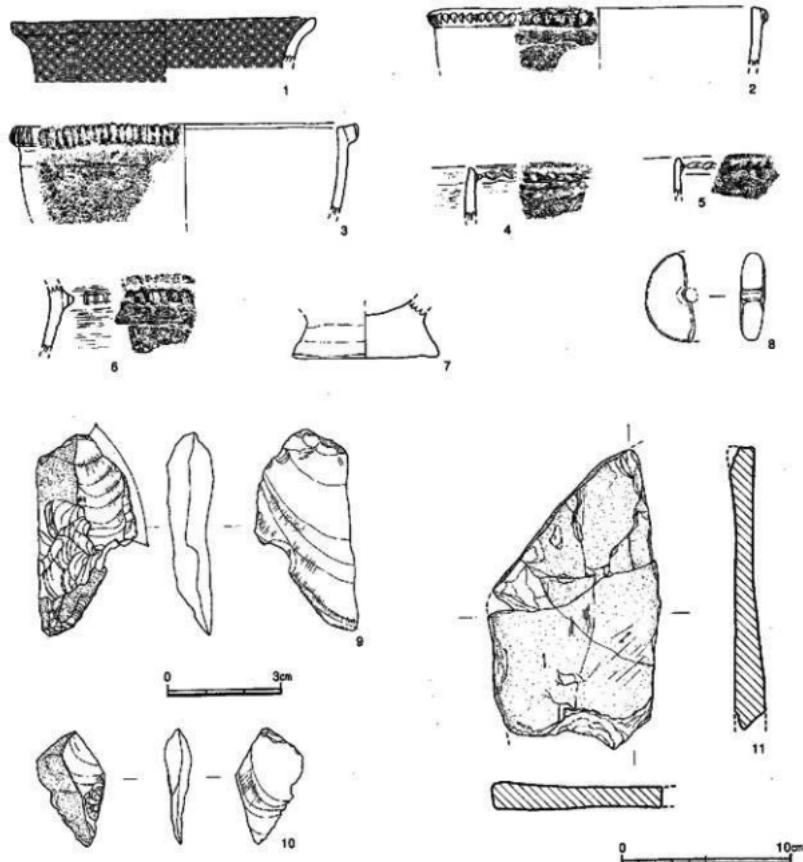


Fig.47 SC11出土遺物実測図 (1/3・3/4)

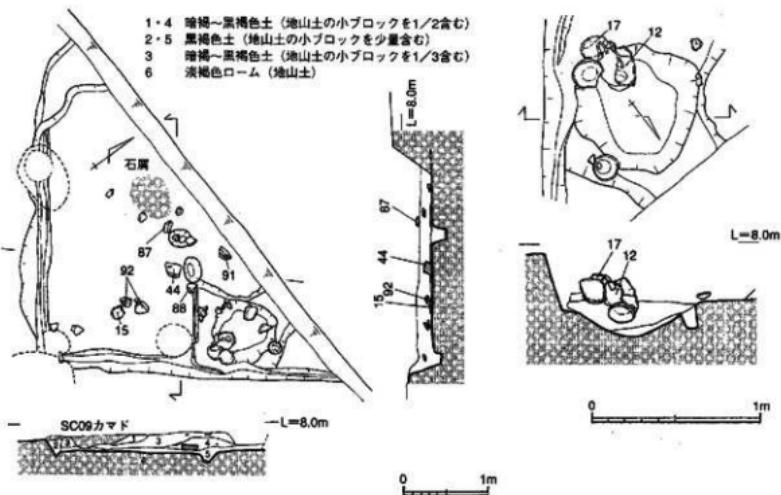


Fig.48 SC09・屋内土壤実測図 (1/60・1/30)

外で全体が明らかでないが、現状で3.9×3.7mを測る方形の竪穴住居である。南辺は古墳時代の住居SC07に切られる。壁に沿って幅15・深8cmの細い壁溝が巡り東壁で屋内土壤に連なっている。西壁には幅60cm・高5cm程の低いベッド状遺構が設けられ壁溝は無い。南辺では幅170cm程の間隔をとって小溝と柱穴で区切られ、砂岩の砥石が据えられ西側の50cm程の範囲に滑石剥片と白玉未製品が多量に散布する。主柱穴は明らかでない。遺物は土師器片と多くの弥生土器片が大半流れ込みの状態で検出され、屋内土壤には多量の滑石剥片と2個体分の土師器壺が破砕して廃棄されている。

出土遺物 (Fig.49 PL19・20) 12は土壙出土の土師器壺で球形の体部を持つ。口径14・器高23.3cmを測る。外面は粗いハケ調整で内面にケズリを施す。胴部外面下半の剥落が著しく煤が付着する。13は12同様短く直線的に外反する口縁の壺で口径13.6cmを測る。14は器壁の薄い畿内系の壺で口径16.8cmを測り、内面頸部下にはケズリを施す。15は混入した弥生中期後半の瓢形壺の底部で底径12.6cmを測る広い底部である。調整は不明。住居内からは同期の土器片が多く検出され周囲に同期の遺構の存在を伺わせる。16・17は土師器高壺の壊部である。16は口径18cmを測り、口縁は直線的に延びて体部の屈曲が中位下にある深い体部を呈する。外面にはハケ調整が若干残りヨコナナデ後ケンマを施す。17は口径16.7cmで口縁がゆるく外反して開き屈曲が中位にある浅い体部を呈する。脚が剥落したのみの完形品である。18はミニチュアの粗い造作の鉢で口径6.6cm・器高6.3cmを測る。外面には指頭圧痕が残り、内面は板ナナデ後粗いナナデを施す。19・20は壺の胴部破片を円形に整形した土器片円盤である。19は32×29×5mmを測り重量は5.6gである。表裏両面からの敲打により円形に整形する。20は35×32×6mmで重量6.3gを測る。両面から敲打によって円形に整形し、さらに両刃状に擦って面取りをする。

Fig.50は床面と土壤内から出土した滑石玉関係の石器である。21～25は床面上出土。21～24は臼玉の未製品で径5～11mm・厚2～3.5mmの多角形に滑石の剥片の周囲を折り取って整形しており、金属の利器を用いて矩形の素材を連続して切り出す様な組織的な製作技法は用いられていない。適当な大きさに剥離された素材を一点ずつ仕上げている。表裏両面もほとんど剥離された節理面のままである。

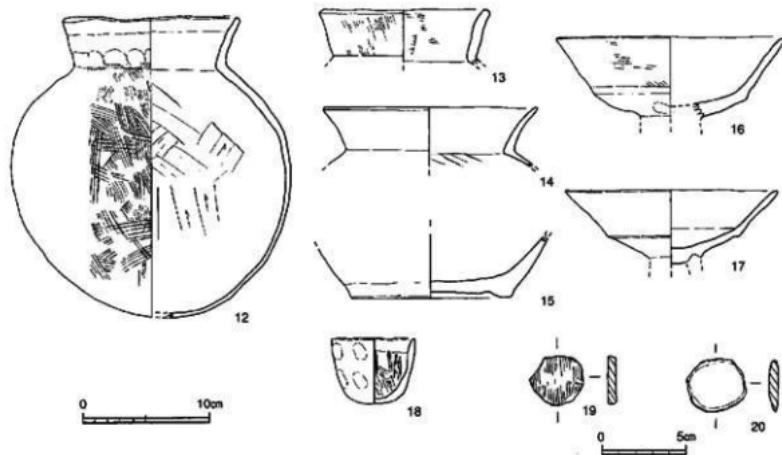


Fig.49 SC09出土遺物実測図1 (1/4・1/3)

21は径6・厚3.5mmの小形厚手のもので穿孔途中のもの。22は径7・厚2mm程の半折品で、錐の横ブレが激しい様で、表面に3・裏面に2ヶ所穿き損ねの小孔がある。この様な錐の小孔を複数持つものが多く、ブレが欠損の大きな原因となっている。23は表裏を研いで調整したもので8×9×2mmを測る。表面に2ヶ所穿孔途中の小穴が有る。25は縦剥ぎの素材剥片で、28×18×5mmを測り、8枚程の原材が取れそうで、裏剥離面には3面の剥離痕が有る。打面以外の周縁には主剥離面側から調整剥離が施される。26~43は土壤内の出土。26は唯一の製品で径4.5・厚2・孔径2mmを測る。全面に砥ぎが施され側面は稜を成している。穿孔は片側から。27~43は製作途中のもので、37・38以外は穿孔途中での折損品である。27~32・38・39は方形に他は多角形に周縁を折り取って成形している。36は梢円形を呈し10×4×2mm程と思われる。他は径6~11・厚1.5~3mmを測る。39・41は剥離面のまま、27・35は穿孔面のみ、他は表裏両面を砥ぎ穿孔を行なう。孔の径は1.3と1.5mmが有り、2種の錐を用いている。30・37には複数の穴が有る。44・45は暗黄灰~明黄褐色を呈する中粒砂岩製の砥石である。44は作業場の床面上に据えられた大型の砥石で長20.3・幅15.5・厚8.7cmを測る。表裏両面が使用され窪んでおり、上面の砥減りが著しい。台石も兼ねており、上面には2~5mm前後の細かな敲打痕が残る。45は砥石を方柱状に小割りにしたもので底面は表面左上と下に一部残るのみである。長9.7・幅7.2・厚5.5cmを測る。幅6~7mmの溝を有する玉磨砥石で、左上に斜方向に4条、下方で横方向に1条認められる。他に覆土の水洗の結果滑石の屑片を412片検出したが、素材の母岩と錐は検出されなかった。

SC07 (Fig.51 PL.15)

調査区北側の中央部、緩斜面に位置し、西壁は流失している。四柱式の窓を有する方形の堅穴住居で、SC09を切っている。残存で4.5×3.1m・深12cmを測る。主軸は地形に沿ってN-45°-Eにとる。東壁と南壁に幅26・深5cmの浅い壁溝を巡らし、北東壁の105×70・深45cmの屋内土壤に連結する。支柱穴は4本で、径30~40・深30~50cmの掘方に径20cm程の柱を据える。柱間は1.95~2.5mである。

窓は北壁の中央部に設けている。90×70cm・深10cm程の浅い円形の掘方を掘削し、厚さ15cm程の暗灰褐色土混じりの地山ローム土を敷いて形成している。上部は削平されているが、中央部に50×45

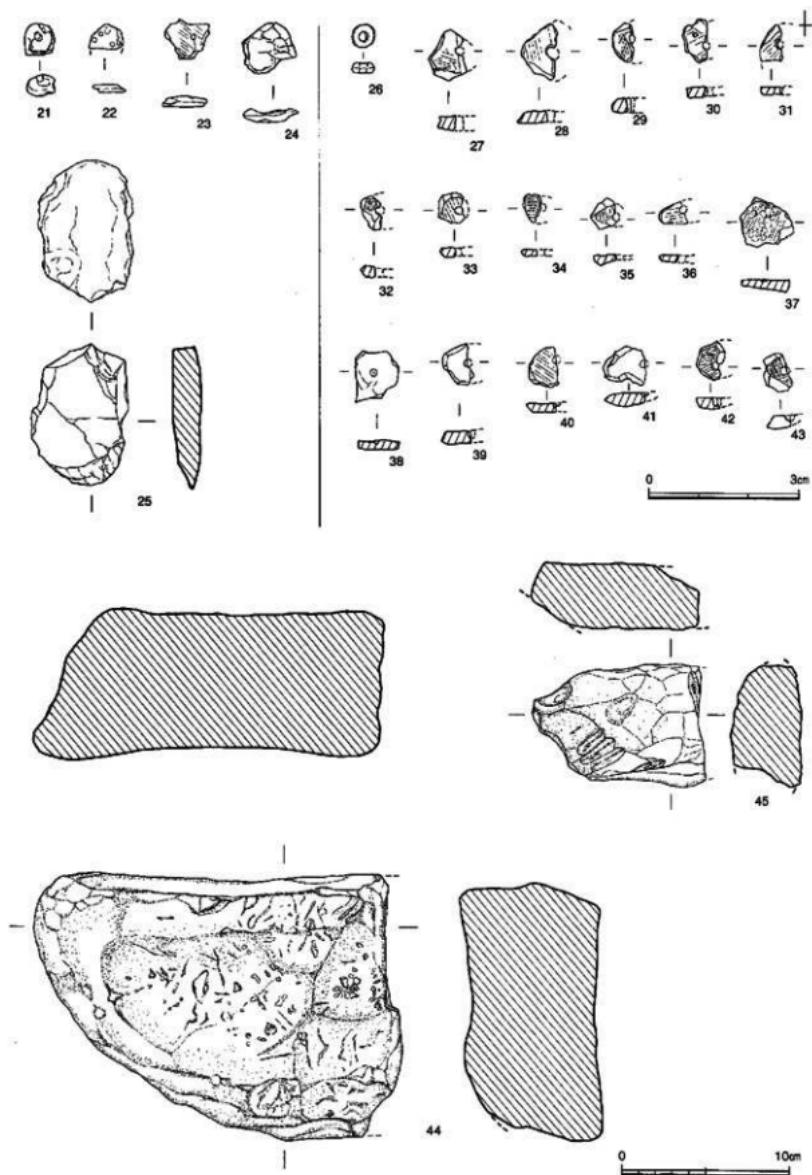


Fig.50 SC09出土遺物実測図 2 (1/1 - 1/3)

cm・厚5cm程被熱で赤変した床面が残っている。中央には炭・灰・焼土粒を含む覆土が残る。窓土は180×130cmの東西に長い方形に近い形で広がる。

遺物は黒褐色土の覆土中より床面から5~10cm浮いた状態で検出される。

出土遺物 (Fig.52 PL21) 46~50は須恵器で、46は壺蓋。口径13.2・器高4.5cmを測る。体部外面は中位で低い段を成し、2/3から上位は右回転のヘラケズリを施す。口縁端は若干外に開き、内側に段を有する。内底はタテナデを施す。47~48は壺で、47は口縁部を欠くが、受部で径14.6cmを測る。体部内・外面は右回転のナデ、体部下半は逆方向の回転ヘラケズリを施す。内底には回転ケズリ時の同心円の当具痕が残る。48は口径13.6cmで受部は小さく、立上りは1.5cmと比較的高い。49は腰か長頸壺の肩部の小片で胴径18.2cmを測る。約2cm程の間隔で2条単位の沈線を施し、肩部にヨコカキメ、沈線に横曲列点文、沈線間と下沈線下位に波状の横尚押引文を施す。内部にはしばり痕が残る。50は大型の壺の胴部で外面に木目並行の平行叩後ヨコカキ目を施す。内面は摩滅しているが当具痕は残っていない。51は土師器の壺で口径13.2cm。短く外反する口縁で調整は不明。52は高壺の壺部小片で肩部が低い段をなし、径13cmを測る。内外面にヨコケンマを施す。6世紀前半。

SC15 (Fig.53 PL15)

調査区中央西寄りの位置で検出した。著しい削平のため4本の主柱穴と屋内土壙のみ残存する。

主柱穴は径32~55cm・深25~35cmの円形の掘方に径20cm程の柱を据る。柱間は2.0~2.2mで主軸をN-38°~40°-Eにとる。屋内土壙は61×45・深35cmの方形で北側の主柱間に位置し、SC07の有り方に近い。内部からは土師器の小片のみ検出している。SC07とは間隔が近過ぎる事、主軸方位はSC09に近い事、しかし四柱式である事、柱穴間に土壙を持つ事はSC07に近しい。

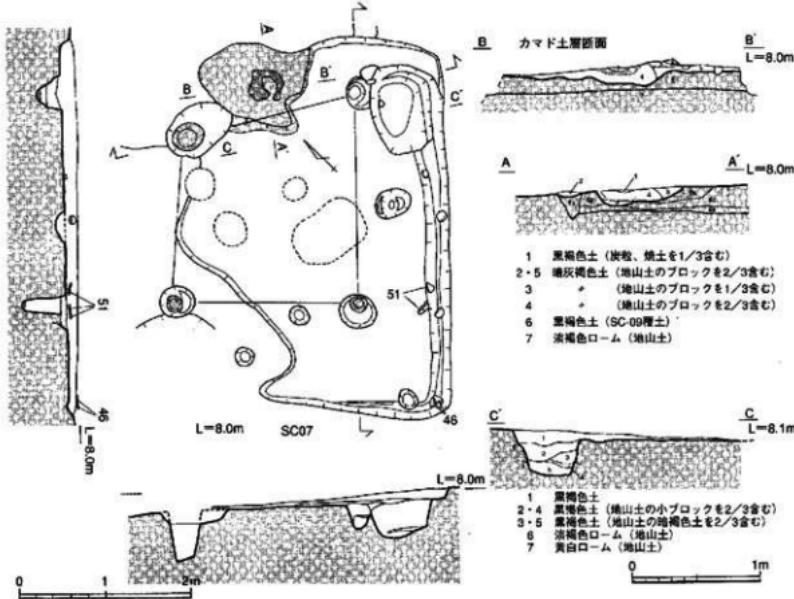


Fig.51 SC07実測図・窓土層断面図実測図 (1/60・1/40)

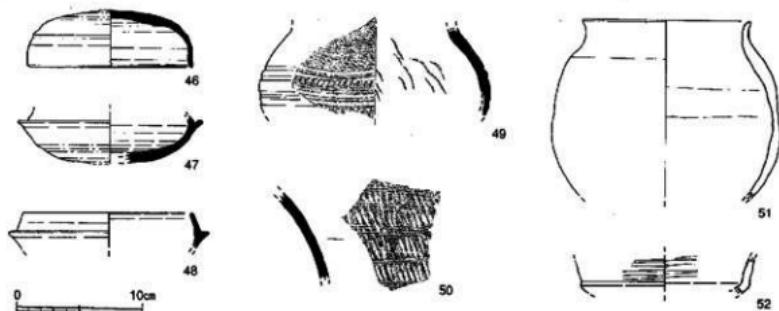


Fig.52 SC07出土遺物実測図 (1/4)

2. 土壙

調査区北東部を中心に、中世5基、近世2基の土壙を検出した。

中世の土壙は東側の第59次調査区の区画と同様の規制を受けるのか、SK01・02は1.3mの間隔をとつて南北方向に連なり、SK06・08はSK01・02の主軸から西に6m程の位置に8m程の間隔をとつて並行に配置され、ともに主軸を東西方向にとってSK01・02と直交する位置にある。

SK01 (Fig.54 PL.15)

調査区北東部に位置する。2.4×0.85mの長大な土壙で削平のため深さは10cmに満たない。主軸をN-7°-Eにとり、北側1.3m程のSK02が同一線状に位置する。覆土は炭粒を少量含む暗褐色土と地山上の小ブロックを1/2含む自然堆積層である。

出土遺物 (Fig.55 PL.21) 54は備前焼の擂鉢小片で、内外面には右回転のナデを施す。

SK02 (Fig.54 PL.16)

調査区北東隅に位置する。130×74・深さ20cmの隅丸方形のプラン、断面逆台形で床面は平坦である。主軸はN-6°-Wにとり、SK01の延長線上に位置する。覆土は地山土のブロックを1/2程含む暗褐色土で埋め戻されている。出土遺物は無いが、SK01との位置関係と同種の覆土である事から同時期の遺構と判断した。

SK03 (Fig.54 PL.16)

調査区北東のSK02の西隣に位置する。125×105cmの隅丸方形の定形化したプランでN-37°-Eと他と異なる方位をとる。断面は深さ30cm程の隅丸逆台形で、覆土は上層に暗褐色土、下層は地山土のブロックを2/3程含む客上で埋め戻されている。覆土中から土師器小片と玄武岩製の叩石片が出土しているが、SK02と同様の土質と埋土の様子から中世の時期と判断した。

SK06 (Fig.54 PL.16)

調査区南側の中央部に位置し、SD13を切っている。東西に長い173×92cmの長円形のプランで主

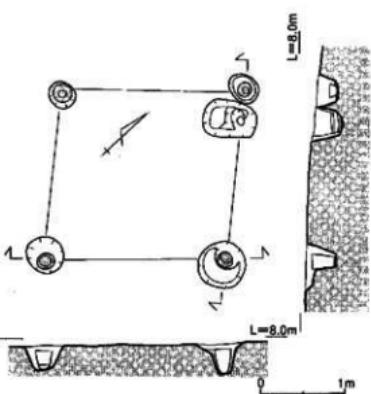


Fig.53 SC15実測図 (1/60)

軸をN-90°-Eにとり、SK01・02の軸と直交する位置にこれと6m離れて有る。断面は両端が2～3段の階段状を成し、深さは60cmと深い。土層は上・下層に暗褐色土の自然堆積層、中層は地山土・黒褐色土の小ブロックを2/3程含む厚さ20cm程の埋土を成している。

出土遺物 (Fig.55 PL.21) 遺物は上層から糸切りの土師器と鉄釘が検出された。53は頭部を扁平に叩いて折り曲げた和釘。頭部で7×8mm。体部は5×4～2×2mmの方形で長49mmが残存する。

SK08 (Fig.54 PL.16)

SC07のほぼ中央にこれを切って位置する。SK06同様、主軸をN-100°-Eの東西方向にとり、7.5m離れて並行する。90×60cmの長円形で深13cm、覆土は暗褐色土で土師器坏小片が出土した。

SK04 (Fig.56 PL.16)

調査区北東部に位置する。150×135cm程の円形プランで、断面は細かな不整形の段を成す深75cmの擂鉢状を呈する。覆土は灰褐色砂質土で肥前系・京焼系・高取系の陶磁片を検出した。

出土遺物 (Fig.55 PL.21) 55は肥前系染付の小碗か猪口の口縁で、内面に暗灰青色の團紋2条、外面に鮮青色の呉須で文様を描く。

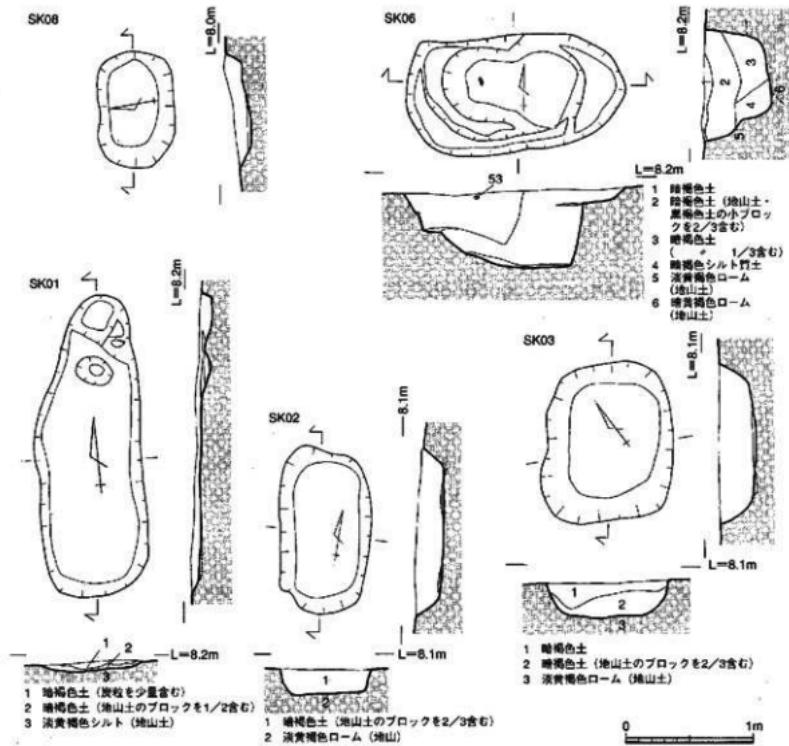


Fig.54 中世土壤実測図 (1/40)

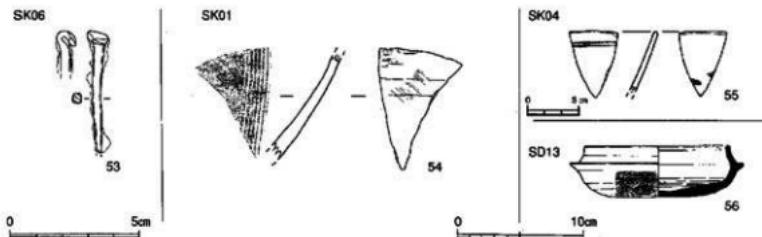


Fig.55 土壌・流路出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

SK05 (Fig.56 PL.16)

調査区北東部に位置する。主軸を N-86°-E にとる梢円形のプランで、92×75cmを測る。深さは 8 cm と浅い。覆土は灰褐色砂質土で黒耀石剥片のみ出土。覆土から近世の時期と判断した。

3. 立柱

掘方の径が 20~40cm 程の掘立柱建物の柱跡と考えられる大多数の柱穴以外に、径が 1 m を超える大型の掘方を持つ柱穴を 3 個検出した。長方形に近い掘方もある事から、律令期の大型建物の可能性も考慮して周辺を精査したが、此等に連なる柱穴が無く、それぞれが 3 m 以上の間隔があり、平面プランも異なる事から、それぞれが別個の立柱と判断した。

SP01 (Fig.57 PL.17)

調査区北東部の SC07・09 の東側に隣接する。103×74cm の隅丸方形プランで主軸を N-3°-W にとる。断面も矩形で深さ 40cm を測る。中央やや南側に径 18・深さ 42cm の柱痕跡がある。土層は全て暗褐色土・地山土のブロックを 1/3~2/3 程合む黒褐色の埋土である。一見落し穴の可能性も考えたが、南側の 6 次調査区で検出される縄文中期の竪穴造構の覆土は黄褐~赤褐色土で、本調査区のこの柱穴は全て黒褐色であり晚期~律令期の時期を示しており、集落内に落し穴を設けるには疑問がある。

SP02 (Fig.57 PL.17)

SP01 の南側 3 m 程に位置する。125×97cm の隅丸台形のプランで主軸を N-87°-E にとる。断面

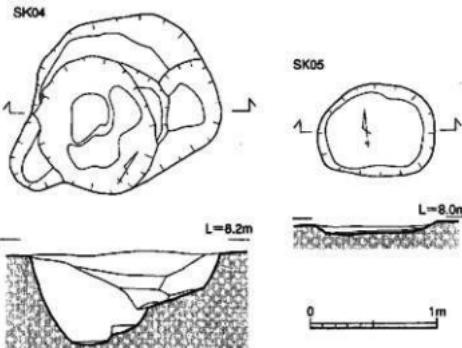


Fig.56 近世土壌実測図 (1/40)

も矩形で深さ 45cm を測る。中央西寄りに径 25~30cm 深さ 50cm の柱穴を設け SP01 を一回り大きくした形態であるが、平面南西隅に幅 15cm 程の小さな段を設ける。土層断面は柱根を中心暗褐色土を少量含むものと地山上のブロックを 2/3 程含む上層が放射状にブロックで固まっており、柱抜き取り後の埋戻しと考えられる。出土遺物は土師器の小片のみである。

SK10 (Fig.57 PL.17)

調査区北西部の SC07・11 間の緩斜面部に位置する。203×103cm の長大な不整形のプランで、整理時までは

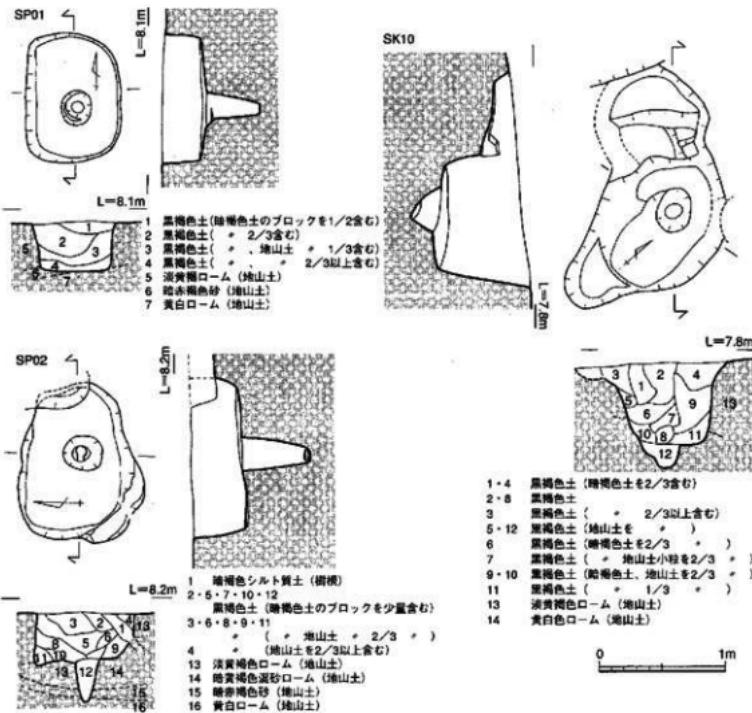


Fig.57 立柱実測図 (1/40)

土壤として処理していた。主軸は N-50°-W で等高線と直交方向に方位を取る。横断面は逆台形で深65cm。縦断面は北西側に高さ10cm程の低い段を2段設けている。中央部には径35cm・深20cm程の柱痕跡がある。土層は暗褐色土・地山土のブロックを1/3~2/3含む黒褐色土の埋土で、柱痕跡上方に円錐形の切り込みが有り、SP02同様柱抜き取り後の埋め戻しと考えられる。遺物は土器小片が3片出土したのみである。

4. 溝 SD13 (Fig.58 PL.18)

調査区中央南側に位置し、中世の上塙 SK06に切られている。1.5~3.5mの長さでクランク状にはば直角に屈曲し、N-104°-W 方向に延びている。幅は先端部で0.6m、端部で1.9mと、流水による法面の崩壊で幅が広がっている。断面は上位で幅1.95m・深1.25mの「V字」状、下位で幅2 m・深0.8mの「U字」状で、上位が深く鋭角に掘削されている。土層はともに最下層に暗灰色のシルト～粗砂の水性層が堆積し、上部は地山土のブロックを含む黒灰～暗灰色土で埋め立てている。埋土は北から南に、東から西に傾斜しており、同方向から埋め立てられている。

出土遺物 (Fig.55) 56は須恵器の壺で口径11.5・受部径14・器高4 cmを測る。立上がりは比較的高く14mmを測る。口唇内面は浅い沈線を成し、内底には同心円当具痕が残る。Ⅲa期を示す。

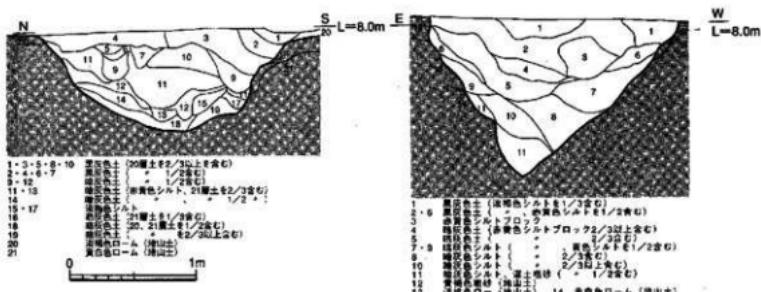


Fig.58 SD13 土層断面実測図 (1/40)

5. 包含層 (Fig.59 PL14)

調査区北西部にN-40°-W方向に緩く傾斜する斜面に堆積する。古墳時代の遺構の大部分はこの傾斜に並行する。遺構の大部分もこの包含層上から切り込んで残存している。

大きさは上層の黒褐色土と下層の暗褐色土とに二分され、SC09を始め遺構の大部分は上層の上面から掘削される。遺物は夜臼式期～古墳時代後期を中心に出土する。

出土遺物 (Fig.60・61 PL21) 57~63は夜臼II a ~ II b式を中心とする繩文土器である。57は口縁端部が短く外反する丹塗の広口壺で口径12.7cmを測る。58は浅鉢か高杯の壺部で張りの弱い肩から垂直に口縁がゆるく外反して立ち上がる。口径17cm。59は口縁が若干外湾して外に開く古朴の粗製深鉢で外面はヨコ条痕後ゆるいナデを施す。内面はヨコナデ後ケンマ。口径26.6cmを測る。60は強く屈曲する肩部から外反する口縁の鉢で、ヨコ条痕調整後ヨコナデを内外面に施す。61~63は刻目突帯文の深鉢でいずれも口唇端部に貼付し、体部は直線的に開く。61は外傾する口唇端部に断面円形のヘラ状工具で深めの刻目突帯を貼付する。62は薄い器壁で板木口による浅い刻目を施す。63は平坦な口唇外面に低い突帯を貼付し板木口でやや深めの刻目突帯を施す。内外面ともヨコ条痕調整後ヨコナデを施す。64~68は弥生土器である。64は口径25.2cmの中期初頭の壺で、断面三角の厚い口縁を成す。65も同期の壺の底部で径7.8cm・厚3.5cmと小さく厚く成形され、外底は上底を呈している。66は中期前半の壺の底部で径6.7cmを測る。外底は浅い上底で内面は炭化物が吸着され墨色を呈する。67は壺蓋で端部が撥状に短く開き径7.5cmを測る。深目の上底を成し、外面に指頭によるタテナデ痕が多く残る。68は後期の器台の口縁部で、短く屈曲して外方に開き、径12.5cmを測る。内面は後を成しヨコハケ調整が残る。69は壺胴部破片を用いた土器片円盤で径40×33・厚6mmを測る。両面からの剥離で円形に整形し、仕上げに砥いで両刃状に整えている。70~75は古墳時代後期の土器で、70~72は須恵器の壺蓋。70は口径16cmのIII a期の壺蓋で、体部外面と口唇内面が低い段を成す。71は口径12.8cmで口唇内

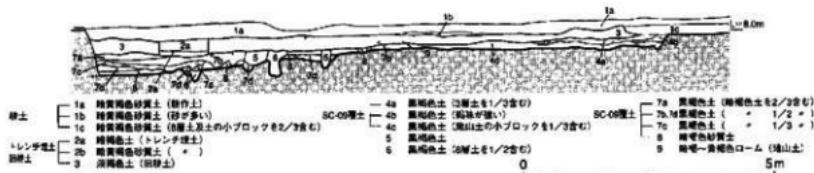


Fig.59 調査区北壁土層断面実測図 (1/100)

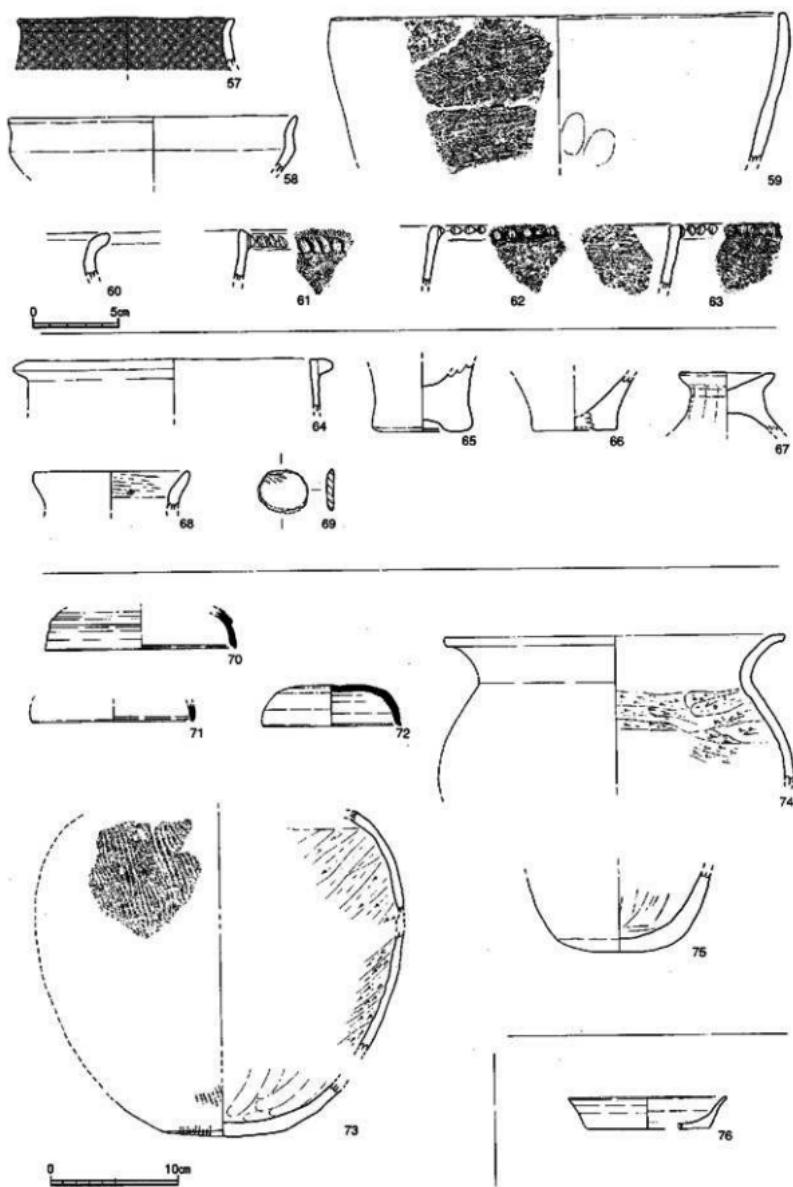


Fig.60 包含層出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)

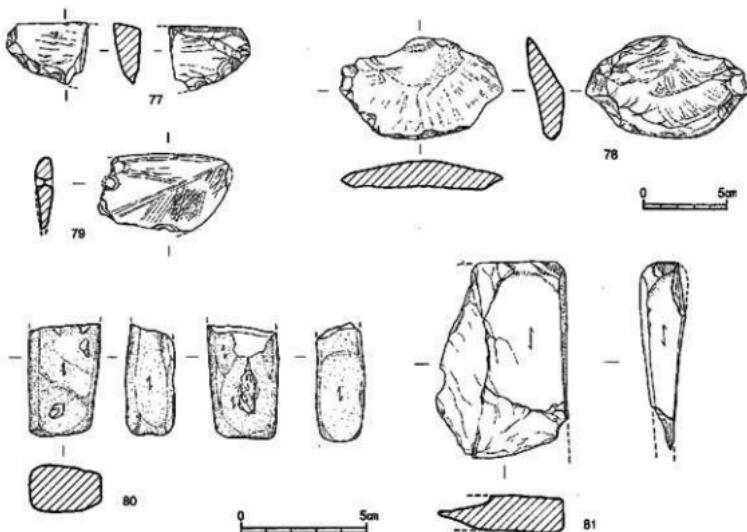


Fig.61 包含層出土遺物実測図2 (1/2・1/3)

面が低い段を成す。壺蓋の可能性もある。72は口径11・器高33cmを測る。口唇内面に若干段が残る。天井部は左回転のヘラケズリを施し、内底にタテナデを施して当具痕を消している。Ⅲ b期。73～75は土師器の壺である。73は軟質土器系の壺で、外面には木目並行のタテ方向の叩を底面まで施し、内面には右上がりの粗いケズリを施す。胴径は29cm程で下半は被熱し桃色を呈する。74は口縁が比較的大きく外反する壺で口径26.8cmを測る。内面頸部下にはヨコケズリを施し、外面の調整は不明。75は底径10cmの広い丸底の小型の壺で、内面はタテケズリ後ゆるくナデを施す。外面は摩滅のため調整は不明。被熱のため明赤褐色を呈する。76は口径9.8cmの土師器の壺で外底には回転糸切痕が残る。15～16世紀代の遺構の混入品と判断する。

77～81は石器で、77は古銅輝石安山岩製の搔器で、縦長剥片を素材とする。上面には自然面が残る。刃部は両面からの調整剥離で形成される。風化が進んでおり、縄文時代の早い時期の所産と考える。78は玄武岩の大型の横長剥片の素材で幅9.6cmを測る。叩石に転用されたもので、端部が敲打により著しい刃潰れを呈している。79は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の石包丁の半折品で表面暗黄灰色断面灰色を呈する。幅3cmと狭い逆台形を呈する後期のもので縫穴は外径4mm、78同様刃部を敲打に転用している。80は凝灰質砂岩製の手持ち砥石で幅2.8・厚2cmと小さい。折断面以外の全面を縦方向の砥ぎに用い、両平坦面を良く使っている。色調は淡黄灰色で断面は暗灰色を呈する。81は粘板岩製の仕上砥石で方形を呈する崩破片。厚1.5cmと薄い。残存する4面全てが砥面で、欠損部は両面剥離で方形に整えようとしている。

6. その他の出土遺物 (Fig.62・63 PL.22)

後世の遺構への混入品と柱穴出土品で、82～86は夜臼式の深鉢と壺。82は屈曲する肩部から口縁が外反するもので、口唇外面の突帯には刻目を施さない。外面はヨコナデで古相を示す。83は壺部よ

り下に刻目突帯を施すもので、断面隅丸方形の大きめの刻目を施す。84は口唇端部に大きめの突帯を貼付するもので体部外面はヨコ条痕調整を施し突帯には断面円形の細かな刻目を施す。85も端部に突帯を貼付するが低く、板木口を用いた刻目も浅い。86は縁肩部の小片で、径30~40cmの大型品である。3条のヘラ捕沈線上に斜めの沈線が入り、連続山形文の一部と思われる。87~92は弥生土器で、殆どSC09の混入品である。87は須玖I式の鋤先口縁壺で口径27cmを測る。摩滅により調整が不明瞭だが、内外に指頭圧痕が残る。88は須玖II式の鋤先口縁壺で、口径31.4cmを測る。摩滅のため丹塗の有無は不明。89・90は城ノ越式の壺で、89は「逆L字」の平坦口縁を呈する。90は断面三角形の口縁を呈する壺で口径25.4cmを測る。外面に小さな三角突帯を貼付し、内面はヨコ・ナナメ板ナデ後ヨコナデ・ゆるいケンマを施す。91は須玖I式の「T字」口縁の壺で、口径38cmを測る。外面は低い三角突帯以下にタテハケを施し、内面はヨコ板ナデ後ケンマを施している。92は須玖II式の鋤先口縁の高壺で口径26cmを測る。摩滅が著しいが、内・外面上に丹塗が残る。93は土師器塊の底部で底径6.8cm。胎土は精良で明黄褐色を呈する。SC15の柱穴内からの出土で、一間以上に組み合う柱穴が無く、混入と判断した。94は土師器の皿で口径10.4・器高1.7cmを測る。12世紀代。

95は細石核で、小さなスコリアを含む黒耀石を用いる。2.7×1.5・高さ1.5cmの福井型で、打面は正

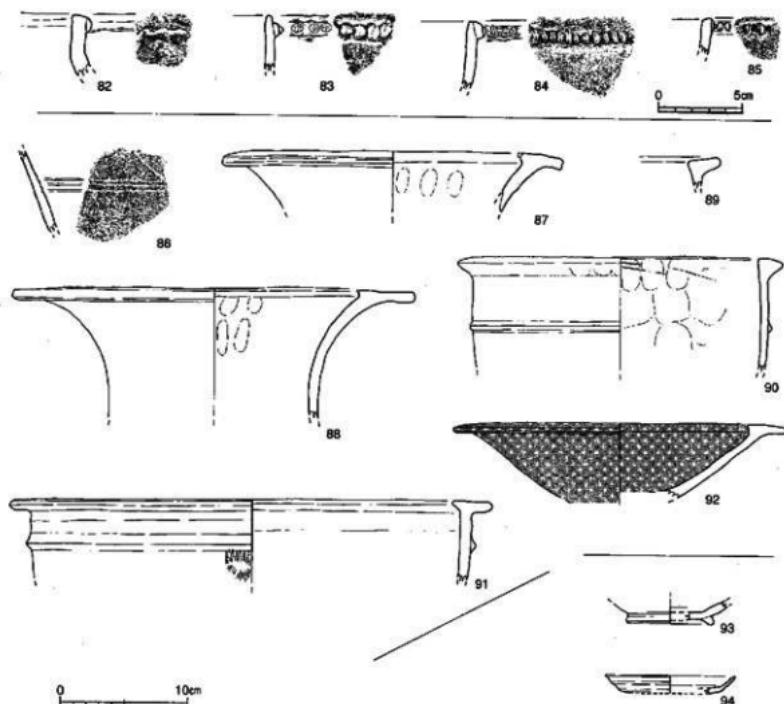


Fig.62 その他の出土遺物実測図1 (1/3・1/4)

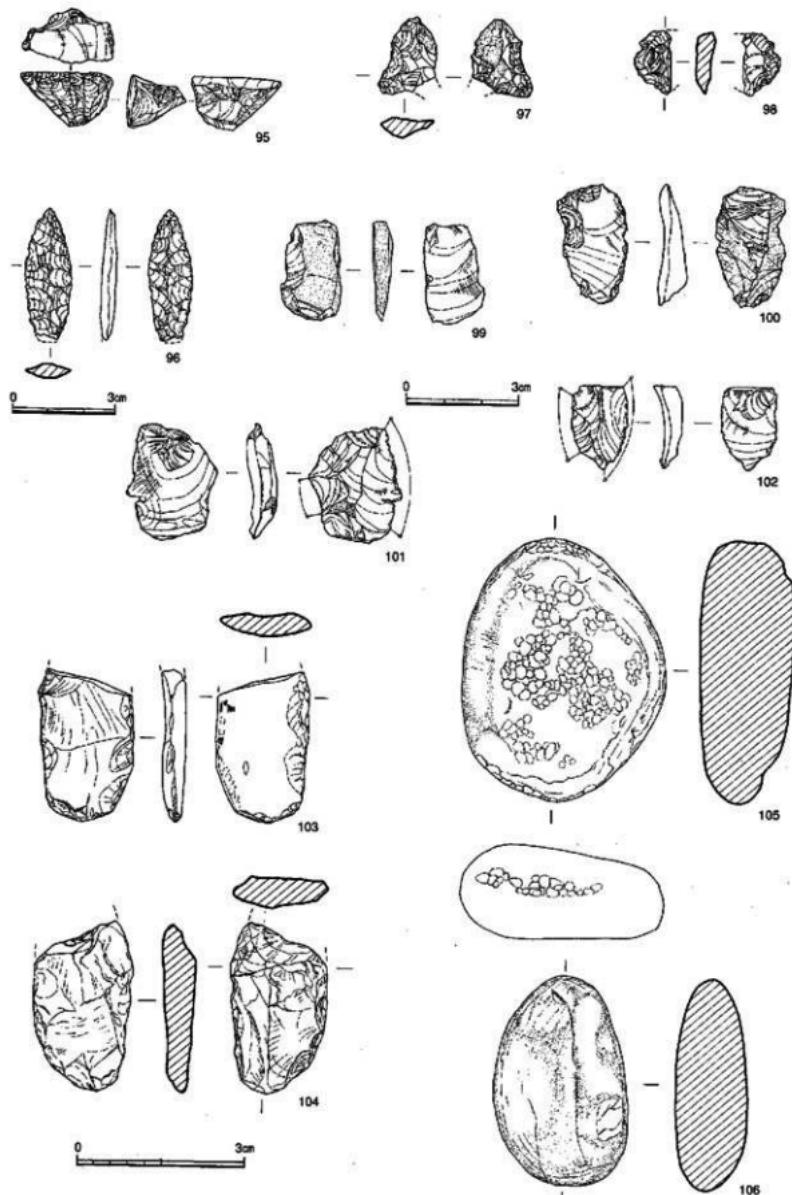


Fig.63 その他の出土遺物実測図2 (3/4-2/3-1/3)

面左からの一回の剥離で形成される。右側面と底面は正面からの調整剥離。左側面には自然面が残る。96は古鋼埠石安山岩製の柳葉形の小型の尖頭器で3.9×1.3cm・厚4.5mmを測る。交互剥離による丁寧な整形である。97~102は黒耀石製。97は石鏃で2.4cmを測る。両面に自然面を残す。晩期か。98は長1.7cmの楔型石器の半折品。99は長2.6cmの打面調整剥片を用いた搔器で裏面と左側面に角礫の黒耀石原石の自然面が残る。先端に主剥離側から二次調整を施す。100も同じく打面調整剥片を用いたもので楔に用いたのか上下が貝殻状に潰れ右側縁に使用痕が残る。101は打面再生剥片を用いたもので両側に使用痕が残る。102も同様で両側縁に使用痕が残る。103~106は玄武岩製。103は横長剥片を用いた偏平打製石斧の刃部で、幅5.5・厚1.3cmを測る。先端部は使用のため細かな多数の階段状剥離と摩耗が見られる。104も偏平打製石斧の半折品で、幅5.8・厚1.8cmを測る。折断面を向面調整で剥離する。叩石に転用され両側が敲き減っている。105は磨石で全周と表面に細かな敲打痕があり、全面に擦痕が認められる。15.6×12.2・厚5.6cmで重165gを測る。106は緑色片岩製の磨石で側面全周に細かな敲打痕があり、全面に擦痕を有する。12.5×7.7・厚4.3cmで177gを測る。

3) 小 結

今回の調査では細石核の旧石器から確認されたが、遺構は繩文晩期末の円形略穴住居1軒、4世紀後半~末の滑石白玉工房の竪穴住居1軒、6世紀前半の竪穴住居1軒と同期と思われる四柱式の住居1軒、6世紀後半の階段状に屈曲した溝1条、古墳時代の立柱3基、15~16世紀代の矩形に配置された土壙5基。近世の土壙2基、段落ち1ヶ所である。

夜臼式期の遺構・遺物の検出は第64次調査と第1~101次調査の有田台地中央部の300×200m環溝と小田部台地の第100次調査が有り、分布は西側に片寄っている。

住居は2本の棟持柱と円形の壁に沿った側柱とからなる「松菊里」タイプであり、有田遺跡では初の検出である。出土した土器は夜臼II b式が殆どで板付I式を伴って良い時期であるが、板付式は一点も検出されていない。

古墳時代の集落は遺跡全面に展開しているが、滑石玉工房の検出は初めてである。東区三苦遺跡2・3次調査で同じく滑石玉工房を検出しているが、こちらは素材を方形に擦り切って組織的・効率的に作製している。本調査区では意的に剥離した素材を一点ずつ打ち欠いて整形する無駄の多い技法であり製作技法は異なる。時期は本調査区は4世紀後半~末、三苦遺跡は6世紀前半であり、技法の進化ととらえられる。

立柱3基は覆土から古墳時代と考えられ、台地の西端に位置し、近辺に墓域は無く、集落入口の門柱的な遺構と思われる。

溝SD13はⅢa期の須恵器を検出したが、屈曲の方向は磁北との直交・並行関係にあり地形には沿わず方位を意識している。

中世の土壙は2基ずつ直交する位置関係に配置され、東側の第59・60次調査の方形区画溝の方位に近く、この影響下におかれている。

図版



有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）



(1) 第1区第1面全景(南西から)



(2) 第1区第2面全景(南西から)



(3) 第1区第3面全景(南西から)



(1) 第2区遺構面全景（西から）



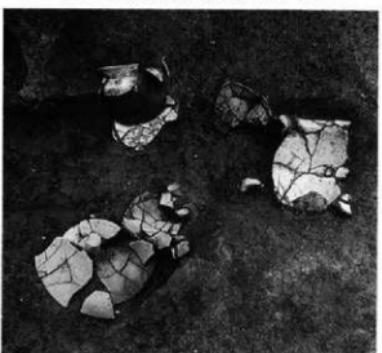
(2) 第2区遺構面南側（西から）



(1) SD02方形周溝状遺構（南から）



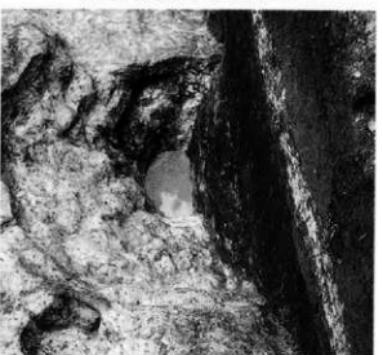
(2) 第1区 SD02方形周溝状遺構検出状況(南から)



(3) 土器群検出状況（東から）



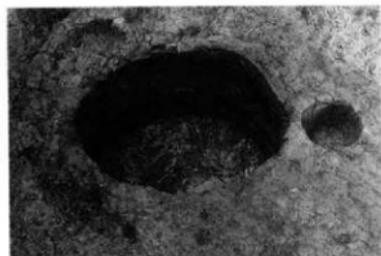
(4) 土器群検出状況（北から）



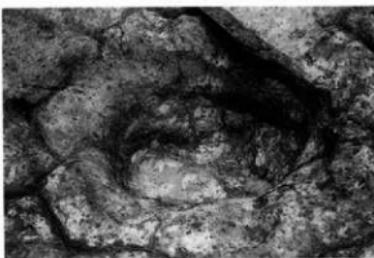
(5) SE01（南から）



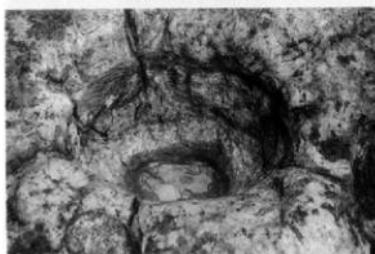
(6) SE02（西から）



(1) SE03 (東から)



(2) SK01 (北から)



(3) SK02 (西から)



(4) SK04 (西から)



(5) SX03不定形土坑 (南から)



(6) 滑石製錘出土状況



(7) SD03 (北から)



(1) SX01製鉄遺構（西から）



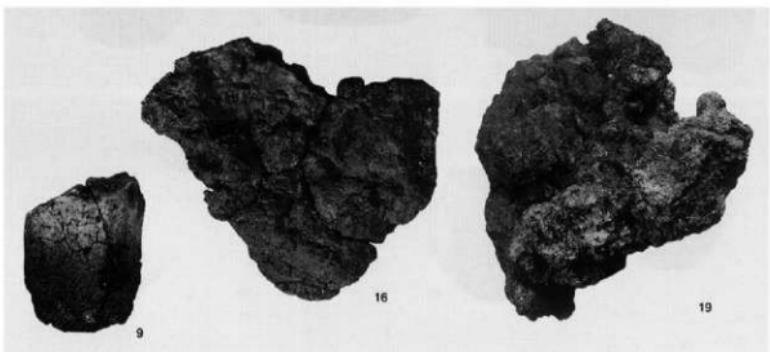
(2) SX02製鉄遺構（南から）



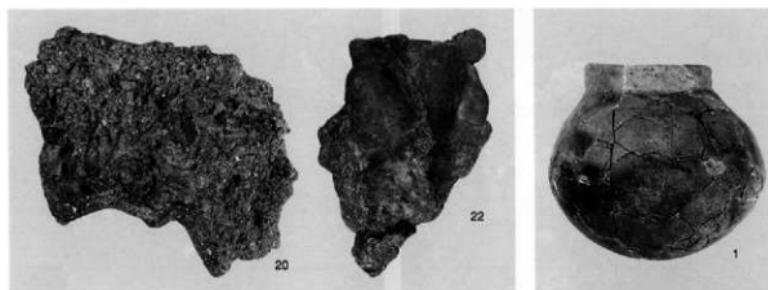
(3) 同炉底塊出土状況（南から）



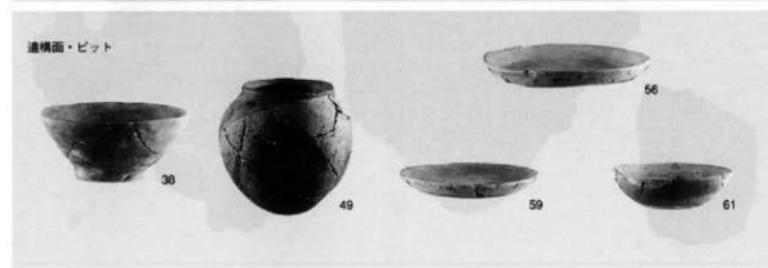
(4) 第1面鉄滓出土状況（SX01上面）



(5) 製鉄関連遺物 1 (縮尺不統一)

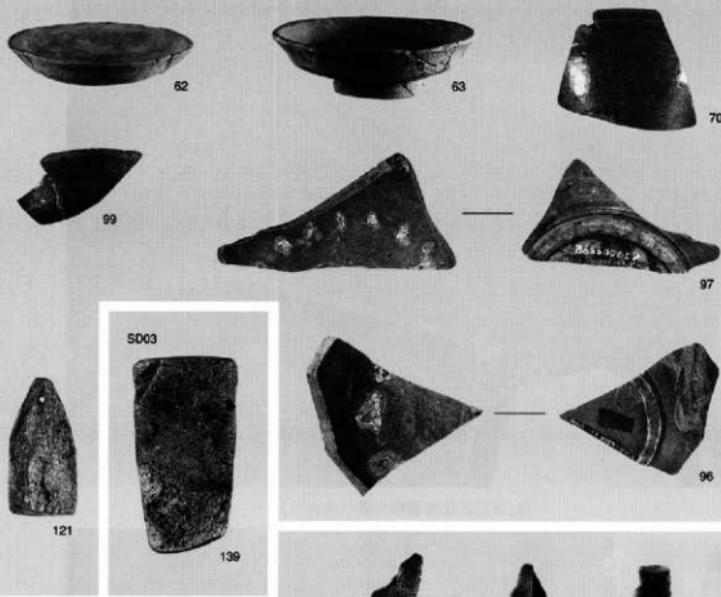


(1) 製鉄関連遺物 2 (縮尺不統一)

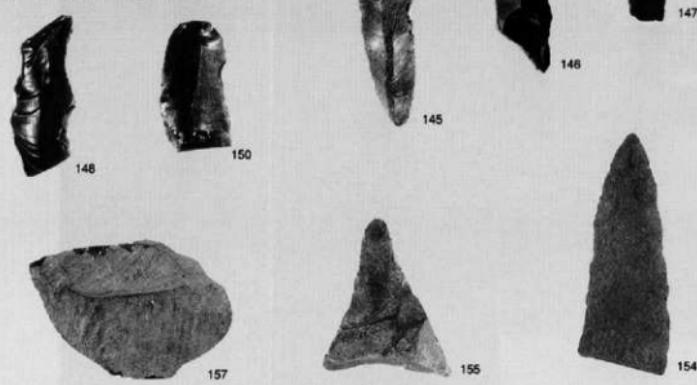


(2) 各造構出土遺物 1 (縮尺不統一)

包含層出土遺物



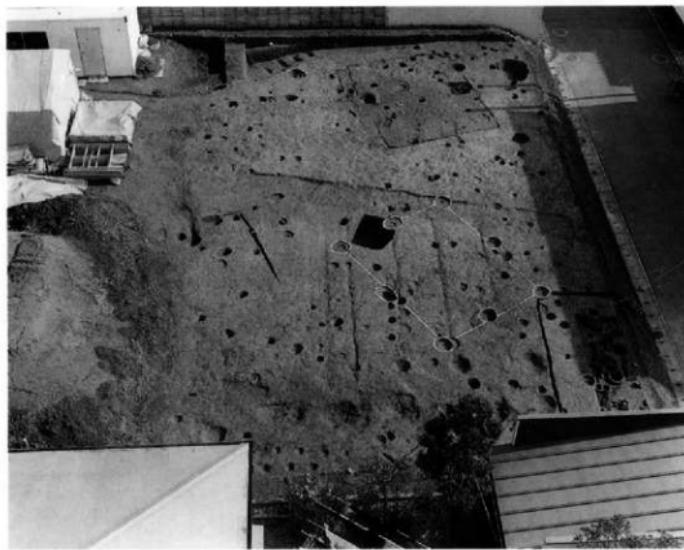
各遺構出土旧石器時代・縄文時代石器



各遺構出土遺物 2 (縮尺不統一)



(1) 調査区北側遺構全景（南から）



(2) 調査区南側遺構全景（西から）



(1) SB23 (北西から)



(2) SC13 (北から)



(3) SC14 (南東から)



(4) SC15 (西から)



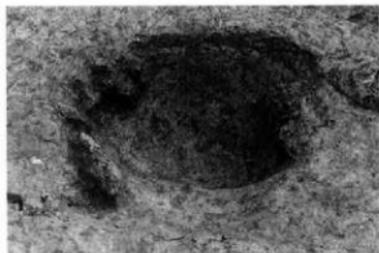
(5) SC17-21 (北から)



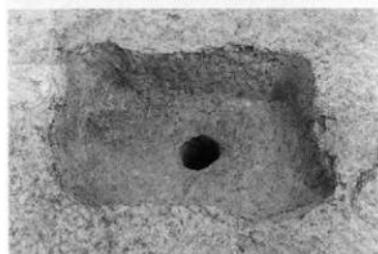
(6) SC17貼床除去後(北から)



(1)SC14内土坑 SK22 (南東から)



(2)SC17内土坑 SK20 (北から)



(3)SK08 (南から)



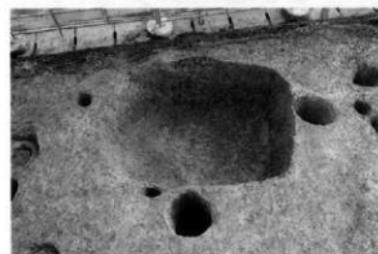
(4)SK10 (南東から)



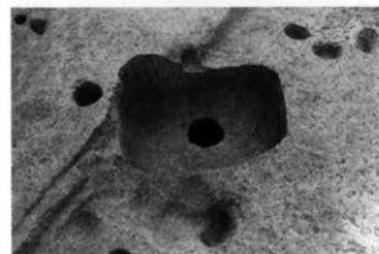
(5)SK12 (北から)



(6)SK16 (北東から)



(7)SK18 (北から)



(8)SK26 (北東から)



(1) SD01・04(西から)



(2) SD02・04・11(南西から)



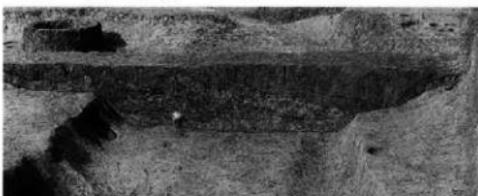
(3) SD02(南西から)



(4) SD01土層ベルト(西から)



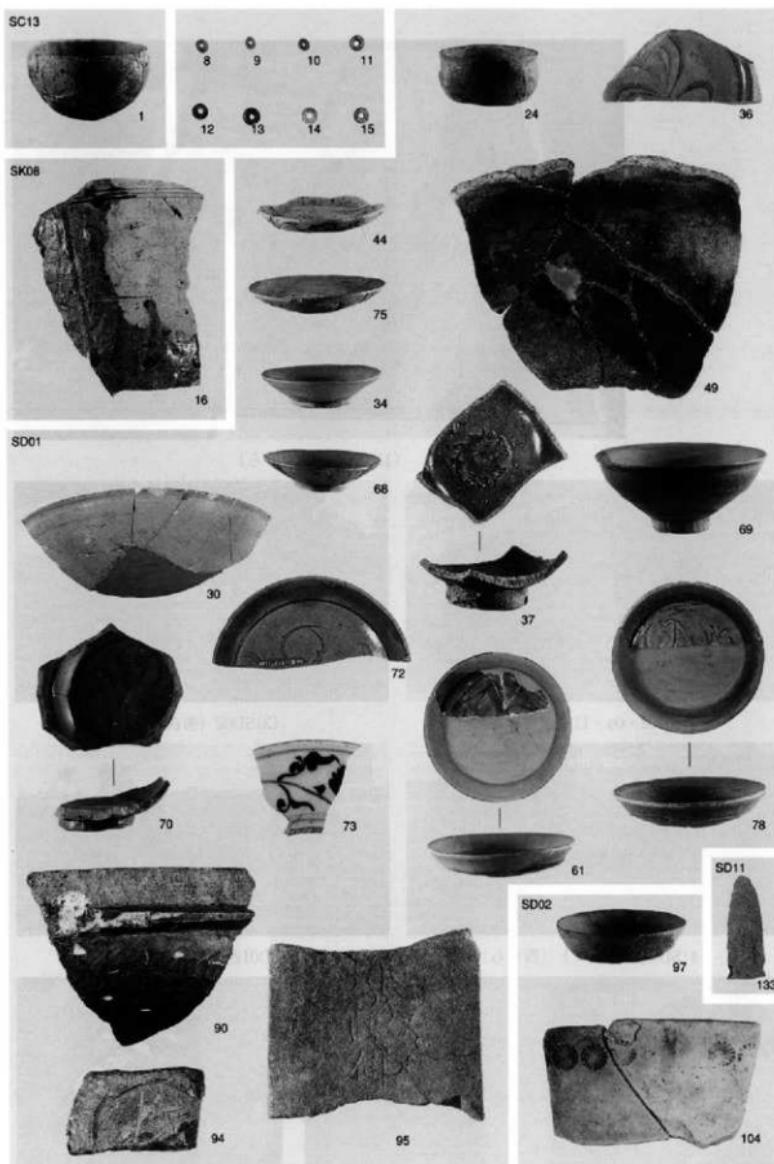
(5) SD01西壁土層(東から)



(6) SD02・11土層ベルト(南から)



(7) SD01検出標群



各遺構出土遺物(縮尺不統一)



(1) 調査区からの遠望（南から）



(2) 調査区全景（南から）



(1)調査区北壁土層断面（南から）



(2)SC11（北から）



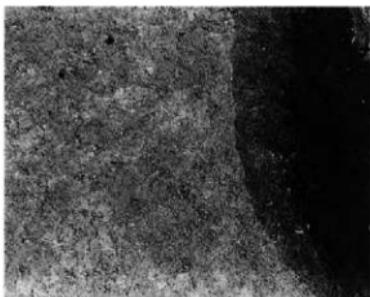
(3)SC09（北から）



(4)SC09遺物出土状況（南東から）



(5)SC09出土状況（北東から）



(1)SC09床面石屑出土状況（西から）



(2)SC07（南西から）



(3)SC07竈部分（南西から）



(4)SC07竈土層断面（南から）



(5)SC15（南西から）



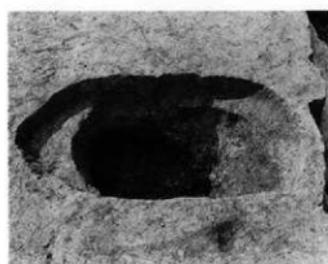
(6)SK01（南から）



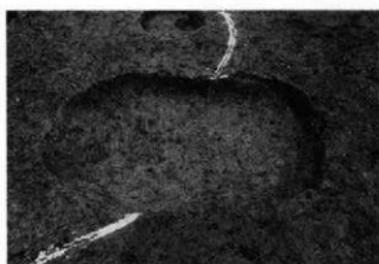
(1)SK02 (南から)



(2)SK03 (南から)



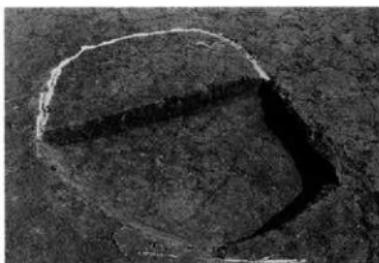
(3)SK06 (北から)



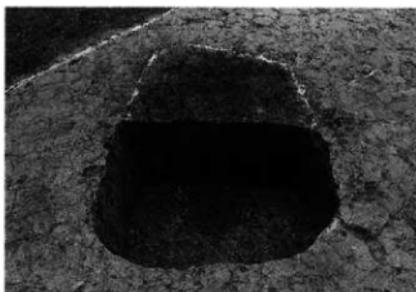
(4)SK08 (南から)



(5)SK04土層断面 (南西から)



(6)SK05土層断面 (西から)



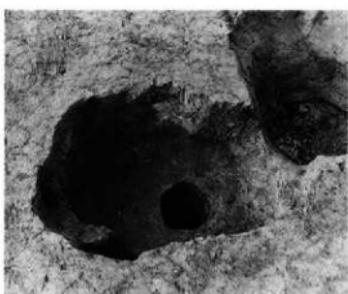
(1) SP01柱穴検出状況（南から）



(2) SP01（東から）



(3) SP02土層断面（西から）



(4) SP02（南から）



(5) SK10柱穴検出状況（南東から）



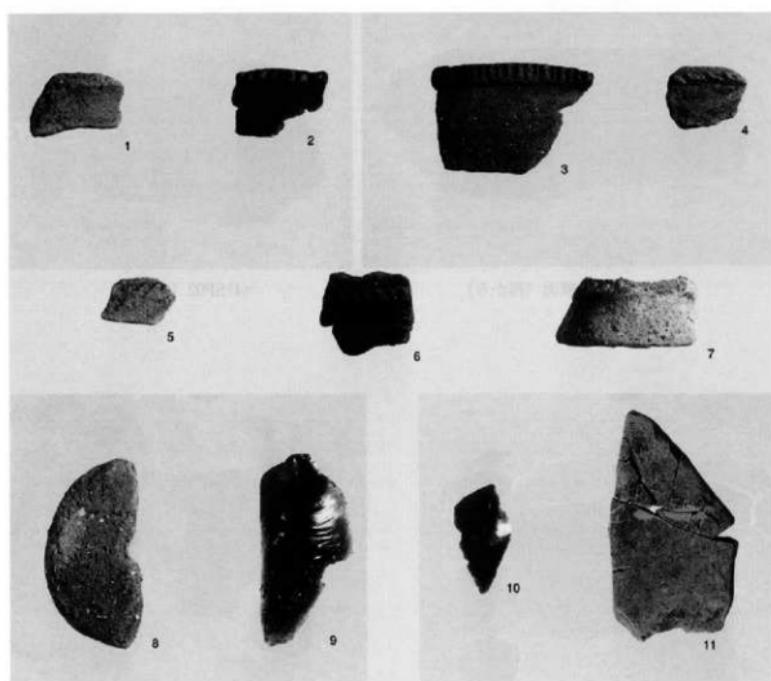
(6) SK10（北から）



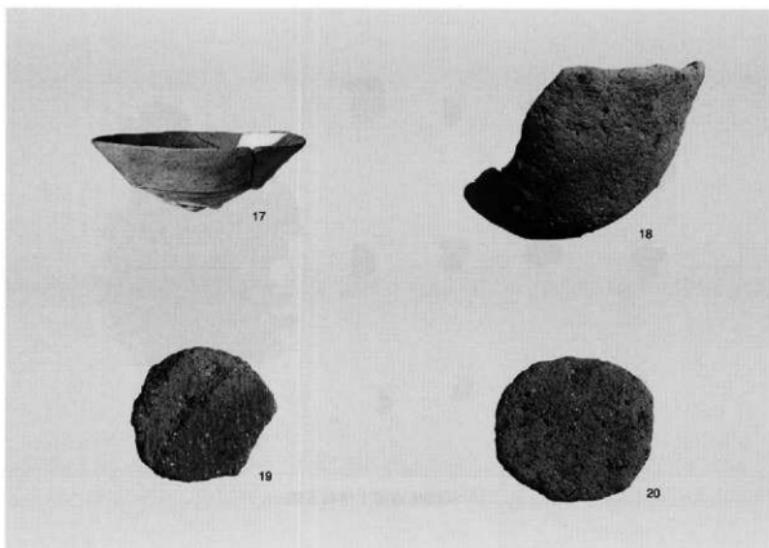
(1)SD13土層断面（北から）



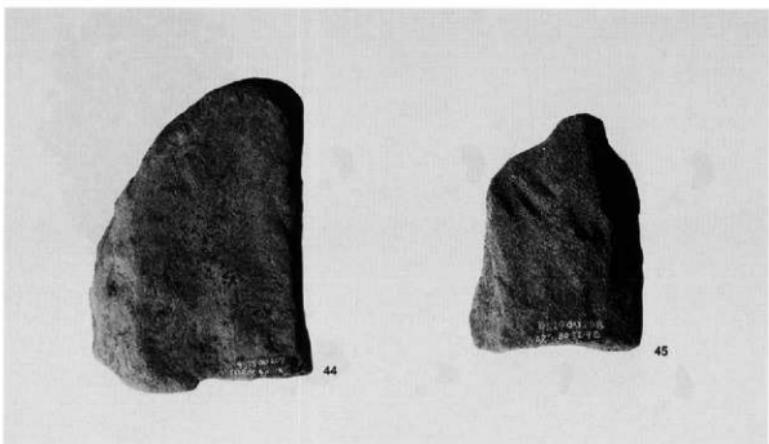
(2)SD13（南東から）



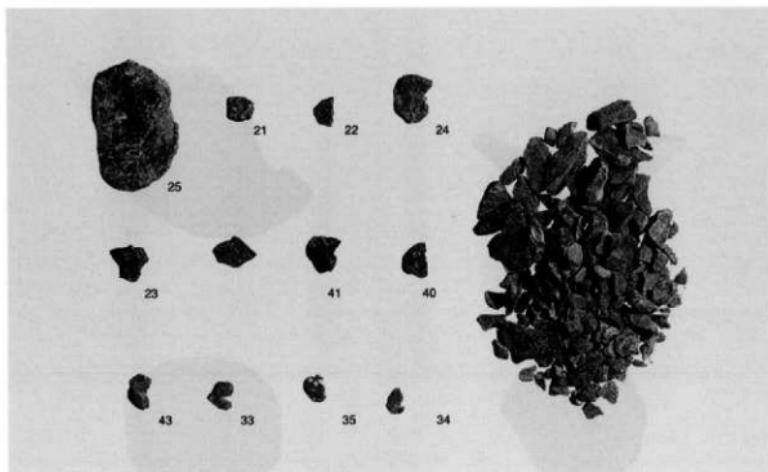
(3)SC11出土遺物



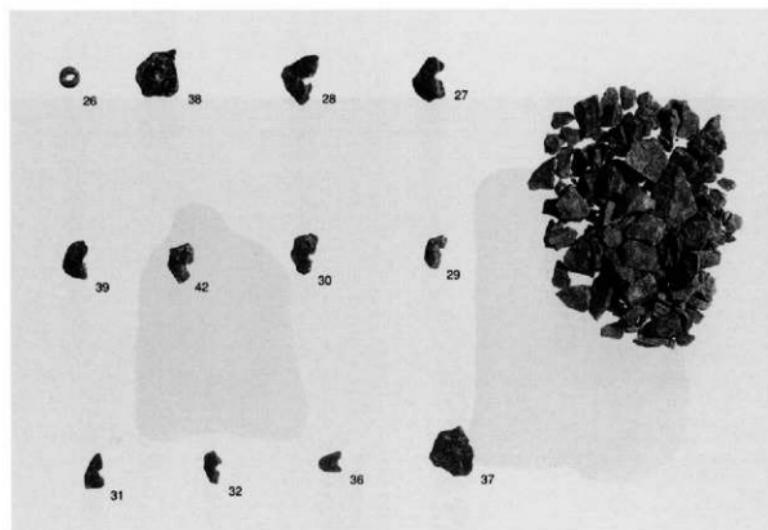
(1)SC09出土土器



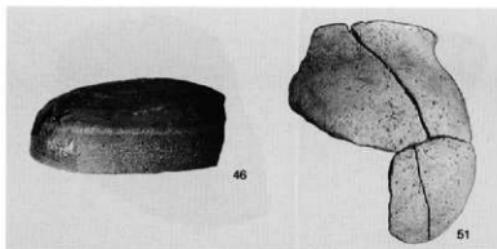
(2)SC09出土石器



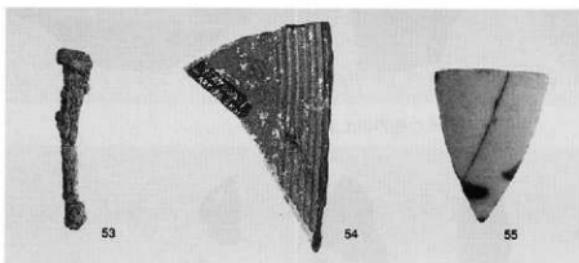
(1) SC09床面出土滑石玉類



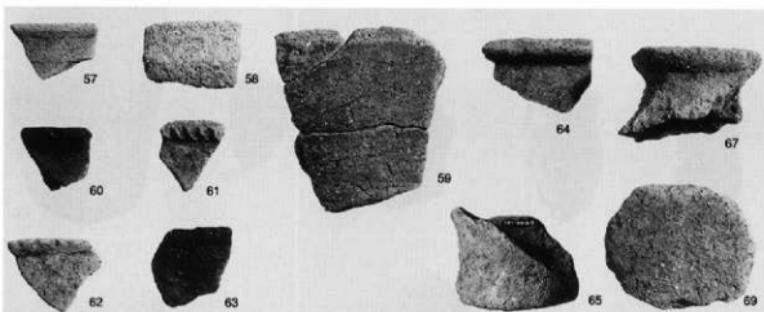
(2) SC09土壤出土滑石玉類



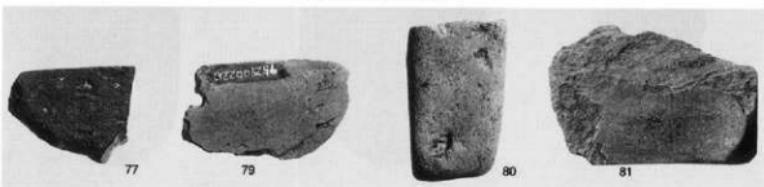
(1) SC07出土土器



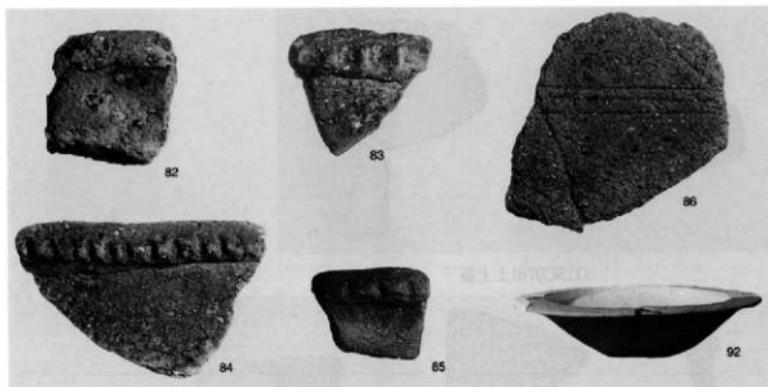
(2) 土壤出土遺物



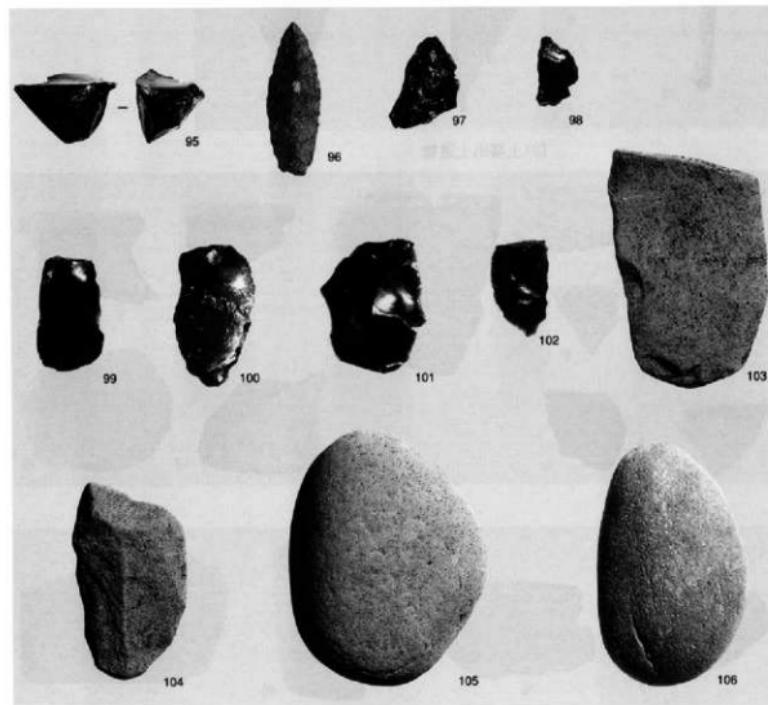
(3) 包含層出土土器



(4) 包含層出土石器



(1) その他の出土土器



(2) その他の出土石器

有田・小田部 第36集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第684集

2001年（平成13年）3月30日

発 行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 梶富士印刷社

